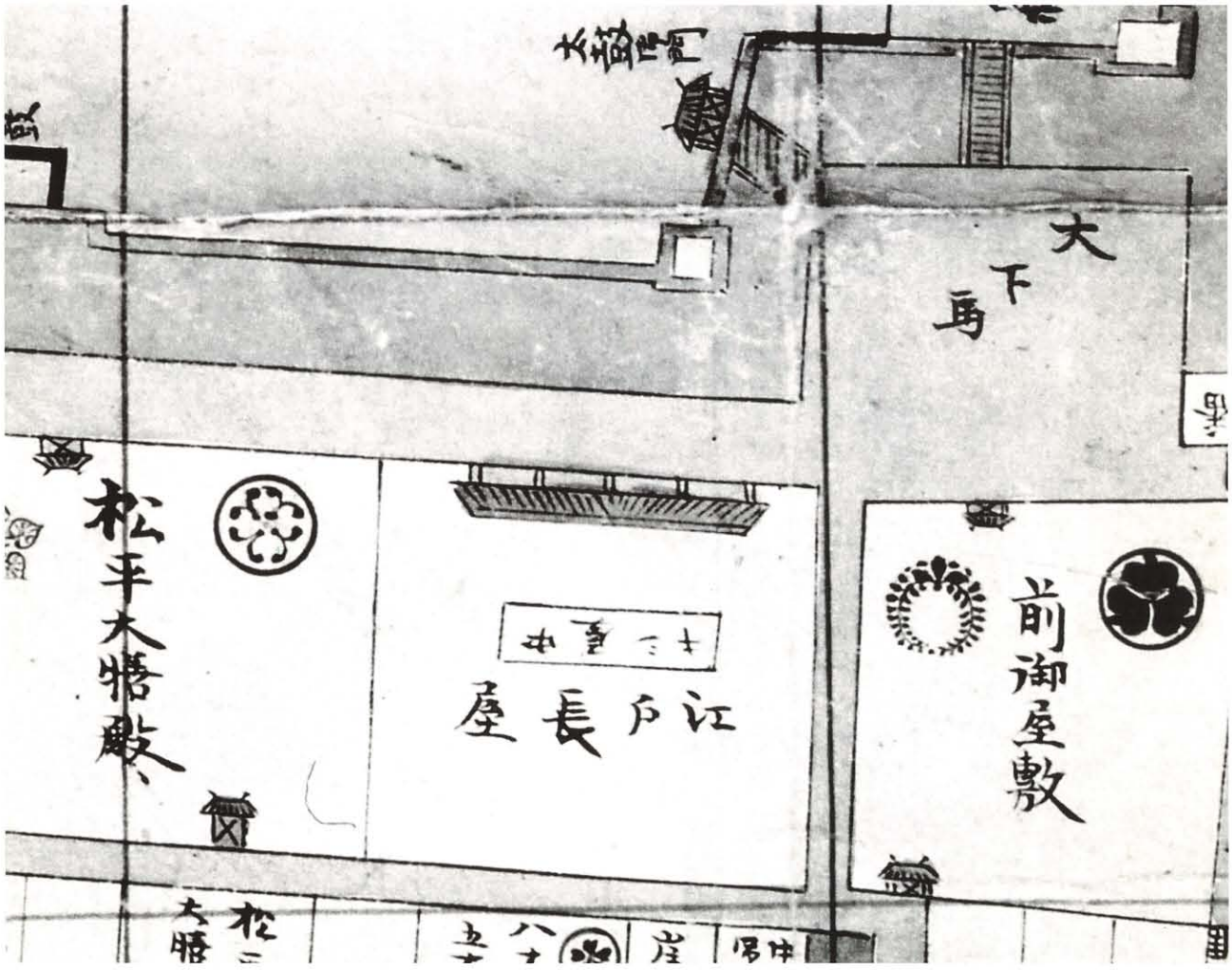
高松海岸線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第１冊

高松城跡(江戸長屋跡Ⅰ)



2008年3月

高松市教育委員会

例　言

1．本書は高松海岸線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第１冊で，高松市丸の内に所在する高松城跡（江戸長屋跡Ⅰ）の調査報告を収録した。
2．発掘調査及び整理作業については高松市教育委員会が実施した。
3．調査から報告書作成に至るまで，下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意としたい。
香川県教育委員会，四国通商株式会社，片桐孝浩（香川県教育委員会），松本和彦（香川県歴史博物館）（敬称略）
4．高松城跡（江戸長屋跡Ⅰ）の調査は，文化振興課文化財専門員小川賢・渡邊誠が行った。
5．以下の業務については，委託業務として行った。
基準点打設：株式会社イビソク
遺物保存処理：株式会社吉田生物研究所
遺物写真撮影：西大寺フォト（図版 15-1 を除く）
6．本書の執筆は第３章第３節と第４章第１節を渡邊が行い，それ以外は編集と合わせて小川が行った。
7．本文の挿図として，国土地理院発行地形図５万分の１「高松」及び高松市都市計画図２千５百分の１「高松市街北部」を一部改変して使用した。
8．発掘調査で得られた資料は，高松市教育委員会で保管している。
9．本報告書の高度値は海抜高を表し，方位は座標北（世界側地系）を表す。
10．本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SA：柵列状遺構　SD：溝状遺構　SK：土坑　SP：柱穴　SX：性格不明遺構
11．土壌及び土器観察の色調表現は，新版 標準土色帖（農林水産省技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色表監修）に拠る。

目　次

第１章　調査の経緯と経過
第１節　調査の経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 1

第２章　地理的・歴史的環境
第１節　地理的環境 …… 2
第２節　歴史的環境 …… 2

第３章　調査の成果
第１節　調査方法 …… 4
第２節　主要遺構と基本層序 …… 4
第３節　第２遺構面の遺構・遺物 …… 8
第４節　第１遺構面の遺構・遺物 …… 17

第４章　まとめ
第１節　中世以前について …… 38
第２節　近世以降について …… 38

＊表紙挿図は，「高松市街古図」（高松市歴史資料館所蔵）

挿 図 目 次

第 1 図　調査地位置図 (1/5,000)
第 2 図　遺跡位置図 (1/50,000)
第 3 図　高松城跡周辺発掘調査地位置図 (1/10,000)
第 4 図　第2遺構面遺構配置図 (1/80)
第 5 図　第1遺構面遺構配置図 (1/80)
第 6 図　調査地点層序図 (高さ : 1/40, 幅 : 1/80)
第 7 図　SB201 平・断面図 (1/40)
第 8 図　SB201 出土遺物実測図 (1/3)
第 9 図　SD201 平・断面図 (1/40・1/80) ・出土遺物実測図 (1/3)
第 10 図　SD201 出土遺物実測図 (1/3) ・SD202・SK210 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3)
第 11 図　SK202・203・208・209・215 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3)
第 12 図　SP203・224・229・231・253 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3)
第 13 図　第2遺構面下層検出平面図 (1/80), 掘削時出土遺物実測図 (1/3)
第 14 図　SK213・214 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3)
第 15 図　第2遺構面遺構検出時出土遺物実測図 (1/3)
第 16 図　SA101 平・断面図 (1/80)
第 17 図　SE102 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3), SE102 検出時出土遺物実測図 (1/3, 1/4)
第 18 図　SE101 平・断面図 (1/40)
第 19 図　SE101 出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/2)
第 20 図　SK101 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3)
第 21 図　SK102・105・106・108 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/2)
第 22 図　SK104 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/2)
第 23 図　SK114・115・116・119 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3)
第 24 図　SK120・122・126 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3, 1/2)
第 25 図　SK112・118 平・断面図 (1/40), SK112 出土遺物実測図 (1/3)
第 26 図　SK112 出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/2)
第 27 図　SK112・118 出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/2)
第 28 図　SK125 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3)
第 29 図　SK125 出土遺物実測図 (1/2)
第 30 図　SK113 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3, 1/2)
第 31 図　SP105・102 出土遺物実測図 (1/3)
第 32 図　SX101 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/2)
第 33 図　SX103 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/2)
第 34 図　SX102 平・断面図 (1/40), 出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

写 真 図 版 目 次

図版1
1 第2遺構面全景 (南から)
2 第1遺構面全景 (北から)
図版2
1 調査地西壁土層 (南東から)
2 調査地南壁土層 (北から)
3 調査地北壁土層 (南から)
4 SX101 断面
5 SA101 P-2 (東から)
6 SA101 P-3 (東から)
7 SA101 P-4 (東から)
8 SA101 P-5 (東から)
図版3
1 第2遺構面 (北から)
2 第2遺構面北西部上層遺構 (北西から)
3 第2遺構面北西部下層遺構 (南西から)
図版4
1 SD201 (南から)
2 SD201 (北から)
3 SD201 断面
4 SB201 (南から)
5 SK204 断面
6 SK213 (西から)
7 SK213 遺物出土状況
図版5
1 第1遺構面北部 (南西から)
2 第1遺構面南部 (西から)
3 SX101・SE102・SK125 (西から)
図版6
1 第1遺構面 (南から)
2 SA101 (北から)
3 SE101 (西から)
4 SE102 (東から)
5 SK112・113 (西から)
6 SK114・115 (南西から)
図版7
1 SX103 (南東から)
2 SX103 断面
3 SK125 (西から)
4 SK102 断面
5 SK104 断面
6 SK105 断面
7 SK106 断面
8 SK108 断面
図版8
1 SK112 断面
2 SK113 断面
3 SK114 断面
4 SK115 断面
5 SK116 断面
6 SK118 断面
7 SK119 断面
8 SK122 断面
図版9
1 第2遺構面出土平瓦 (凸面)
2 第2遺構面出土平瓦 (凹面)
図版 10
1 第2遺構面出土弥生土器
2 第2遺構面出土土器・陶磁器
3 SK104 出土瓦
4 SK112 出土瓦・鉄釘
図版 11
SK112 出土土器・陶磁器
図版 12
1 SK113 出土土器・陶磁器・鉄釘
2 SK125 出土陶磁器
図版 13
1 SK101 出土土器・陶磁器
2 SX101 出土遺物
3 SX102 出土陶磁器
4 SX103 出土遺物
図版 14
1 SE102 検出時出土遺物
2 SE101 出土墨書・刻書土器
3 SK125 出土土型
4 SK210 出土土錘
図版 15
1 SE101 出土鏡
2 SK113 出土小柄
3 SK112 出土金属製品1
4 SK112 出土金属製品2

第1章　調査の経緯と経過

第1節　調査の経緯（第1図参照）

現在，旧高松城中堀の堀端に相当する都市計画道路，高松海岸線は拡幅・整備事業が計画されている。この事業の実施にあたっては，当路線が国史跡高松城に北接していること，かつ旧高松城跡の武家地と南接していることから，事業主体である高松市（都市計画課）と高松市教育委員会（以下，市教委）との事前協議を経て，市教委が拡幅工事の範囲について逐次，試掘調査を実施し，埋蔵文化財の包蔵状況の確認を行ってきた経緯がある。

当調査地点については同路線の拡幅部分に該当するものではないが，同事業における民有地との土地交渉に係る範囲となっており，北接する拡幅部分については平成15年度に試掘調査が実施され，旧高松藩での広範囲にわたる武家地である江戸長屋に比定される地区であること，これと合わせて遺構・遺物の確認状況を考慮した結果，当地点も含め周知の埋蔵文化財包蔵地に該当するものと判断された。

この後，高松市は当地点の土地交渉に係り，土地造成を行う計画を立て，平成19年5月16日に埋蔵文化財発掘通知（文化財保護法第94条第1項）を提出し，これに対し香川県教育委員会から事前に発掘調査を実施する旨の指導があった。

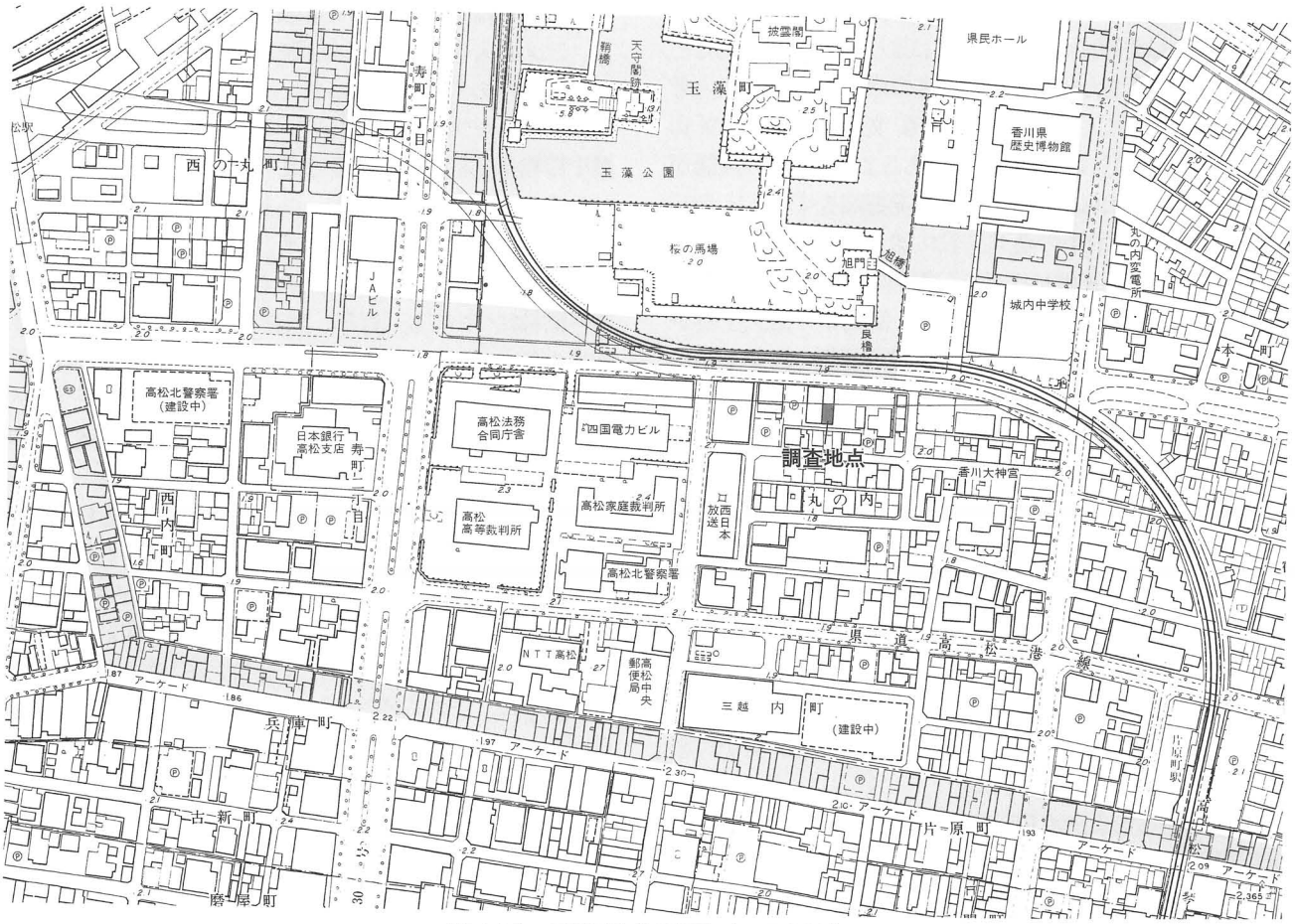
以上のような経緯のもと，同年6月から当地点の約84㎡を対象に市教委が発掘調査を実施することとなった。

第2節　調査の経過

発掘調査は平成19年6月18日から，同年7月31日の間で実施した。調査面積は約84㎡で，遺構確認面については2面と想定した。市街地にあって矮小な敷地内での調査となったことから，廃土及び排水の処理については苦慮した。また期間の半ばには台風接近などにより，調査を中断した日が続いた。

以下，発掘調査期間中の主要な工程を記す。
6月18日～20日：重機掘削，遺構面精査
6月21日～7月17日：第1遺構面調査
7月18日：第2遺構面まで重機掘削
7月19日～27日：第2遺構面調査
7月30・31日：埋め戻し・撤収作業

整理作業については，高松市教育委員会文化振興課円座整理事務所にて調査終了時から翌年3月末までの期間で実施し，委託業務とした遺物写真撮影及び遺物保存処理業務についても同期間内に完了した。



第1図　調査地位置図（1/5,000）

第2章　地理的・歴史的環境

第1節　地理的環境（第2図参照）

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に，低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地，東側が立石山山地によって取り囲まれた東西20k m，南北16k mの範囲に及んでいる。またこの平野は，讃岐山脈から流下し，北へ流れて瀬戸内海へ注ぐ香東川をはじめ本津川・春日川・新川などによって形成された扇状地でもある。さて，高松城の城下町として発展した高松市街地は，香東川の東流路が瀬戸内海に注ぐ河口の中洲や砂堆上に立地している。香東川は現在，石清尾山塊の西を直線に北流する西流路のみだが，17世紀初頭，高松藩に招かれた西嶋八兵衛の河川改修によって一本化されたものである。なお，この廃川直前の流路は，現在，御坊川としてその名残をとどめる。

第2節　歴史的環境（第3図参照）

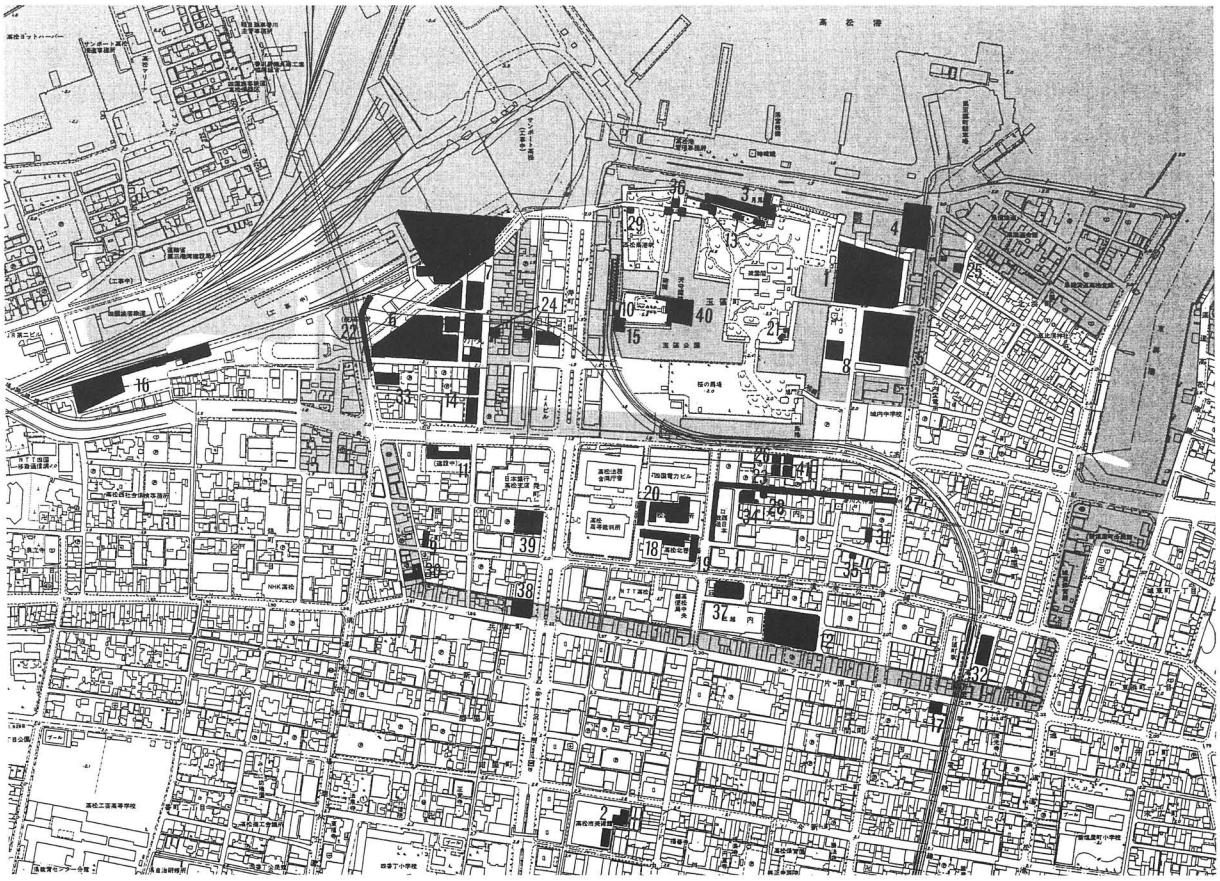
高松市街地で初めて人の活動が認められるのは，松平大膳家上屋敷跡における発掘調査で，弥生時代後期の土器を伴う柱穴が多数検出された他，平安時代前期の溝が確認された。この後，平安時代後期には，この地域は篦原郷と呼ばれ，安楽寿院領である野原庄が高松城跡の南方に比定される。野原庄は白河院の勅使田が応徳年間頃（11世紀末葉）に立券荘号されたもので，康治2年（1143）8月19日の太政官符では野原庄の四至が条里により表記されていることから，条里地割または条里呼称がこの地に普及していたと考えられる。中世に入ると荘園以外にも，文安2年(1445)の「兵庫北関入船納帳」に船籍地としてあるように，港の機能が認められる。高松城跡西の丸地区の発掘調査では，11世紀後半から13世紀前半の港湾施設に加え，搬入土器が高い比率で認められ，東浜に相当する東町奉行所跡の調査でも，同時期となる舟入状の流路を確認し，高比率の搬入土器が出土した。また浜ノ町遺跡では，白磁四耳壺の埋納遺構や区画溝をもつ13世紀末から15世紀末の集落跡が確認された。中世末期の状況を端的に示す事例に，寿町一丁目地区の発掘で出土した「野原濱村无量壽院」の刻書瓦が挙げられる。県内有数の古刹，無量壽院は天文年間に当地，野原郷八輪島に移転し，高松城築城に際して更なる移転を余儀なくされたことがその寺記にみられ，発掘成果と一致する。このようなことから，寺院を有する程の経済基盤をもつ港町であったと考えられ，砂堆や中洲上に中世都市が立地する状況は，博多や草戸千軒遺跡にもあるように全国的な傾向に合致する。こうした背景の下，当地に高松城が築かれ城下町が整備されたと考えられる。

さて，高松城および城下町を造ったのが，豊臣秀吉の家臣，生駒親正である。秀吉の四国征伐により，天正13年（1585）長宗我部元親が降伏，讃岐国は仙石秀久・十河存保に与えられ，その後尾藤知宣の領国となったが，天正15年（1587）には生駒親正が入封し讃岐17万石を領し，翌天正16年から数ヵ年を要し高松城を完成させた。北の守りは瀬戸内海に委ね，堀には海水を導く水城とされ，南方は大手（旧太鼓門）を構え，南側に城下町が展開する「後堅固」の城でもある。城の構造は，内堀・中堀・外堀となる三重の堀をめぐらし，内堀より内側に本丸・二ノ丸・三ノ丸などの曲輪を配する。本丸は更に堀により他の曲輪と独立し，本丸と二ノ丸をつなぐ鞘橋を落とすことで敵の侵入を防ぐ構造で，本丸には天守閣と地久櫓を備える。

寛永17年（1640）御家騒動により生駒氏は転封となり，代わって寛永19年には松平頼重が城主となり，東讃岐12万石を領した。頼重は城の改修を度々行い，寛文11年(1671)頃には東ノ丸を新造した他，月見櫓・続櫓・渡櫓などを造り，北に設けた水手御門より直接海へ出入りができるようにした。以後，松平氏は高松城主として明治維新を迎える。高松城は昭和29年（1954）に松平氏より高松市に譲渡され，翌年玉藻公園として市民に開放されるとともに，史跡として国指定され文化財の保護が図られている。

高松城に関する発掘調査は，現在まで多数の事例をもつ。本丸では天守台と地久櫓台の石垣解体時に，地下室をもつことが判明した。何れも壁面は石積みにより構築された地下1階相当のもので，天守台には西面に出入り口を備えるが，地久櫓台にはなく建物内に付随していたものと考えられている。二ノ丸入り口にあたる鉄門の袖石垣解体時には，半地下式で小形の穴蔵が確認され，凝灰岩製の切石による床・壁面構造をもつことが判明している。また東の丸での香川県歴史博物館建設に伴う調査では，東ノ丸新造に際し開削された中堀が検出されている。以上のような中堀の内側，内曲輪において確認された遺構は，何れも松平初期に行われた改修に相当するものと考えられている。一方，武家地となる外曲輪についても，近年，調査事例が増加した。広範に調査が行われた西の丸町地区では，生駒期の重臣，上坂勘解由や松平期に大老職を占めた大久保家に由来する木簡や家紋瓦が出土した他，絵図と合致する鍵型の街路を検出するなど，各期における屋敷割の状況が明らかとなった。旧大手前にあたる丸の内地区では，藩主連枝である松平大膳家の家紋をもつ理兵衛焼，瓦が出土し，検出された街路及び門跡が絵図と合致し，その屋敷であることが判明している。外堀大手に面した内町の厩跡では，弘化年間の絵図にその跡が記載された生駒時代末期の大形となる井戸状遺構が検出され，その石積みから生駒家家紋が刻まれた石材が見つかっている。この他，外堀の東口付近となる鶴屋町では，松平末期の絵図に記された東町奉行所に相当する地点で，その堀跡とみられる遺構が確認されている。このように外曲輪では松平期の絵地図，文献資料と発掘成果が対応する事例が数多くみられ，概ね屋敷割の変遷を辿ることができる。

第２図　遺跡位置図（1/50,000）



第３図　高松城跡周辺発掘調査地位置図（1/10,000）

1. 東ノ丸跡（県民ホール地区）　2. 紺屋町遺跡　3. 水手御門　4. 県民小ホール地区　5. 香川県歴史博物館地区　6. 西の丸町地区Ⅱ　7. 西の丸町地区Ⅲ　8. 作事丸　9. 西内町　10. 地久櫓　11. 高松北警察署地区　12. 内町　13. 三の丸　14. 西の丸町地区Ⅰ　15. 地久櫓台　16. 浜ノ町遺跡　17. 片原町遺跡　18. 丸の内地区　19. 松平大膳家中屋敷跡　20. 松平大膳家上屋敷跡　21 三の丸，竜櫓台北側　22. 西の丸町D地区　23. 丸の内　24. 寿町一丁目（無量壽院）　25. 中堀，北浜町　26. 丸の内，都市計画道路高松海岸線街路事業　27. 丸の内，再生水管布設工事　28. 丸の内，個人住宅建設　29. 二の丸，玉藻公園西門料金所整備工事　30. 外堀，西内町，共同住宅建設　31. 丸の内，共同住宅建設　32. 東町奉行所跡　33. 西の丸町　34. 丸の内　35. 丸の内　36. 鉄門　37. 厩跡　38. 外堀，兵庫町　39. 寿町二丁目地区　40. 天守台　**41. 江戸長屋跡**

第3章　調査の成果

第1節　調査方法

調査地は現道と宅地及びビルに挟まれた細長い区画で，現況は更地となっている。既述の経緯や工程上の理由により，当調査では北半の街路拡幅範囲を除いた南半を対象とした。

調査の方法については，重機掘削の後，人力によって精査し遺構検出を行った。また調査地の西壁に沿って，重機により土層観察と排水溝を兼ねたトレンチを掘削した。遺構番号は，検出した順にその平面の形態から想定した性格のものを付けた後，遺構掘削を行った。測量は委託業務によって4級基準点及び水準点測量を行ない，調査地の脇に3箇所の基準点を打設した。この基準点をもとに，遺構図面，土層図等の作成を1/20縮尺で行った。

第2節　主要遺構と基本層序（第4～6図参照）

調査では2面において，中世及び近世の遺構・遺物を確認した。調査時において各遺構面の出土遺物や層序から，概ね第2遺構面を中世段階，第1遺構面を近世段階の所産として捉えられた。

調査地における各壁面の層序を大概的にみた結果では，表土に相当するコンクリート塊等を含んだ近現代の整地の下，瓦礫や陶磁器片を含む整地及び遺構埋土の堆積が厚く認められ，これより下位では褐色を呈した土壌化層及び砂礫層の堆積が観察された。また複数の遺構や整地が重複し，水平堆積を呈した範囲が少ないことから，これらの堆積層について全て人力による精査・掘削が望ましい状況であったが，当調査においては整地を重機により除去する段階で検出されたものを第1遺構面とし，第2遺構面については概ね最下層となる砂礫層上面で確認した。但し，第1遺構面についてはその下層遺構としてSX103を検出した他，第2遺構面についても北西部で上層遺構として検出できた土坑・柱穴群があり，平面的にも幾分かは重層的に確認し得た。

以下，調査地壁面で観察された土層をその特徴からA～F層に分類し基本層序とし，遺構の出土遺物を整理した結果，把握できた所属時期について記す。

A層：表土に相当する整地である。コンクリート塊他，戦災痕とみられる焼土層を含み，太平洋戦争敗戦後の所産と推定される。

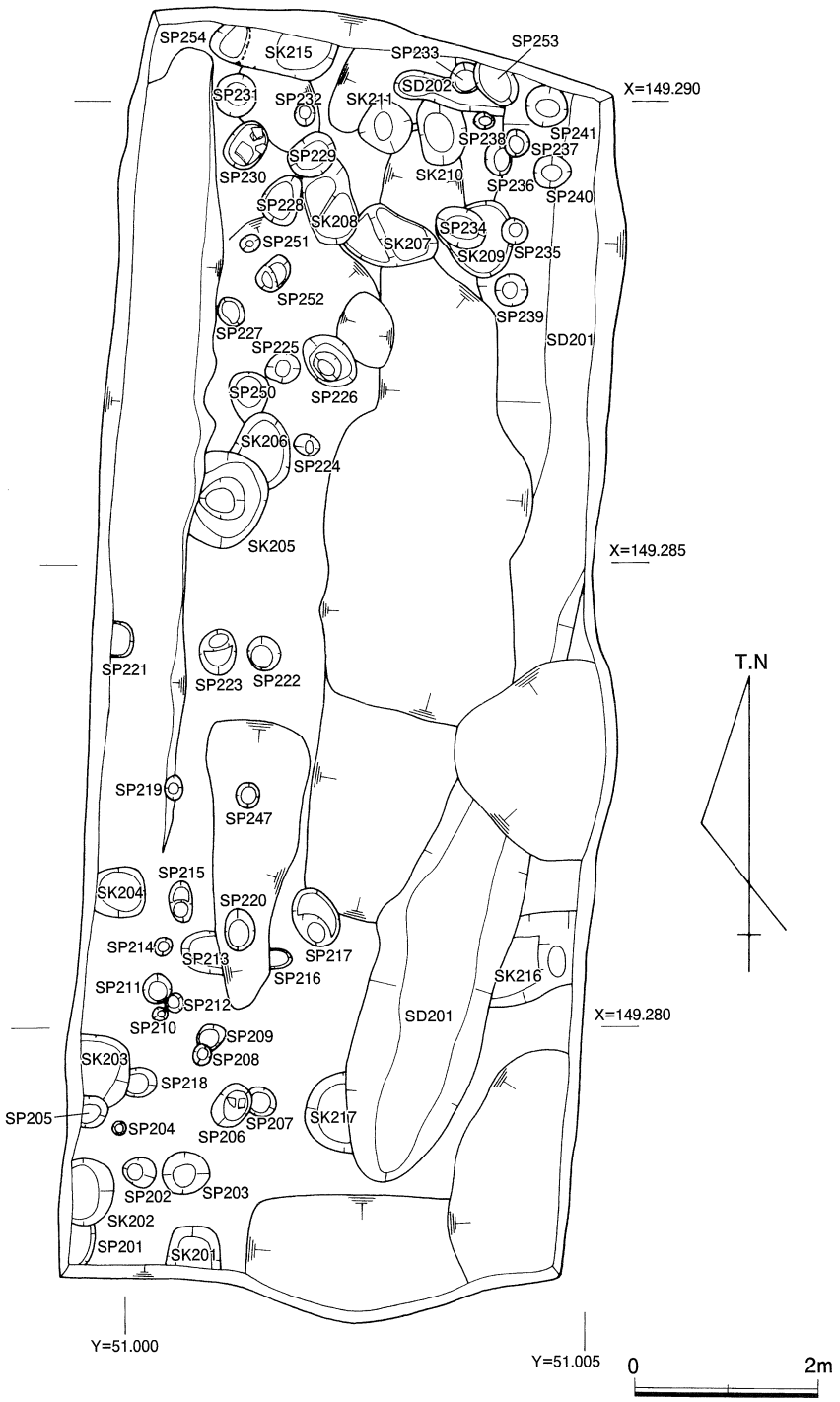
B層：C層の上位に堆積する黒色を呈した砂混じりシルト層である。南西部では瓦砕片や小礫を含み，入念に整地されている。A及びC層との関係から，近・現代の所産と推定される。

C層：黄灰あるいは灰黄色を呈したシルト質土である。焼土粒，炭を含む他，部分的に瓦片や黄色土を塊状に含む。概ねこの下位において，第1遺構面を検出した。第1遺構面で確認した遺構の大半が同系の埋土をもっており，SK125，SX102等から，概ね19世紀中葉以降の整地層と推定される。なお，調査地西壁ではC層下位に複数の掘り込みが観察されたが，トレンチ溝を挟んで東側では平面的に確認できなったことから，第1遺構面に相当する時期で調査地の西側に広がる遺構が南北方向に並んで存在することが予想される。

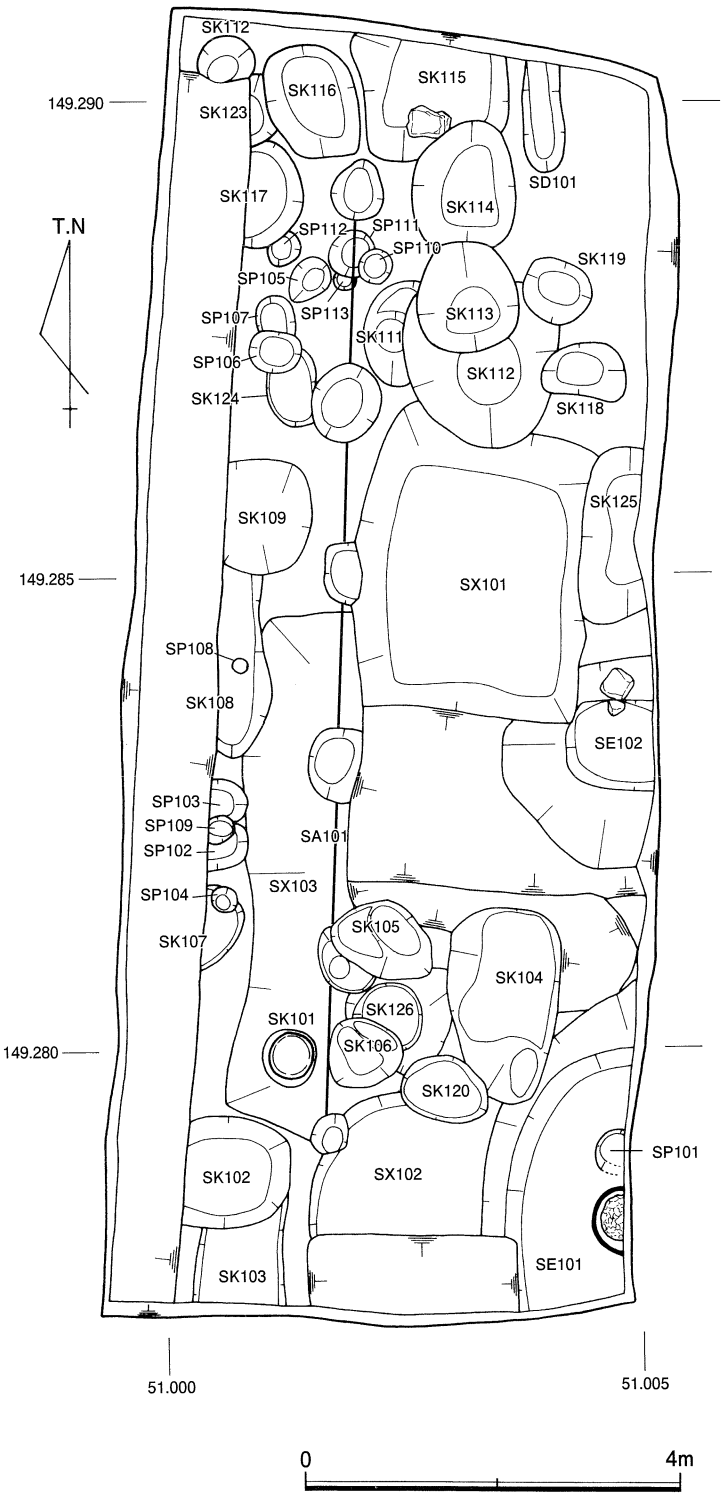
D層：第1遺構面で検出された遺構の基盤層に相当する整地である。炭・焼土粒を含んだ砂礫混じりシルト～シルト質粘土層で，瓦・礫を多く含む特徴をもつ。同様に第1面下層遺構として検出されたSX103から，17世紀後半以降の所産と推定される。

E層：円礫をまばらに含み，黒褐～褐色を呈したシルト質土であり，自然層が土壌化したものと考えられる。北西部では，炭や赤褐色粒が混じってみられる。下位でよく似た土質で埋没したSD201の出土遺物から16世紀後半頃の堆積層と考えられる

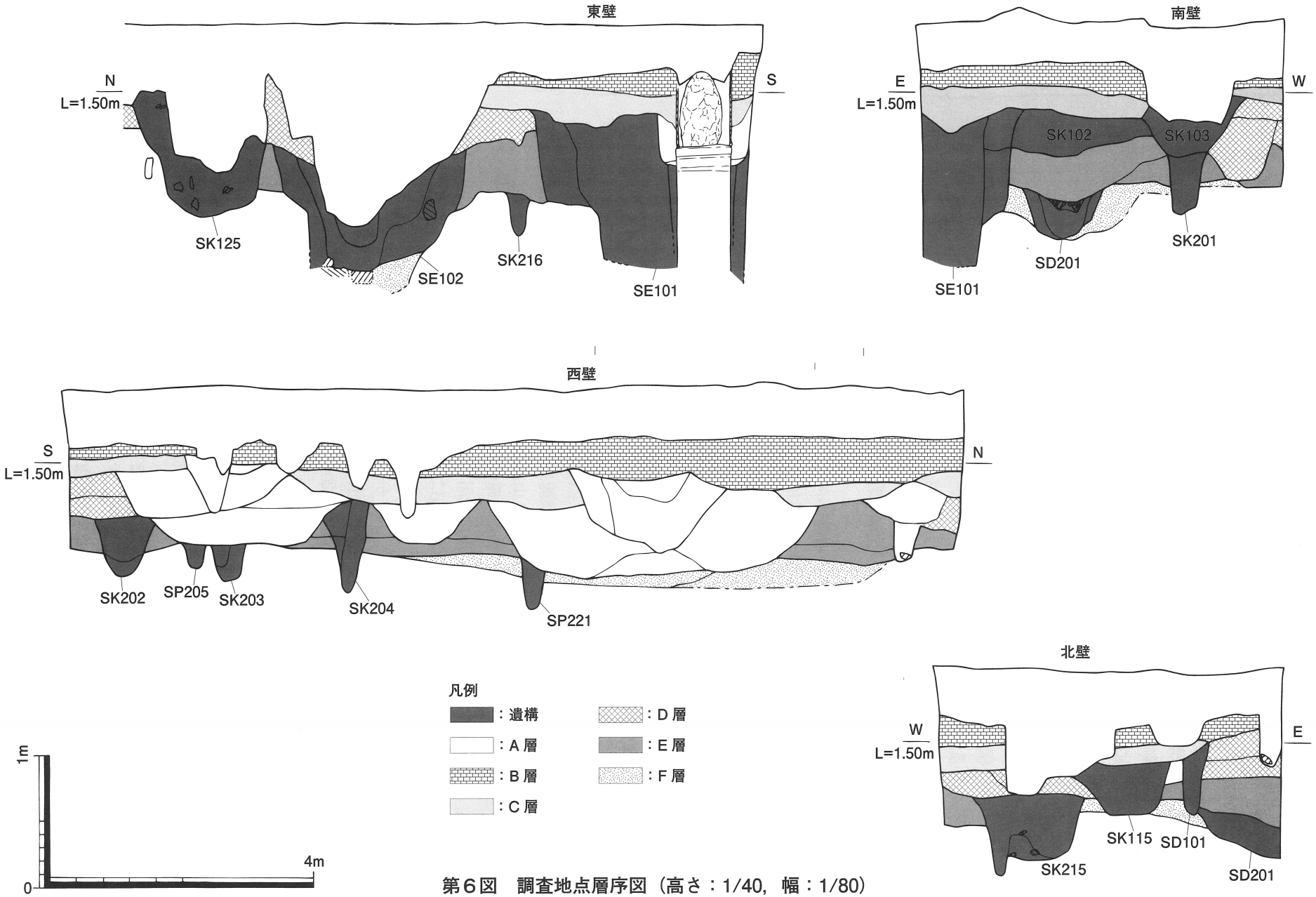
F層：自然堆積とした砂礫層で，上位から下位へと灰白色シルト質細砂～鈍い黄橙色砂礫～灰色砂礫となり，円礫の粒径も大きくなる。北に向ってやや上昇するようで，北端部では5～20cm大の川原石が多く認められる。これより下位では，湧水を伴う。第2遺構面の調査後，可能な限り断ち割り調査を行ったが，F層よりも下位に存在する遺構は確認されなかった。



第４図　第２遺構面遺構配置図（1/80）



第５図　第１遺構面遺構配置図（1/80）



第６図　調査地点層序図（高さ：1/40，幅：1/80）

第3節　第2遺構面の遺構・遺物

SB201（第7図）

調査地南西部で確認した南北棟の桁行3間，梁間1間の掘立柱建物跡である。検出レベルは標高0.8m前後である。主軸は，座標北より東に4度振っている。建物の柱穴の一部は上面が第一遺構面の下層の遺構によって削られ，建物の西側は調査区の関係上確認できておらず，調査区外へとさらに延びるものと考えられる。柱穴は直径30～45cmの円形のものと長幅50cm，短幅35cm程度の楕円形のものがあり，深さは25～30cmを測る。柱間距離は，北側2間分が1.5m，南側1間分のみが1.7mとなる。個々の柱穴検出時に柱痕や建替え等の痕跡は確認できなかったが，構成する柱穴SP206では平瓦を根固めとして転用している。埋土は灰褐色砂混シルト質土が多く，他にオリーブ黒色砂混粘質土や暗灰黄色砂混粘質土がある。西側柱列のほぼ中央に位置するSK204は，南北東西の柱列からややずれるため，この建物の一部を構成するものではない可能性も高い。

時期については，SK204以外の柱穴出土遺物から想定すると中世以降と考えられる。溝などと主軸が比較的近いことから，同じ時期の可能性も十分想定される。

SB201出土遺物（第8図）

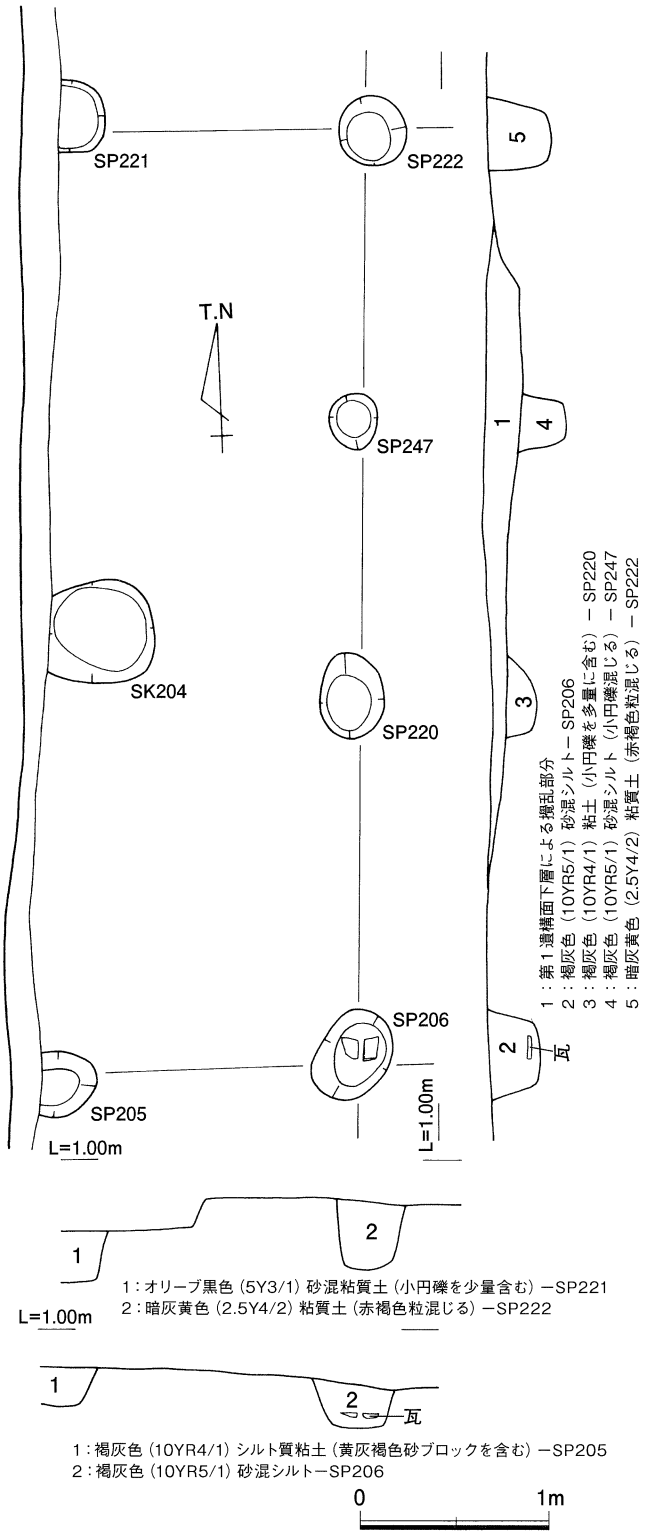
遺物はSP222から1，SK204から2～4，SP206から5が出土した。

1は弥生後期後半の甕で，口縁端部はヨコナデによって摘み上げ，胎土は角閃石を多量に含む。2は土師質土器の杯である。白色系の胎土である。3は瓦質土器の鉢である。口縁部の内外面ともにヨコナデ調整で仕上げ，内面は刷毛目調整のような痕跡が認められる。4は龍泉窯系青磁碗と考えられる。形態などから山本分類（山本2000）のⅠ-2aに該当すると考えられるが小片のため確定はできない。5は平瓦片で，SP206の根固め用に転用されたものである。凹面の狭端部側を削り，凹凸面ともにナデ調整で仕上げている。

小片のため図化できなかったが，この他にSP206から弥生土器の甕，SP222から弥生土器の甕と土師質土器の杯，SP247から弥生土器の甕，須恵器の甕，SK204から竈と考えられる破片が出土している。

SD201（第9図）

調査地の南東部やや中央寄りから北東隅に向かって掘削された溝で，更に北東へとのびると考えられる。検出レベルは調査区北側で標高0.9m，南側で0.68mである。方向の主軸は座標北より東に約13度振れている。断面は舟底形である。調査区や第1遺構面の遺構による攪乱などによって大部分が削平されているが，確認できた範囲で長さ約11.8m，幅1.3～1.4mを測る。ただし，この溝の延長線上にあたる調査区南壁面の土層で溝の断面を確認できることから，さらに南側へと伸びている事が分かる。



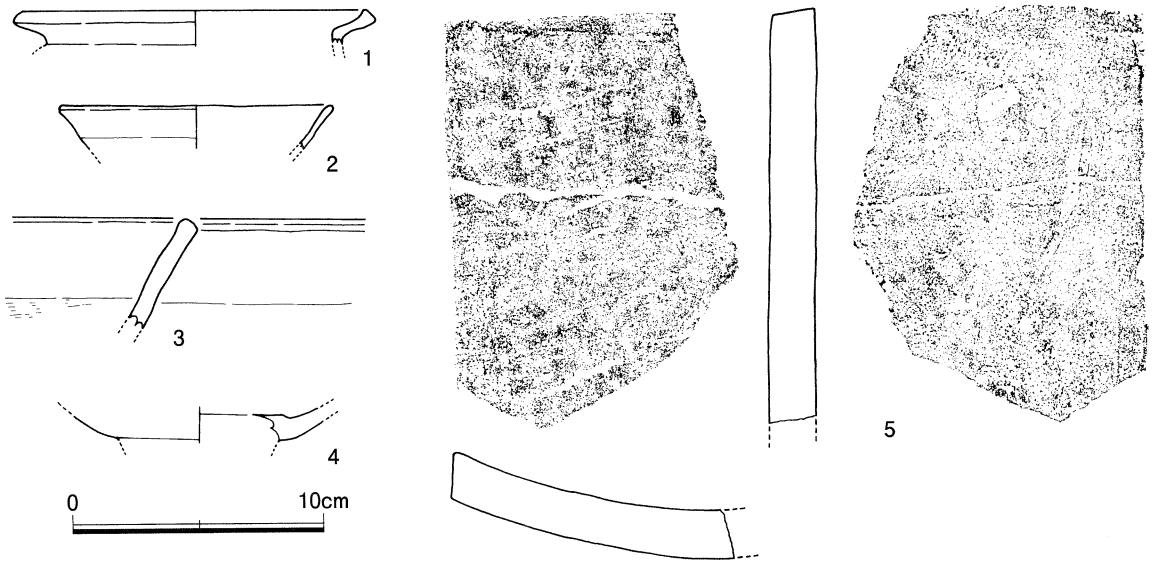
第7図　SB201平・断面図（1/40）

深さは南側で30cm前後，北側で40～50cmとなる。この深さの違いは，第2遺構面が北側に向かって高くなっていることから生じている。溝の底は湧水している。

出土遺物である土師質土器の足釜や鉢などから，概ね16世紀代に埋没したものと考えられる。

SD201出土遺物（第9図）

6～8は弥生土器で，6・7は弥生後期後半の甕口縁部片である。口縁部は丁寧なヨコナデ調整によって仕上げ



第８図　SB201 出土遺物実測図（1/3）

ている。８は底部で，外面は摩滅しており詳細は不明であるが，凹凸が認められ，工具などによる押さえや叩きなどの痕跡と考えられる。内面は刷毛目調整によって仕上げる。６は雲母を含み，７・８は角閃石を多量に含む。９～23 は土師質土器の杯・小皿である。９は口径が非常に小さい小皿である。その他は 8.0 ～ 12.0cm 程度の口径となる。いずれの個体も口縁端部を丁寧なナデ調整によって仕上げているが，その中でも 13・15・16 はともにナデ調整によって口縁端部を断面三角形状に仕上げるものであり，乗松編年（乗松 2004）によれば，14 世紀から 15 世紀によく認められる。その他のものは口縁端部を丸く整形するものである。17 の外底部には板状圧痕が認められる。いずれの個体も比較的精良な胎土を使用しているが，中でも９～13・17 は非常に精良である。また，14 は赤褐色の砂粒を含む橙色系の胎土，10 ～ 12 は橙色系の胎土で，それ以外は白色もしくは灰白色系の胎土のものである。24 は土師質土器の断面三角形の高台のつく椀である。25 は須恵器椀で佐藤分類（佐藤 1993）のＡⅡ - ９・10 と考えられる。薄い粘土紐をヨコナデによって貼り付けて高台を成形しているが，かなり形骸化している。内底面は細かな刷毛目調整によって仕上げている。26 は瓦器椀の高台の破片で和泉産と考えられる。高台は長方形の粘土紐を貼り付け，内底面には横方向の暗文風の篦磨きを施す。27・34・36 は土師質土器の足釜である。27 が佐藤分類（1995）の C，34 が B2 である。28 ～ 31・35 は土師質土器の鍋で，これらも同形式であるが，口縁部の形態に差異があり，佐藤分類（佐藤 1995）で 28 が A1，29・30 がＡⅡ，31・35 がＢⅡで，13 ～ 15 世紀の時期幅をもつ。31 は口縁部中位まで刷毛目調整が残存していることから，体部に刷毛目調整を行なった後，口縁部をヨコナデによって成形したことが分かる。35 は煤が付着する。32 は土師質土器の捏鉢もしくは擂鉢である。内面は一部刷毛調整を施し，内外面を指オサエおよび指ナデによって整形している。33 は土師質土器と考えられるが，弥生土器の器台もしくは脚部の可能性も想定される。ただし，破片であり内外面ともに摩滅しているため詳細は不明である。37 は平瓦である。表面は燻し気味に仕上がる。凸面は横方向のケズリ後，縦方向のケズリを施す。凹面は横方向のケズリを施す。凹面の広（狭）端部および側端部は篦ケズリで整形する。

小片のため図化できなかったが，この他に備前焼と考えられる破片が出土している。

SD202・SK210（第 10 図）

SD201 から派生するような形で，東西方向に延びる細い溝で，長さ 1.22m，幅 0.31m，深さ 0.1m を測る。検出レベルは標高 0.84m である。東側を SD201 と，その他にいくつかの柱穴によって切られ，南側に隣接する SK210 を切っている。SK210 の検出レベルは標高 0.84m で，上面の一部が第１遺構面によって削られているが，長軸 0.65m，短軸 0.5m，深さ 0.42m を測る。

時期は出土遺物から SD202 は中世以降，SK210 は弥生時代後期後半以降には埋没したものと考えられる。

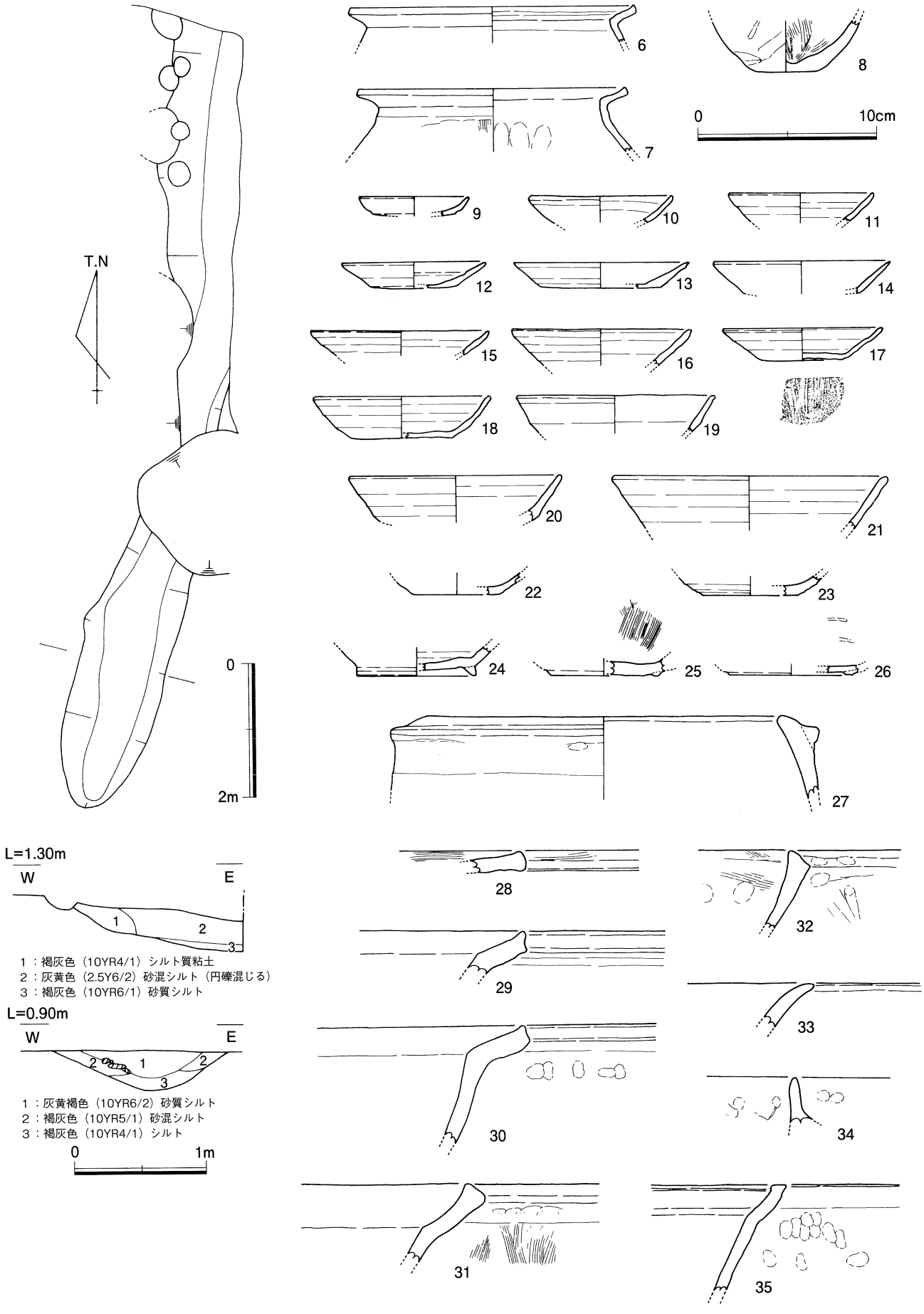
SD202・SK210 出土遺物（第 10 図）

SD202 から 38，SK210 から 39・40 が出土している。38 は土師質土器の杯もしくは小皿である。外底面は篦切りによって切り離した痕跡が残る。39 は弥生後期後半の甕である。角閃石および雲母を多量に含む。40 は管状土錘である。

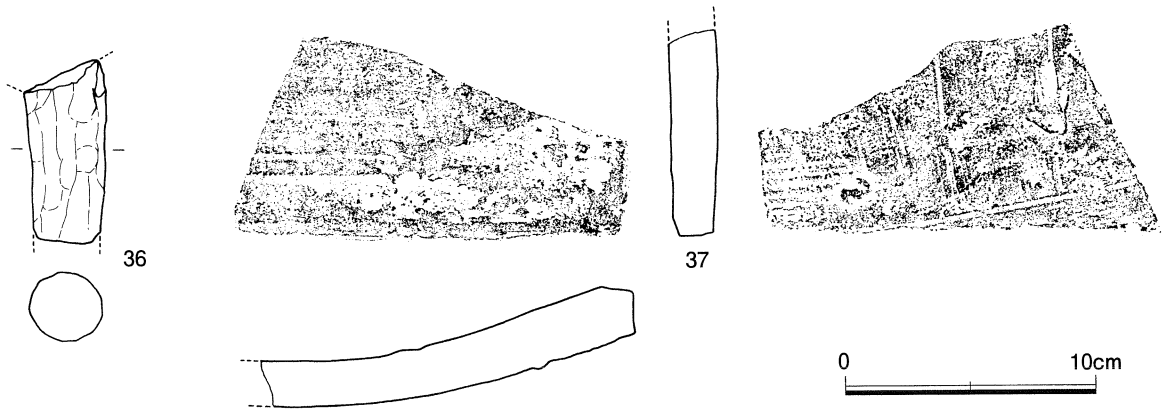
SK202（第 11 図）

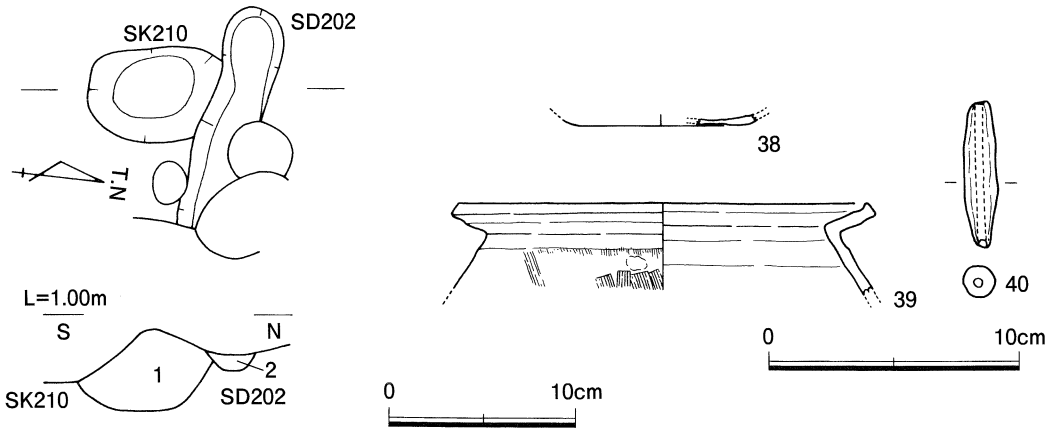
調査区南西隅に位置する楕円形の土坑である。検出レベルは標高 0.77m である。調査区内で長幅 0.73m，短幅 0.47m，深さ 0.45m を測る。

時期は，限定することはできないが出土遺物から中世前半と考えられる。



第９図　SD201 平・断面図（1/40・1/80）・出土遺物実測図（1/3）





1：褐灰色（10YR4/1）シルトー SK210
2：褐灰色（10YR5/1）砂混シルトー SD202

第 10 図　SD201 出土遺物実測図（1/3），SD202・SK210 平・断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3）

SK202 出土遺物（第 11 図）

41 は須恵器の椀で，佐藤分類（佐藤 1993）のＡⅡ-8 と考えられる。ヨコナデによって整形されているが，外面の体部中位に篦磨きを施している。

小片のため図化できなかったが，この他に弥生土器の甕の破片が出土している。

SK203（第 11 図）

SK202 の北側に位置する隅丸方形状の土坑である。南側を SP205 に切られる。検出レベルは標高 0.8m である。調査区内で，長幅 0.75m，短幅 0.55m，深さ 0.27m を測る。平面で柱痕状の痕跡を確認できたが，この柱穴によって構成される建物の平面プランなどは明らかにできなかった。

所属時期は限定できないが，出土遺物から 10 世紀以降と考えられるが，小片のため確定できない。

SK203 出土遺物（第 11 図）

42 は須恵器の杯で，佐藤分類佐藤 1993）の杯Ｂである。外底部は篦切りで，ヨコナデによって整形している。

小片のため図化できなかったが，この他に弥生土器の甕の破片が出土している。

SK208（第 11 図）

調査区北側に位置し，北側を SP229 に切られる隅丸方形のテラスをもつ土坑である。検出レベルは 0.93m である。長幅 0.84m，短幅 0.53m，深さはテラス部分が 0.15m，最も深い部分が 0.29m である。

時期は限定できないが，出土遺物から中世以降と考えられる。

SK208 出土遺物（第 11 図）

43 は弥生土器の高杯の脚部と考えられる。角閃石を含む。44 は土師質土器の杯である。45 は須恵器壺の底部で，佐藤分類（佐藤 1993）の壺Ｃである。外面は格子目叩きによって整形され，底部付近は工具によるナデ調整によって仕上げている。

小片のため図化できていないが，この他に須恵器の杯の破片が出土している。

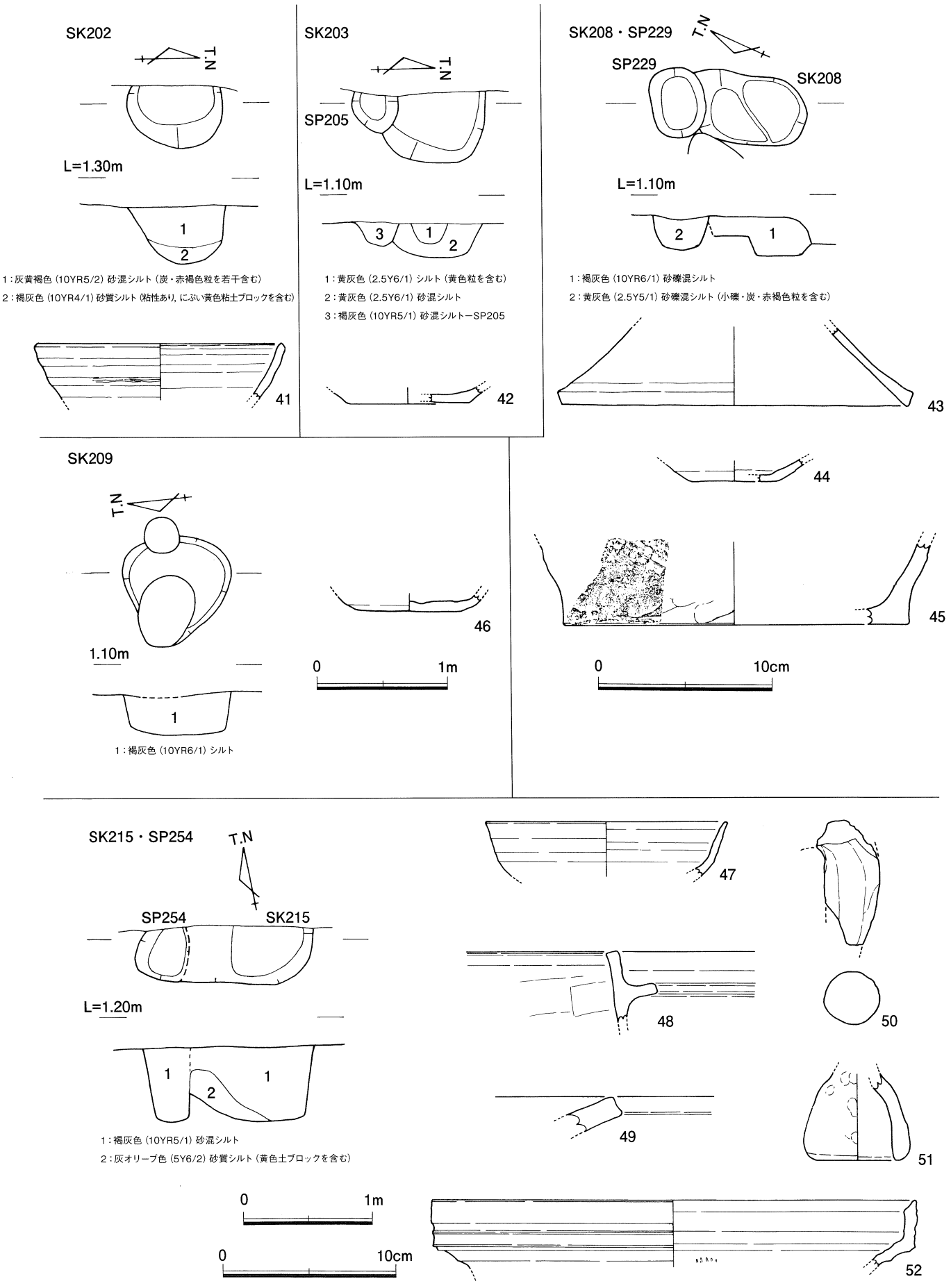
SK209（第 11 図）

調査区北東部に位置し，SP234 と 235 に切られる隅丸の三角形状を呈する土坑である。特に西側は SP234 によってかなり壊されている。検出レベルは標高 0.85m である。残存箇所で長さ 0.8m，深さ 0.31m を測る。

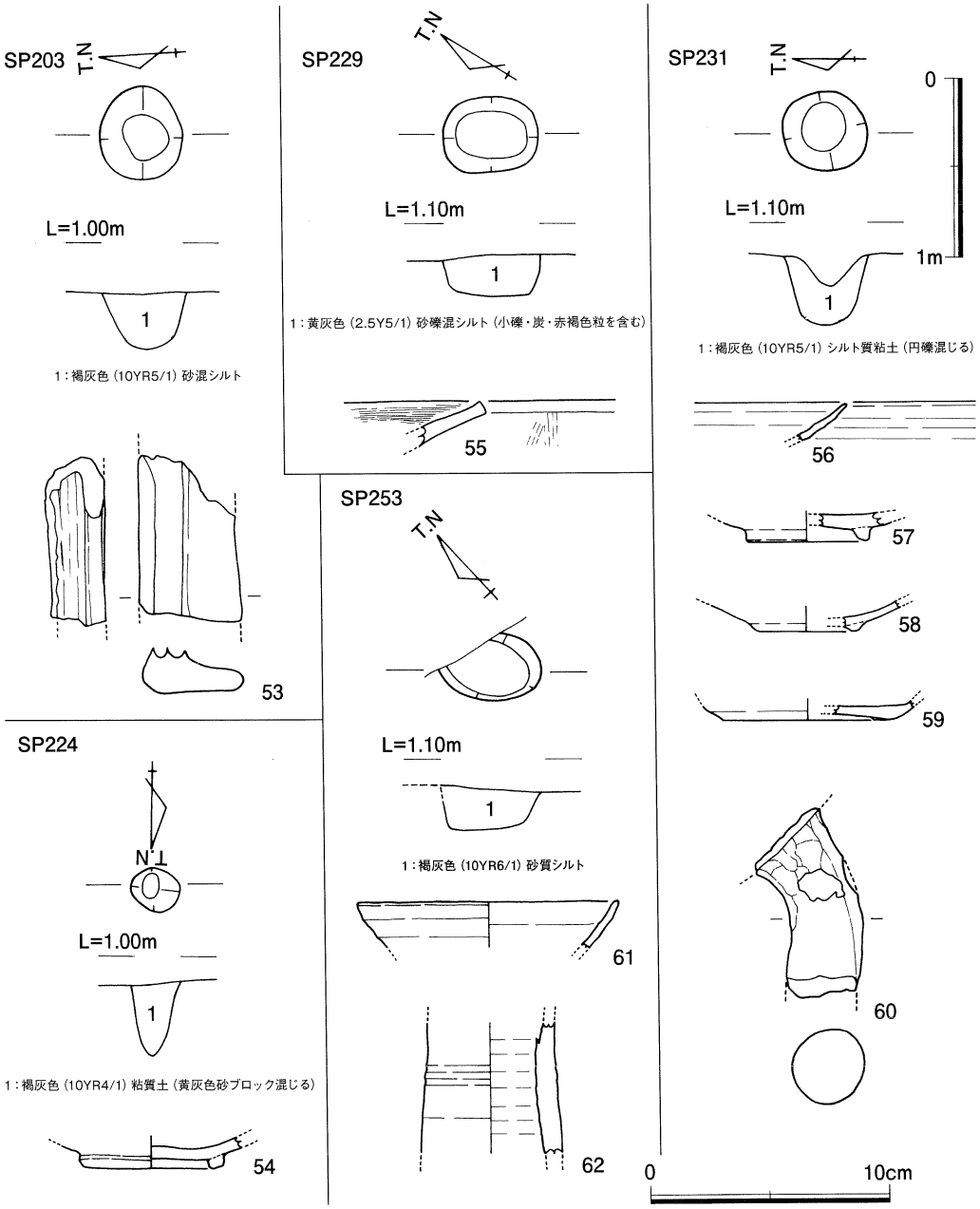
時期は限定できないが，僅かな出土遺物から判断すると中世以降と考えられる。

SK209 出土遺物（第 11 図）

46 は土師質土器の杯である。外面に煤が付着しており，灯明皿として使用されていたと考えられる。



第 11 図　SK202・203・208・209・215 平・断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3）



第 12 図　SP203・224・229・231・253 平・断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3）

SK215・SP254（第 11 図）

調査区北西部で確認された東西方向の隅丸方形の土坑である。検出レベルは標高 1.0m である。平面では確認できなかったが，断面の状況と遺物が SP254 から集中して出土したことから，SK215 は SP254 によって切られているものと考えられる。SK215 は調査区内で長幅 0.95m，短幅 0.45m，深さ 0.55m である。SP254 は長さ 0.4m の隅丸方形のピットである。

時期は出土遺物から SP254 は 16 世紀後半と考えられ，SK215 はそれ以前の所産と考えられる。

SP254 出土遺物（第 11 図）

47 は須恵器の杯で，佐藤分類（佐藤 1993）の杯 B Ⅳ と考えられる。48 は瓦質を呈する土釜で，非常に粗いつくりである。49 は土師質土器の鍋の口縁部片で，佐藤分類（佐藤 1995）の A Ⅱである。50 は土師質土器の足釜の脚部である。51 は土師質土器の飯蛸壺で，内面はナデ調整，外面は指押さえによって整形している。52 は備前焼の陶器擂鉢の口縁部片である。口縁部外面には凹線が 1 条入る。内面に一部擂り目が確認できる。

図化していないが，この他に緑色片岩が出土している。

この他の土坑出土遺物

この他の土坑から小片のため図化できなかったが，SK205 から土師質土器の杯，SK207 から黒色土器と考えられる破片が出土している。

SP203（第 12 図）

調査区南西部に位置する楕円形のピットである。検出レベルは標高 0.72m である。長幅 0.52m，短幅 0.47m，深さ 0.31m である。

時期は限定できないが，出土遺物から古代以降と考えられる。

SP203 出土遺物（第 12 図）

53 は土師質土器竈の焚口部の破片と考えられる。

小片のため図化できなかったが，この他に弥生土器の甕が出土している。

SP224（第 12 図）

SK206 の東側に隣接する楕円形のピットである。検出レベルは標高 0.84m である。長幅 0.3m，短幅 0.25m，深さ 0.39m である。

時期は出土遺物から 13 世紀前半以降と考えられる。

SP224 出土遺物（第 12 図）

54 は須恵器の高台がつく椀で，佐藤分類（佐藤 2000）の椀 A Ⅱ-7 と考えられる。高台は断面方形の粘土紐をヨコナデによって貼り付けている。

SP229（第 12 図）

調査区北西部に位置する隅丸方形のピットである。検出レベルは標高 0.92m である。長幅 0.54m，短幅 0.42m，深さ 0.23m を測る。

時期は出土遺物が僅かのため限定できない。

SP229 出土遺物（第 12 図）

55 は土師質土器の甕の口縁部片と考えられるが，小片のため詳細は不明である。内面は横方向の刷毛調整，外面は縦方向の刷毛調整によって仕上げている。

小片のため図化できなかったが，この他に須恵器の椀と考えられる小片が出土している。

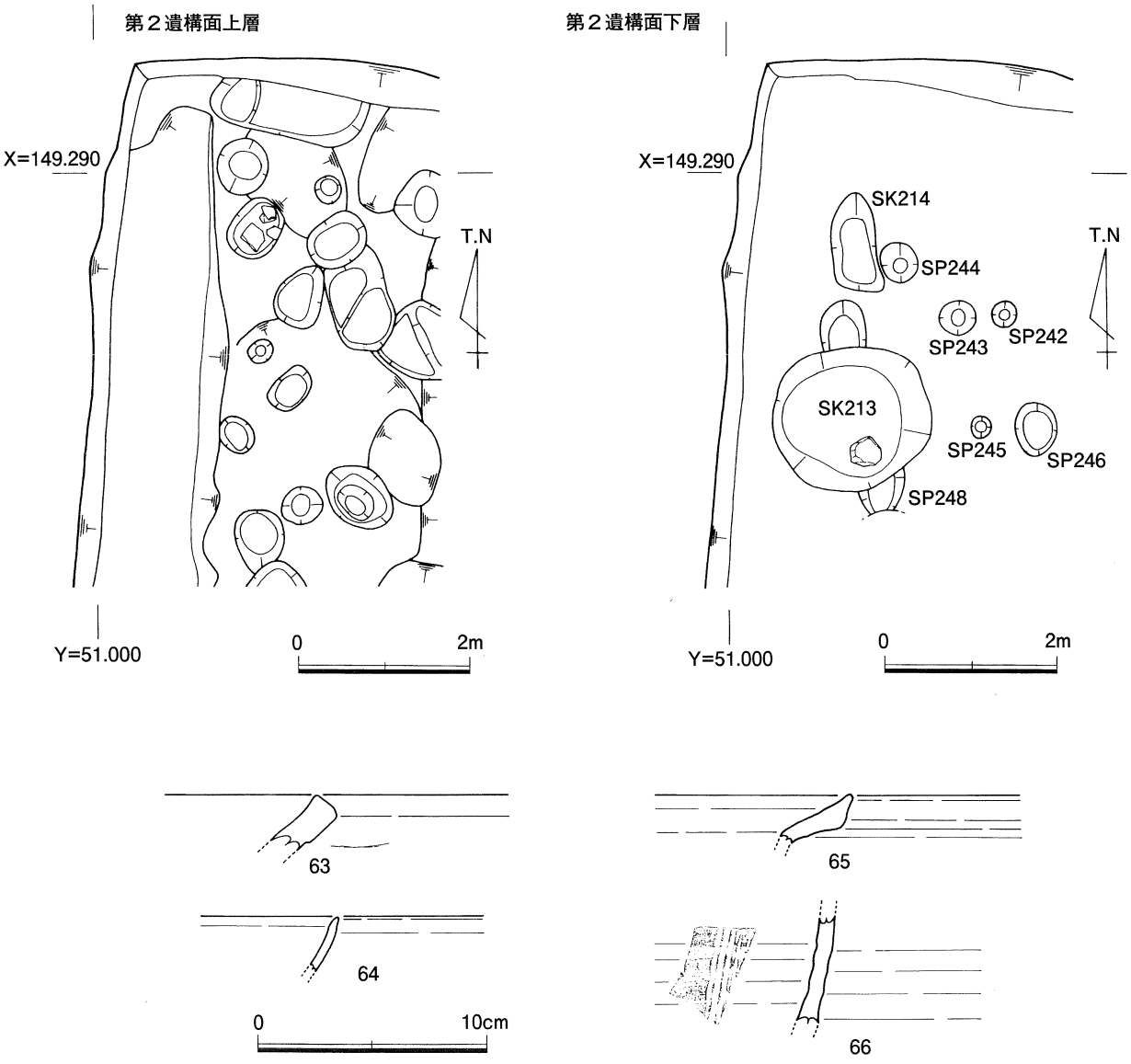
SP231（第 12 図）

調査区北西部に位置する直径 0.5m，深さ 0.61m の円形のピットである。検出レベルは標高 0.94m を測る。

時期は，須恵器椀や白磁などから 13 世紀後半以降と考えられる。

SP231 出土遺物（第 12 図）

56 は土師質土器の杯の口縁部片である。白色系の胎



第 13 図　第２遺構面下層検出平面図（1/80），掘削時出土遺物実測図（1/3）

土である。57は土師質土器の高台がつく椀である。58は須恵器の高台がつく椀で，佐藤分類（佐藤2000）のAⅡ-10と考えられる。細く扁平な粘土紐を貼り付けて高台としている。59は白磁の小皿と考えられ，残存していないため限定はできないが口縁部は口禿になる可能性が考えられる。60は土師質土器の足釜の脚部である。

SP253（第12図）

調査区北東部に位置し，調査区外へとのびる楕円形のピットである。検出レベルは標高0.9mである。調査区内で長幅0.55m，短幅0.47m，深さ0.18mを測る。

所属時期は限定できないが，中世以降と考えられる。

SP253出土遺物（第12図）

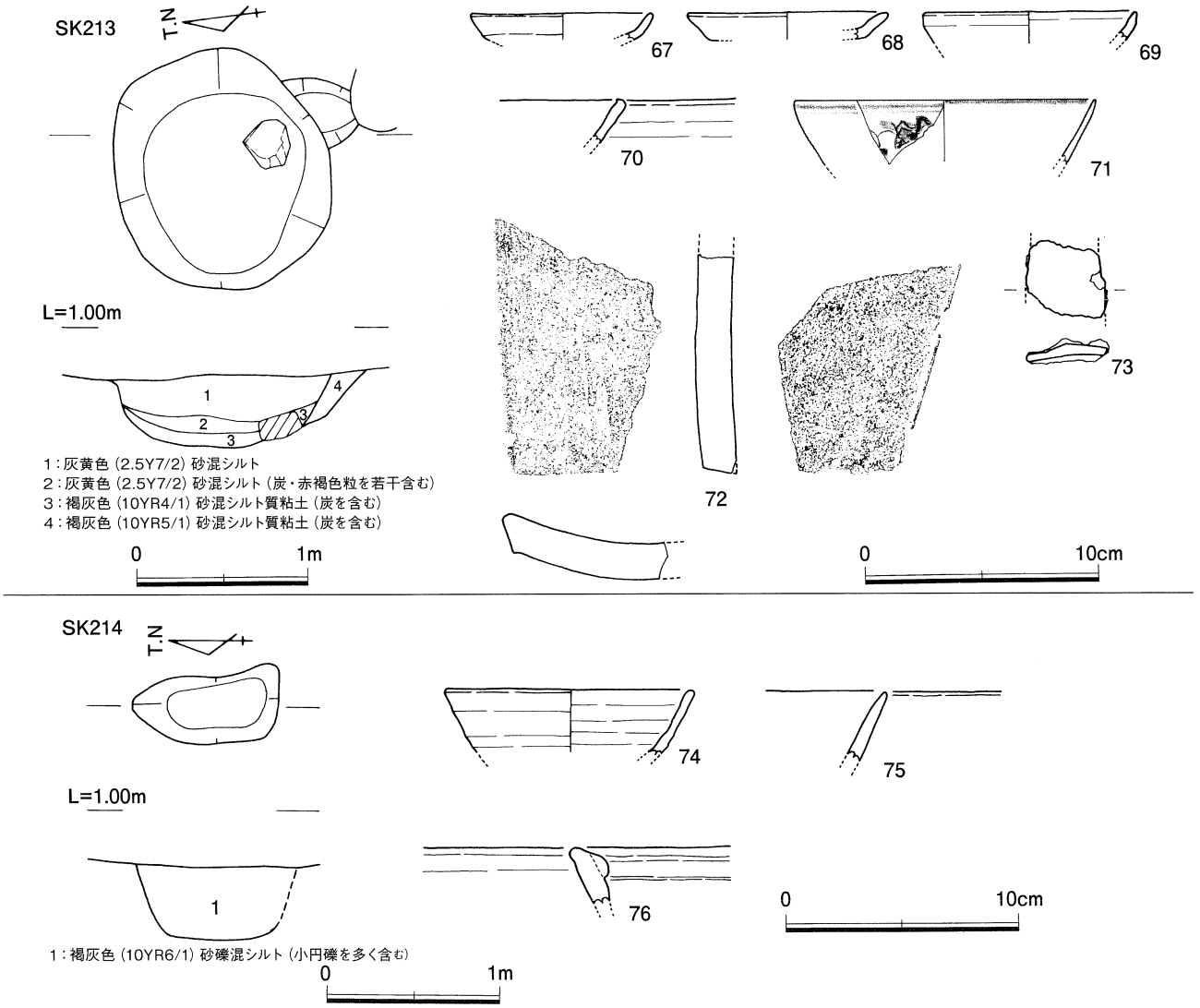
61は土師質土器の杯もしくは小皿である。62は須恵器の長頸壺の頸部で，佐藤分類（佐藤1993）の壺Aである。頚部中位には沈線を2条めぐらし，外面には自然釉が認められる。胎土などから，陶（十瓶山）窯跡産ではない可能性が想定される。

その他のピット出土遺物

小片のため図化できなかったが，この他にSP217から土師質土器の杯，SP227から土師質土器の杯，須恵器の甕，SP230から土師質土器の杯，SP232から弥生土器の甕の小片が出土している。

第2遺構面下層（第13図）

調査地北西部では，遺構検出段階に基盤層である砂礫が認められず，黒く汚れた土が基盤層となり，遺構が掘りこまれていた。そのため，この付近は遺構検出の段階から井戸などの大型遺構もしくは下層の別の遺構面の存在が想定された。従って，上層の遺構を掘削，記録作成後に一段下げて遺構の検出を試みた。その結果，下層から土坑やピットをいくつか確認することができた。そのうち，SK213，SK214について詳述する。後述する下層遺構の年代は，出土遺物などから16世紀後半から17世紀と考えられる。そのため，上層とはほとんど時期差はなく，下層部分の遺構が形成された後，すぐに埋められ，その後新たに周辺が利用されたものと考えられる。



第14図　SK213・214平・断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3）

下層掘削時出土遺物（第 13 図）

63・65 は土師質土器の鍋で，佐藤分類（佐藤 1995）の 63 が B，65 は A Ⅱである。64 は須恵器の椀の口縁部片である。口縁端部にヨコナデを施す。66 は備前焼の擂鉢の体部片である。内面には擂り目が認められる。

小片のため図化できなかったが，この他に備前焼の壺，青磁の碗と考えられる破片が出土している。

SK13（第 14 図）

調査地北西部に位置する直径約 1.3m 前後のやや歪な円形の土坑である。検出レベルは標高 0.68m である。

時期は青花碗から判断すると 16 世紀末から 17 世紀初頭と考えられる。

S K 213 出土遺物（第 14 図）

67 ～ 69 は土師質土器の杯である。69 は口縁端部をヨコナデし，断面三角形に仕上げるものである。67 は黄白色系の胎土で，残りは橙色系の胎土である。70 は土師質土器の口縁部片である。71 は青花碗で小野分類（小野 1982）の F 群 - X 型式と考えられ，釉などから漳州窯系磁器の可能性が考えられる。口縁部の内外面に四方襷文，体部外面に唐草文を施す。72 は平瓦で，内外面ともにナデによって仕上げる。73 は板状の鉄器である。破片であり，錆が著しいため詳細は不明である。図化していないが，この他に動物骨が数個体分出土している。

S K 214（第 14 図）

調査区北西部に位置するやや変形した方形の土坑である。検出レベルは標高 0.68m である。長幅 0.86m，短幅 0.4m，深さ 0.4m を測る。

時期は出土遺物から 16 世紀後半と考えられる。

S K 214 出土遺物（第 14 図）

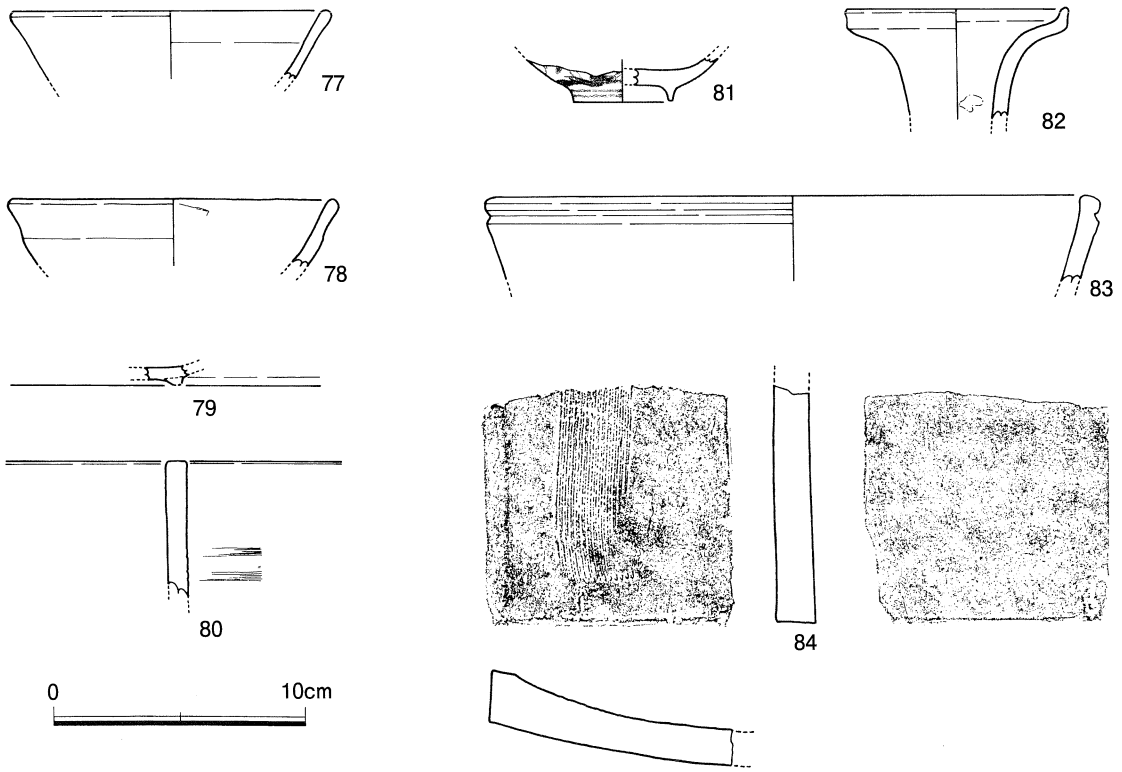
74 は土師質土器の杯と考えられる。75 は弥生土器もしくは土師質土器であるが，破片であり，器面が磨耗しているため詳細は不明である。76 は土師質土器の足釜の口縁部で，佐藤分類（佐藤 1995）の足釜 C である。

小片のため図化できなかったが，この他に須恵器の甕と考えられる破片が出土している。

第 2 遺構面検出時出土遺物（第 15 図）

77 ～ 78 は土師質土器の杯もしくは椀と考えられ，胎土は橙色を呈する。79 は土師質土器の高台がつく椀で，白色系の胎土である。小片のため詳細は不明である。80 は土師質土器の破片で火鉢の可能性が考えられるが，小片のため詳細は不明である。81 は肥前系染付けの碗で，高台内に銘をもつが，破片のため内容は不明である。高台に襷文を施す。82 は肥前系磁器の青磁の仏花瓶である。83 は施釉陶器の鉢で，産地等は不明である。84 は平瓦で，にぶい黄灰色を呈し，内面に櫛描きが認められる。

小片のため図化できなかったが，この他に弥生土器の甕，須恵器の甕が出土している。



第 15 図　第 2 遺構面遺構検出時出土遺物実測図（1/3）

第4節　第1遺構面の遺構・遺物

SA101（第16図参照）

調査地中央部において，南北方向に確認した柵列状遺構である。検出高は1.15～1.23 mで，主軸方向N-5°-E，検出長約10 mの5間相当で認められる。確認範囲が狭いため，南北方向に更に延伸する可能性がある他，西方向に展開し建物を構成する可能性も残る。

各柱穴は平面で円，あるいは隅丸方形を呈しており，規模は0.4～0.8 m，深度は0.14～0.42 mである。柱間距離についても1.8～2.2 mの長短をもって認められる。柱穴の断面は台形，あるいはU字形を呈し，埋土については概ね瓦片や礫が混じた固く締まったシルト質土となっている。また埋土の上端には，焼土・炭を含んだ浅い窪みをもつものが多く，石材の抜き取り痕とみられ礎石建ちの構造となることが想定される。

出土遺物はP-1から少量あり，肥前系磁器鉢や肥前系陶器皿，土師質土器の細片が認められる。所属時期については，これらの出土遺物及び遺構面から概ね18世紀～19世紀中葉の所産と考えられる。

SE102（第17図参照）

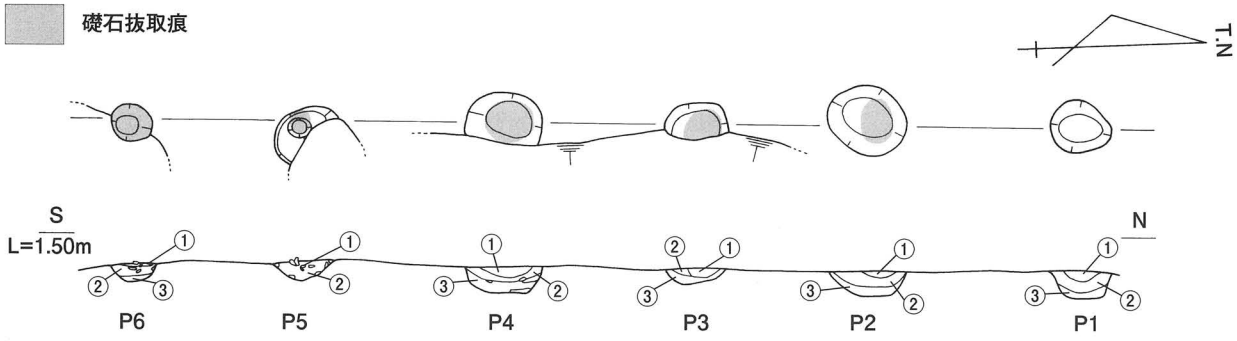
調査地中央の東端において確認した井戸状遺構である。一部調査範囲外へ広がり大半部が撹乱坑によって壊されているが，北肩部の遺存は良く，この検出高は0.98 mを測る。掘り方の平面は円形状で，径2.2 m前後と推定される。深度はほぼ海抜高まで及んでおり，多量の湧水が認められる。またSX101と重複関係では，先行することが平面において確認できた。壁面や底部において人頭大の川原石が散在してみられたことから，本来の井側には石組が用いられたと推定される。調査地の東壁で観察できる土層断面では，①～③層の埋土と石組の裏込め土と考えられる④層に分割され，遺存状態の良い北肩部で段付の掘り方となっていることが観察された。

出土遺物は少量の土師質土器のみだが，検出に伴ってコンテナ1/4箱程度の陶磁器・瓦片が出土している。所属時期については，検出時の遺物によれば19世紀前半頃に廃絶した可能性が残るものの，基本層序でD層に先行しE層を基盤としていることから，16世紀後半以降で17世紀後半頃までの所産と推定される。

SE102出土遺物（第17図参照）

85・86は掘り方埋土とした裏込め層の出土遺物で，（吉備系）土師質土器椀底部及び土師質土器皿である。87・88は埋土からの出土遺物で，土師質土器足釜の口縁部及び脚部である。

89～94は，検出時に認められた出土遺物である。89・90は肥前系磁器で，コンニャク印判をもつ染付輪花皿（89）と広東碗の底部（90）である。91・92は京・信楽系陶器で，端反碗（91）と灯明皿である。93は備前系陶器擂鉢で，口縁部の形態が白神編年（白神1992）のII型式に該当し堺・明石産と推定される。94は菊丸瓦の細片である。



P-1埋土
①2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(円礫を含む,締まる)
②2.5Y5/1黄灰色砂混じりシルト(締まる)
③2.5Y6/1黄灰色極細砂

P-2埋土
②2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(円礫を含む,締まる)
③2.5Y6/1黄灰色極細砂(小円礫を含む,締まる)

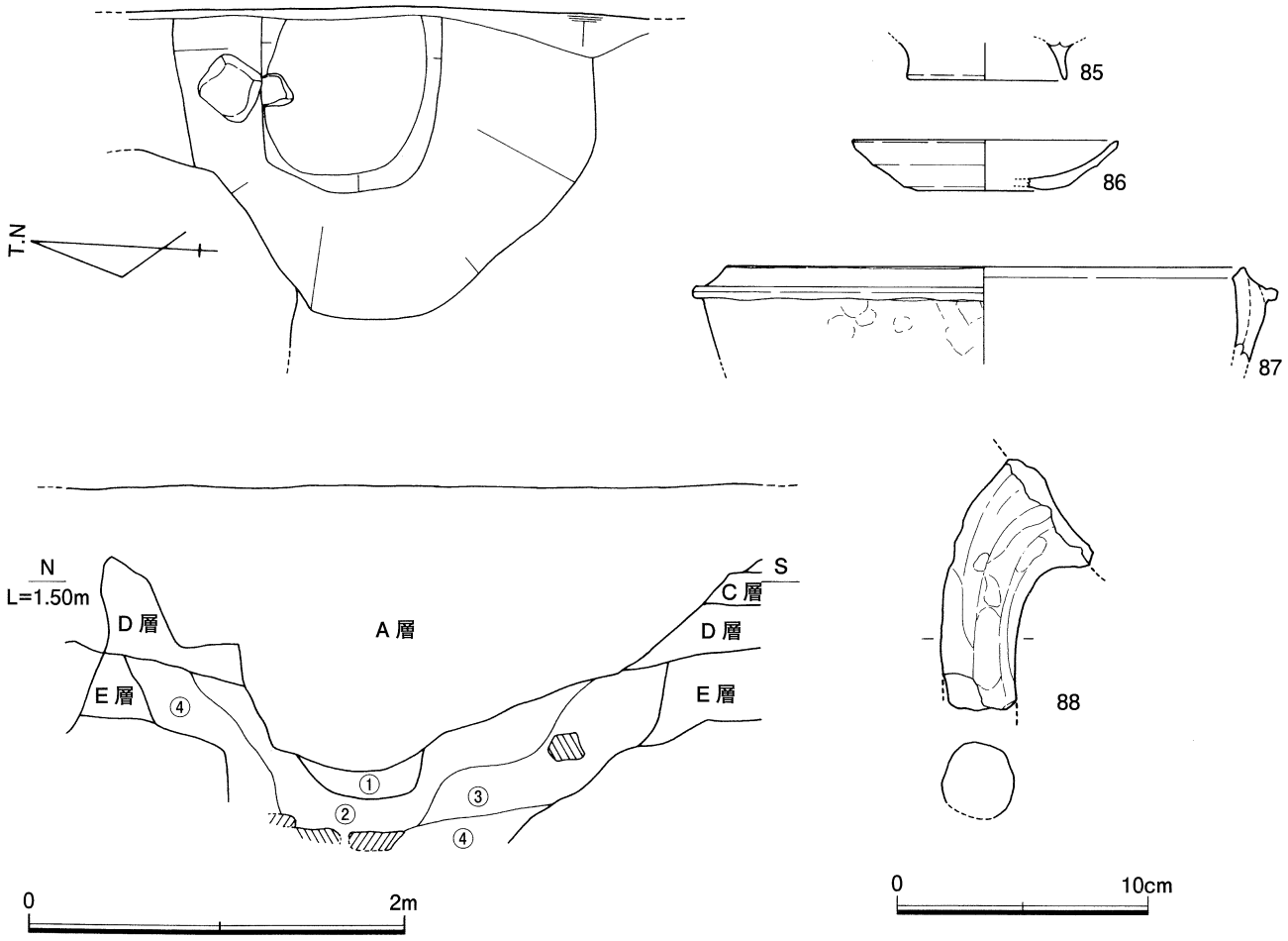
P-3埋土
①2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土,瓦片,円礫を含む,抜取痕)
②2.5Y4/1黄灰色シルト(炭,焼土,オリーブ粘土塊を含む,抜取痕?)
③2.5Y6/1黄灰色極細砂(締まる)

P-4埋土
①2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土,明黄褐色土塊,瓦片を含む,抜取痕)
②2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(円礫を含む)
③2.5Y6/1黄灰色極細砂(板石,円礫を含む,締まる)

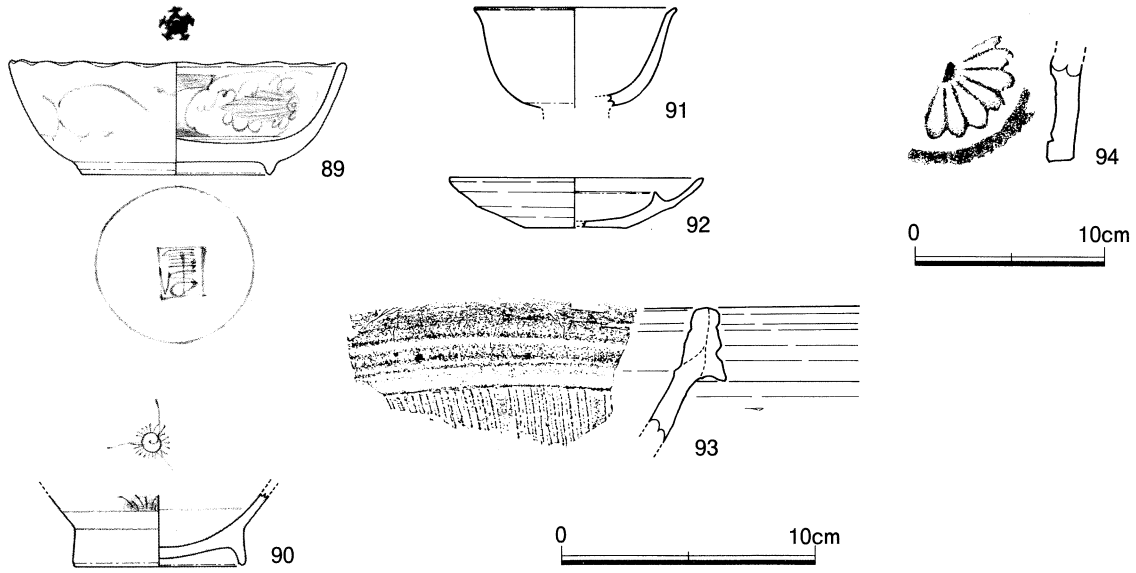
P-5埋土
①2.5Y6/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土粒を若干含む,瓦片を含む,抜取痕)
②2.5Y6/1黄灰色極細砂(小円礫を含む)

P-6埋土
①2.5Y5/1黄灰色シルト(炭,焼土粒を若干含む,オリーブ黄色土塊,瓦片,円礫を含む,抜取痕)
②2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(瓦片,円礫を含む,締まる)
③2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(締まる)

第16図　SA101平・断面図（1/80）



①5Y3/1オリーブ黒色砂混じりシルト質粘土
②2.5Y5/1黄灰色シルト（オリーブ黄色土塊を含む,第1面上層基盤と類似）
③2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土（人頭大の川原石を含む）
④2.5Y4/1黄灰色砂混じりシルト（小円礫を含む,石組の裏込め）



第 17 図　SE102 平・断面図（1/40），出土遺物（1/3），SE102 検出時出土遺物実測図（1/3，1/4）

SE101（第18図参照）

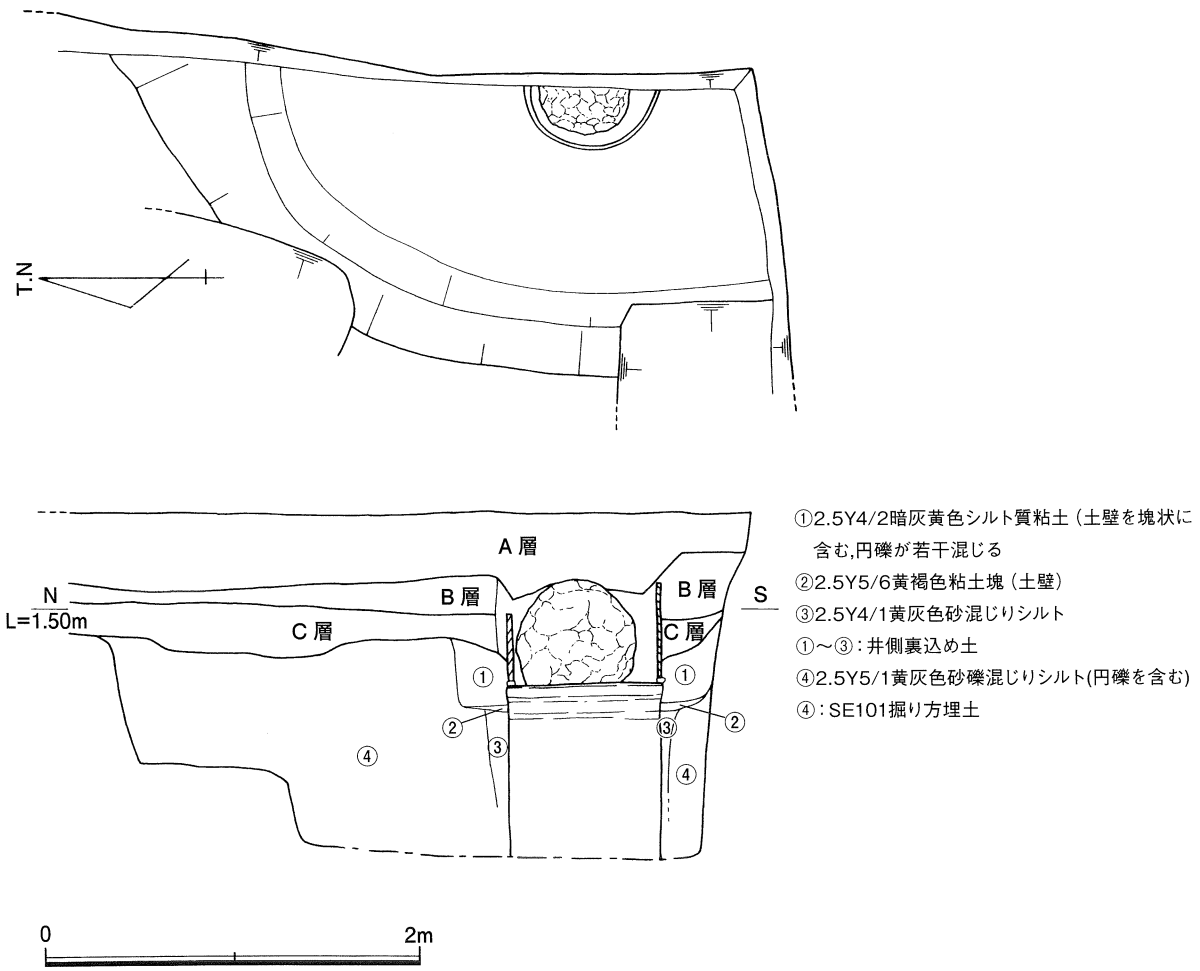
調査地南東隅において確認した井戸跡である。井側が調査地東壁にかかって認められるもので，その掘り方の一部を平面で検出した。掘り方の検出高は0.99 m，深度は0.8 m程を測るもので，段掘りがされている。大半は調査範囲の外に広がるが，遺存する井側に対して大きな掘り方となっている。

井側については，土師質製で2段認められる。下段の井側の設置と上下段の井側の繋ぎ目に土壁を用いており，固定あるいは防水処理を目的としたものと考えられる。下段の井側は完存し，外面の口縁下端には箍状の押圧文が認められる。上段のものについては破損し，花崗岩製の石臼によって塞がれ廃棄されている。また下段に設置された井側の下端より，多量の湧水が認められた。

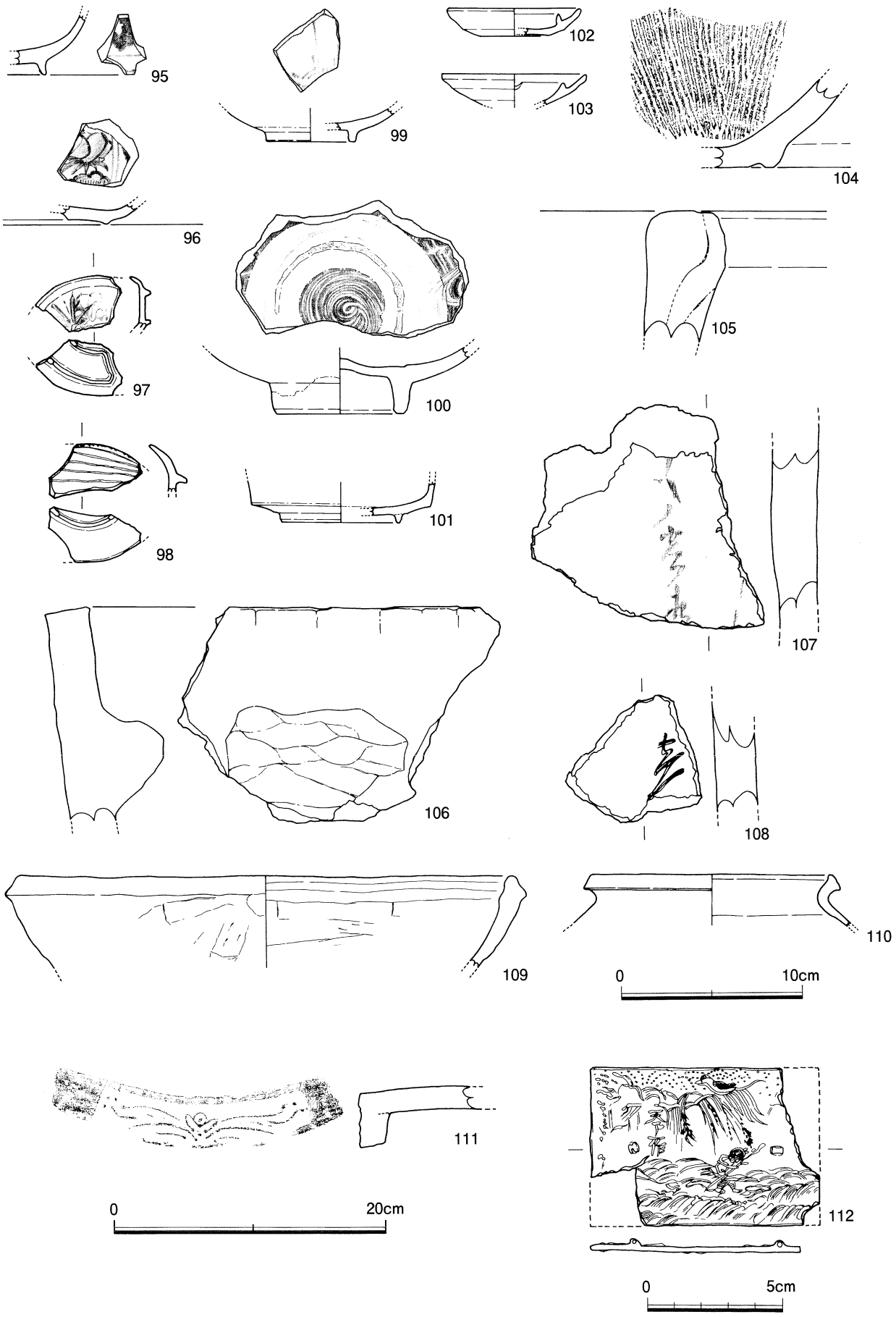
調査地の東・南壁で認められる土層から，掘り方は第1遺構面に帰属することが分かるが，井側の上段部分は近現代の整地層に及んでいる。掘り方の出土遺物については井側の破片を含むコンテナ1/2程度あり，これらを総合して考えると19世紀中葉頃に掘り方が掘削され，井側の改修を行いながら近現代に至るまで井戸として使用されていたことが推察される。

SE101出土遺物（第19図参照）

95～98は，肥前系磁器である。95は染付碗，96は蛇ノ目凹型高台の染付皿である。97・98は小形の変形皿で，97は糸切り細工により成形されている。98は内面に陽刻文をもち，口紅が施されている。99・100は，肥前系陶器である。99は京焼風の皿。100は内面に刷毛目文様をもった鉢で，見込みには蛇ノ目釉剥ぎを施している。101・102は，京・信楽系陶器である。101は筒形の碗，102は灯明皿である。102は施釉を行わず，塗土を施している。103・104は備前系陶器で，灯明皿（103）及び擂鉢の底部（104）である。105～108は，井側に用いられたと考えられる大形の土師質土器。105･106は口縁部で，106には把手が付く。107・108は体部片で，外面に文字が記されている。107は墨書で記され，「□ノ壱（蓋）相」と判読される。108は刻書で「壱」，あるいは「蓋」の字を記したものと考えられる。109は土師質土器擂鉢，110は弥生土器甕の口縁部である。111は軒平瓦で，蕾のつく子葉と陽刻線で表現された三葉の中心飾をもつ。112は，銅製の手鏡である。小形の方鏡で，鏡背には1対の鈕が付く。文様は柳に旅人と見られる人物を主題としたもので，「天下一作」の文字が施されている。



第18図　SE101平・断面図（1/40）



第 19 図　SE101 出土遺物実測図（1/3, 1/4, 1/2）

SK101（第20図参照）

調査地南西部において確認した埋甕である。埋甕には土師質製のものが用いられているが，上半部は破壊されている。体部の径は0.5 m程で，埋設の掘り方は0.6 m程の円形に検出できた。検出高は，1.24 mを測る。埋甕の中から，比較的多数の出土遺物があり，図化したような陶磁器片の他，瓦片や板ガラスの細片が認められる。

所属時期は出土遺物から，概ね19世紀後半頃の所産と推定される。

SK101出土遺物（第20図参照）

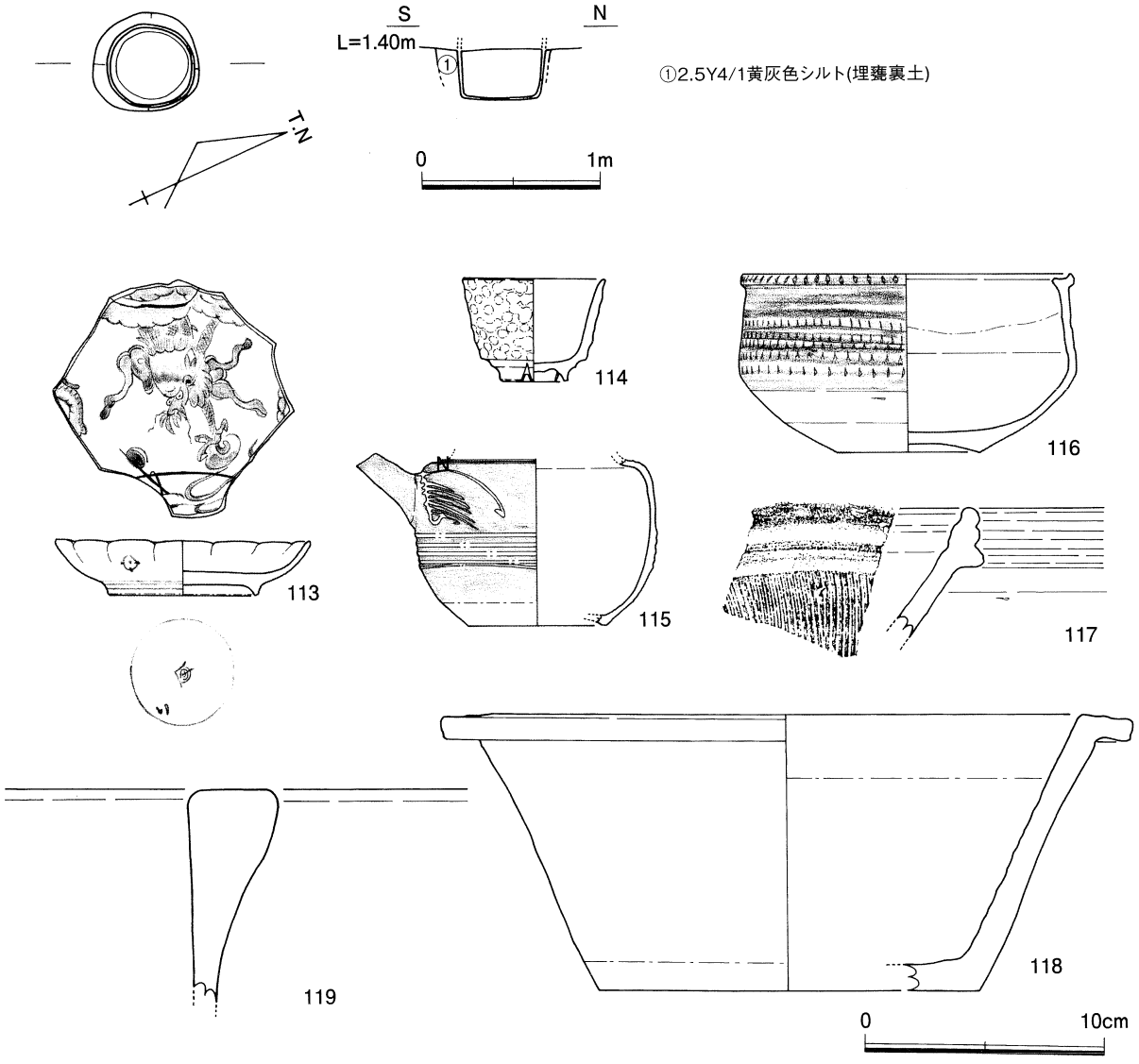
113は肥前系磁器で，染付輪花皿である。焼継ぎ痕と金彩による傷隠しがみられ，高台内に焼継印が記されている。114は京・信楽系陶器で，小杯である。渦高台で抉りをもつ。115・116は，施釉陶器の急須及び鍋である。115の急須は，白土によるイッチン描きの施文が認められる。116の鍋は，外面にトビカンナと鉄泥を施している。117は備前系陶器擂鉢で，口縁部の形態が白神編年（白神1992）のⅡ型式に該当し，堺・明石産と推定される。118は施釉陶器の鉢である。赤色に焼き締まり，暗赤褐色の釉が施されている。119は土師質土器で，大甕あるいは井側の口縁部と考えられる。

SK102（第21図参照）

調査地南西部において確認した土坑である。検出高1.24 m，平面で西端を欠くが，幅1.2 m程の隅丸方形を呈する。断面は舟底形を呈し，深度は0.18 mとなる。埋土は2分層できるが，上・下層とも炭・焼土粒を含み上層部には多量の円礫が混じる。出土遺物は少量で，瓦片のみである。所属時期については，SK103，SX102に後出する重複関係から19世紀中葉以降の所産と考えられる。

SK102出土遺物（第21図参照）

120は三巴文の軒丸瓦である。



第20図　SK101平・断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3）

SK105（第21図参照）

調査地南部において確認した土坑である。検出高1.23m，平面は0.8～1.0m程の不整形な円形を呈し，西壁に段をもち底部が楕円となる。深度は0.46mを測り，埋土は2分層できる。上・下層ともシルト質土で，上層部は焼土粒，瓦片を含み，下層では褐鉄鉱の沈着が認められる。出土遺物は少量で，図化したものの他，肥前系陶器，土師質土器，瓦細片が認められる。所属時期については，平面の重複関係でSA101 P-5を後出して検出されていることから，概ね19世紀中葉頃の所産と推定される。

SK105出土遺物（第21図参照）

121は鉄釘である。

SK106（第21図参照）

調査地南部において確認した土坑である。検出高1.24m，平面は0.8m程の円径を呈し，東壁に弱い段をもち底部が長方形に下がる。深度は0.18mを測り，埋土は2分割される。上･下層とも炭，焼土粒を含んだシルト質土で，上層部においては，黄色を呈した土塊や瓦片が認められる。出土遺物は少量で，図化したものの他は土師質土器細片のみである。所属時期については，平面の重複関係でSK126に後出して検出されていることから，概ね19世紀中葉頃の所産と推定される。

SK106出土遺物（第21図参照）

122は，土師質土器皿である。胎土は鈍い橙色を呈し，底部には回転糸切り痕が残る。

SK108（第21図参照）

調査地西部において確認した土坑である。検出高1.21m，平面については北及び西側を欠くが，概ね長さ2m程の長方形と推定される。深度は0.2mを測り，埋土は炭，焼土粒，小円礫を含むシルト質土の単層である。出土遺物は少量で，図化したものの他，肥前系磁器瓶，京・信楽系陶器端反碗，軟質施釉陶器，土師質土器，瓦細片がある。所属時期については，これらの出土遺物及び遺構面から概ね19世紀中葉頃の所産と推定される。

SK108出土遺物（第21図参照）

123は京・信楽系陶器で，錆絵を施した碗である。124は瀬戸・美濃系陶器で，緑釉を施した（植木）鉢口縁部である。125は菊丸瓦である。126は軒平瓦である。巴の中心飾をもち，高松城編年（佐藤2003）の様相5に相当する。

SK104（第22図参照）

調査地南部において確認した土坑である。検出高1.22m，平面は長さ2m，幅1.2m程の長方形を呈するもので，南端の底面が楕円形に窪む。深度は最深で0.52mを測り，埋土は3層に細分される。埋土は基本的に炭，焼土粒，瓦，円礫を含んだシルト質土で，堆積状況から北方向からの整地により埋没したものと推察される。出土遺物は少量で，図化したものの他，肥前系磁器瓶，備前系陶器，土師質土器細片，丸瓦片がある。所属時期については，平面の重複関係で，SK120より先行しSE101の掘り方より後出して検出されていることから，概ね19世紀中葉頃の所産と推定される。

SK104出土遺物（第22図参照）

127は肥前系磁器で，染付の鉢である。128は平瓦で，凹面にナデ調整を加えるが，凸面が未調整となっている。129はほぼ完存する丸瓦で，長さ25.4cm，幅12.9cmを測る。凹面側にはコビキ，布目圧痕に加えて吊紐痕が認められる。130は軒丸瓦。131～134は，鉄釘類である。

SK114（第23図参照）

調査地北部において確認した土坑である。検出高1.10m，平面は1.1～1.3m程の円形を呈する。深度は0.44mを測り，断面は台形を呈する。埋土は細分され，上位に瓦礫，炭，焼土粒を含むシルト質土が堆積し，下位では砂土となって認められる。隣接する遺構の重複関係では，SK115を切り，SK113に切られて検出できた。出土遺物は少量で，図化したものの他，肥前系磁器碗，同鉢，軒平瓦の細片がある。

SK114出土遺物（第23図参照）

135は肥前系磁器で，染付の紅猪口である。136は施釉陶器火入である。外面に黄灰色の釉を掛け，赤色の上絵を施す。胎土は褐灰色を呈し，富田･理兵衛焼と推定される。

SK115（第23図参照）

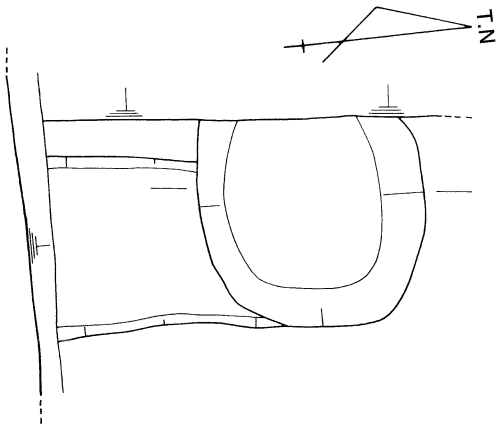
調査地北端において確認した土坑である。検出高1.12m，北端が調査地外へ延びるが，平面は概ね1.5m程の方形を呈するものと推定される。深度は0.22mを測り，埋土は2層に分層できる。上層の堆積物には人頭大の角礫の他，炭，焼土，黄色土塊，瓦礫を含んでおり，整地により埋没したと考えられる。下層には，炭を含んだシルト質土が堆積する。出土遺物は少量で，図化したものの他，肥前系磁器碗，同瓶，肥前系陶器刷毛目鉢がある。所属時期については，出土遺物及び遺構面から概ね18世紀後半～19世紀中葉頃の所産と推定される。

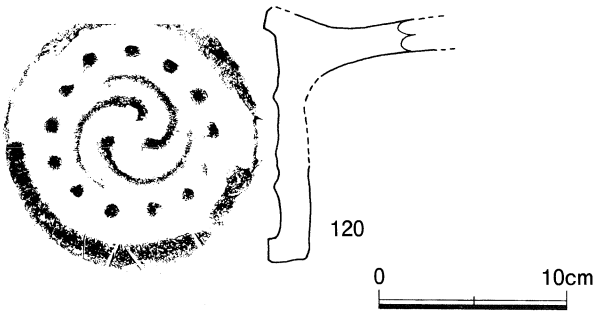
SK115出土遺物（第23図参照）

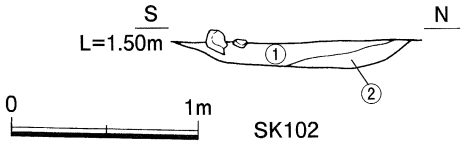
137は肥前系磁器の紅猪口である。

SK116（第23図参照）

調査地北端において確認した土坑である。検出高1.14m，平面は0.94～1.2mの楕円形を呈する。深度は0.41mを測り，断面は台形を呈する。埋土は2層に分層できる。上層の堆積物は炭，焼土，黄色土塊，瓦礫を含んでおり，整地により埋没したと考えられる。下層には，炭，礫を含んだシルト質土が堆積する。出土遺物は少量で，図化したものの他，肥前系磁器碗，肥前系陶器皿，京・信楽系陶器色絵碗がある。出土遺物及び遺構面から概ね18世紀後半～19世紀中葉頃の所産と推定される。

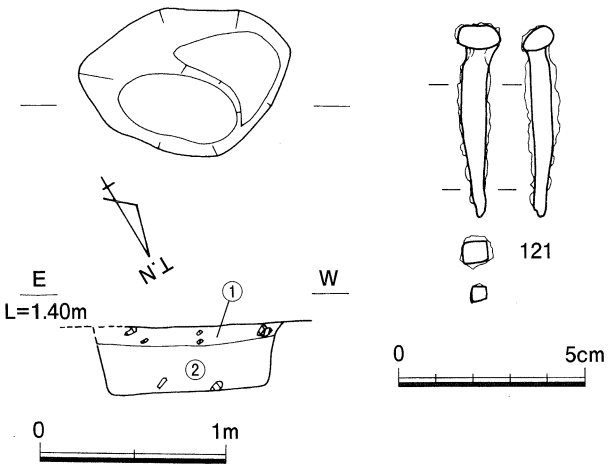






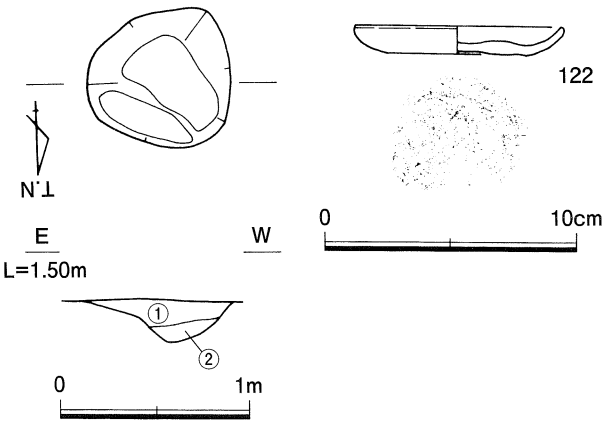
SK102

①5Y5/1灰色砂混じりシルト～シルト質粘土(炭,焼土粒を含む,円礫を多量に含む)
②2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土粒を若干含む,オリーブ黄色土を含む)



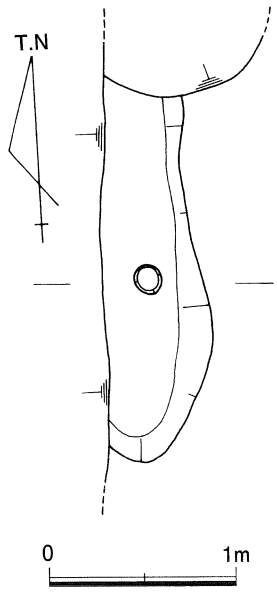
①2.5Y6/2灰黄色シルト質極細砂(炭,焼土粒を若干含む,円礫,瓦片を含む)
②2.5Y5/1黄灰色シルト(炭,褐鉄鉱を含む,円礫を含む)

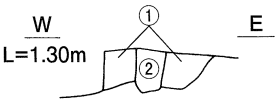
SK105



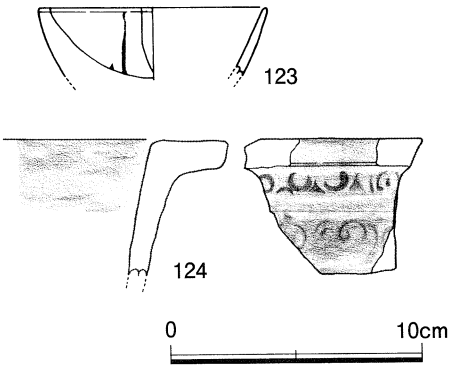
①2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土,瓦片,オリーブ黄色土塊を含む)
②2.5Y4/1黄灰色シルト(炭,焼土粒を若干含む)

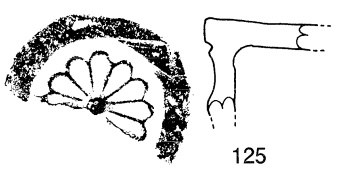
SK106

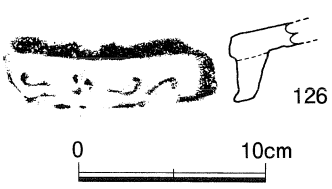




①2.5Y5/3黄褐色シルト(炭,焼土粒,小円礫を若干含む)
②5Y5/1灰色シルト(SP108埋土)

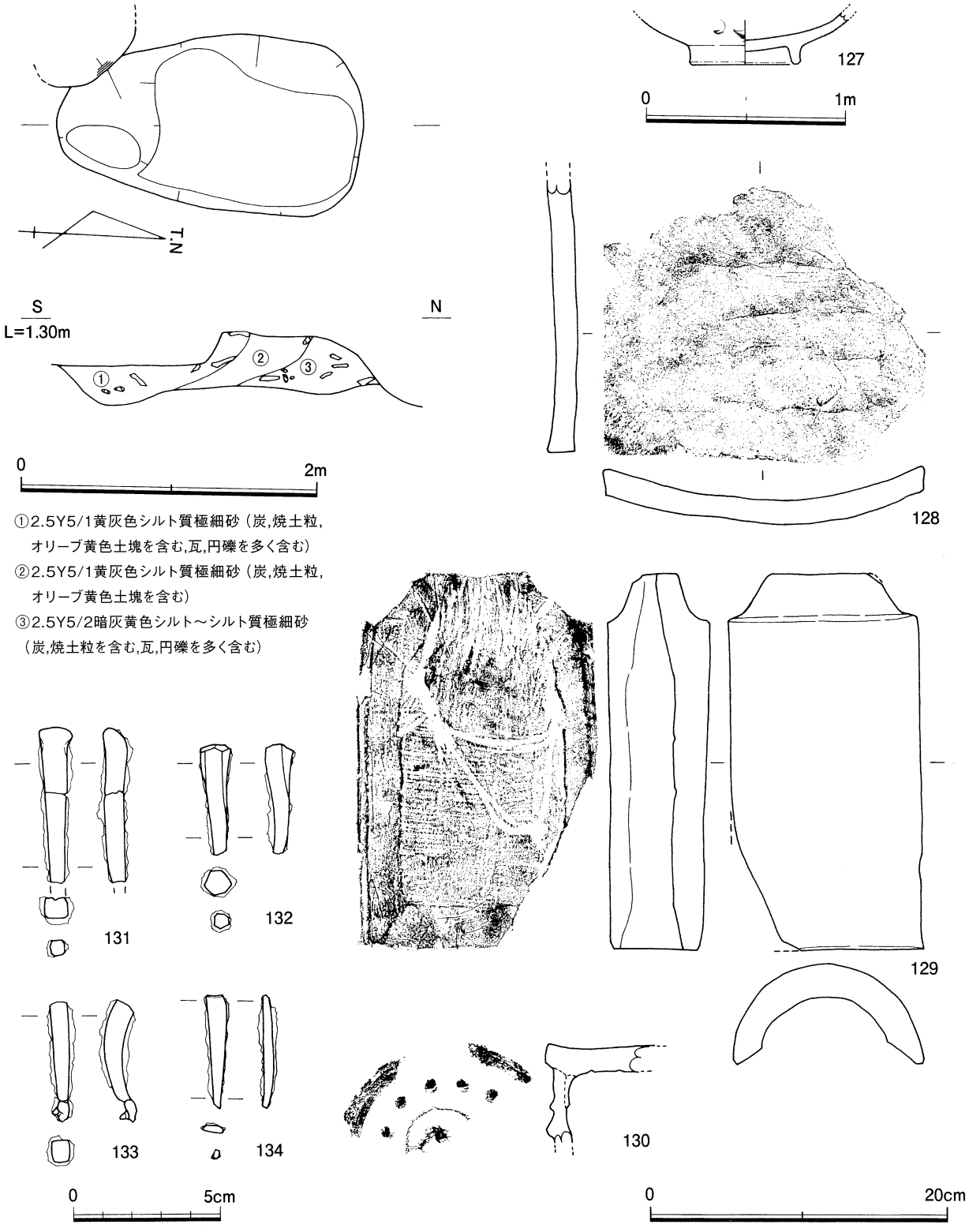




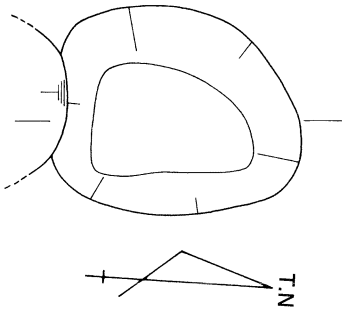


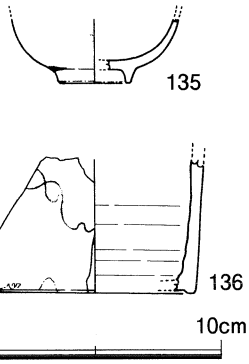
SK108

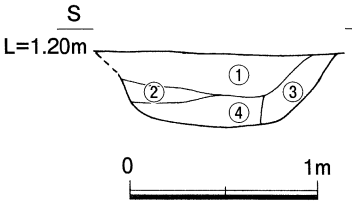
第21図　SK102・105・106・108平・断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3，1/4，1/2）



第 22 図　SK104 平・断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3，1/4，1/2）

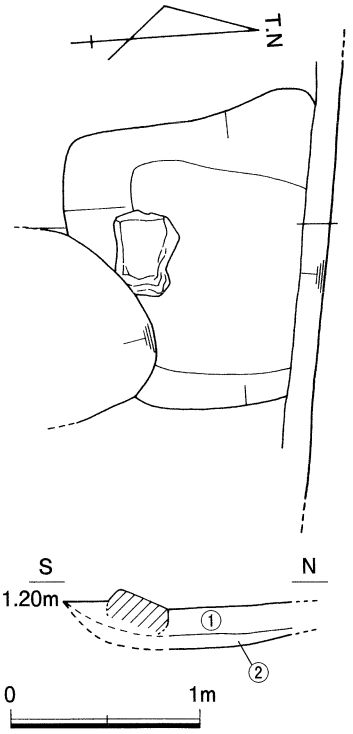




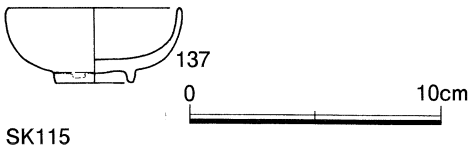


①2.5Y5/1黄灰色シルト(炭,焼土粒を若干含む,瓦礫を多く含む)
②2.5Y6/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土粒を若干含む)
③2.5Y6/1黄灰色極細砂(炭を若干含む)
④2.5Y6/3鈍い黄色砂混じりシルト

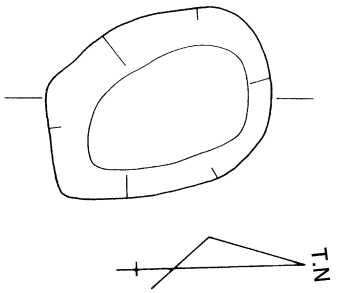
SK114



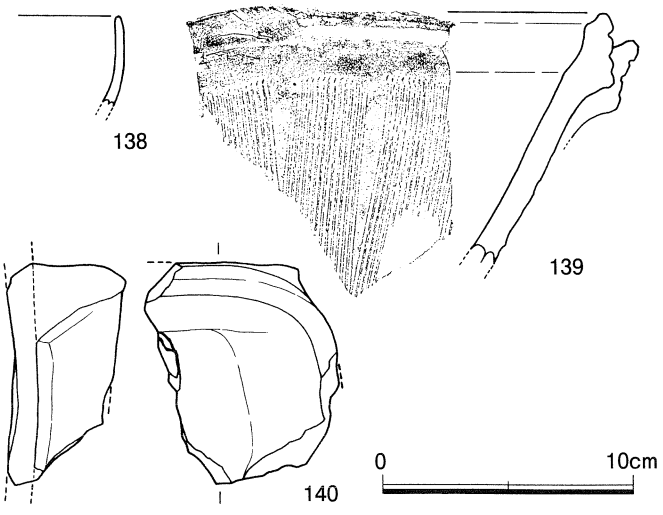
①2.5Y5/1黄灰色シルト(炭,焼土,オリーブ黄色土塊,瓦礫を含む)
②2.5Y6/1黄灰色シルト質極細砂(炭を含む)



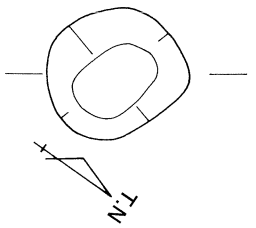
SK115



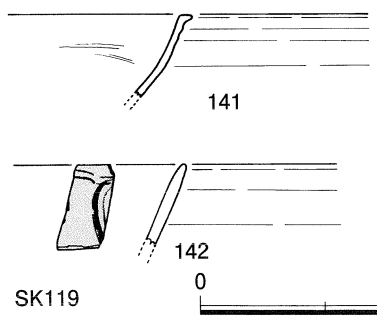
①2.5Y5/1黄灰色シルト(炭,焼土,オリーブ黄色土塊,瓦,礫を含む)
②2.5Y6/1黄灰色シルト(やや砂質,炭を若干含む,礫を含む)



SK116



①2.5Y5/1黄灰色シルト(炭,焼土粒,瓦,礫を含む)
②2.5Y5/1黄灰色シルト(しまる)
③2.5Y6/2灰黄色砂混じりシルト質極細砂



SK119

第23図　SK114・115・116・119平・断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3）

SK116 出土遺物（第 23 図参照）

138 は肥前系陶器で，京焼風碗の口縁部である。139 は，備前系陶器擂鉢の口縁部である。口縁部及び擂目の特徴から，乗岡編年（乗岡 2002）の近世 2b・3 期に相当する。140 は土師器で，竈の焚口部分の細片と考えられる。

SK119（第 23 図参照）

調査地北東部において確認した土坑である。検出高 1.01 m，平面は 0.7 m前後の円形を呈する。深度は 0.26 mを測り，埋土は 3 層に分層できる。上層は炭，焼土，瓦礫を含むシルト質土で，中層の締まったシルト層を挟み，底の段部に下層の砂混じりシルト質土が堆積する。出土遺物は少量で，図化したものの他，土師質土器皿・火鉢の細片がある。所属時期については，平面の重複関係で SK112 に後出して検出されていることから，概ね 19 世紀中葉以降の所産と推定される。

SK119 出土遺物（第 23 図参照）

141・142 は，中国産磁碗の口縁部である。141 は口縁部が「く」字形に外反し，内面に櫛目が認められ横田・森田分類（横田・森田 1978）で白磁碗Ⅵ類に相当する。

142 は龍泉窯系青磁で，内面に片彫りの施文が認められる。

SK120（第 24 図参照）

調査地南部において確認した土坑である。検出高 1.22 m，南半を SX102 により切られているが平面は 0.7 ～ 0.9 m程の楕円形を呈してみられる。深度は 0.37 mを測り，埋土は 2 層に分割される。上・下層とも若干の炭，焼土，を含むシルト質土だが，上層がやや締まる。出土遺物は少量で，図化した土師質土器のみである。所属時期については，平面の重複関係で SK104 に後出して検出されていることから 19 世紀中葉頃の所産と推定される。

SK120 出土遺物（第 24 図参照）

143 は，土師質土器皿である。胎土は灰白色を呈し，見込みに仕上げナデ，底部には板状圧痕が認められ高松城編年（佐藤 2003）の皿Ⅴ形式に相当する。144 は土師質土器甕の口縁部で，胎土は鈍い橙色を呈する。

SK122（第 24 図参照）

調査地北西隅において確認した土坑である。検出高 1.07 m，南半を欠くが平面は 0.6 m程の円形を呈するものと推定される。深度は 0.52 mを測り，埋土は 2 層に分層できる。上層は炭，焼土粒，瓦片を含むシルト質土で，下層は若干の炭を含んだシルト質土である。出土遺物は少量で，図化したものの他，土師質土器足釜，丸・平瓦細片がある。所属時期については，遺構面から概ね 19 世紀中葉頃の所産と推定される。

SK122 出土遺物（第 24 図参照）

145 は砥石である。

SK126（第 24 図参照）

調査地南部において確認した土坑である。検出高 1.23 m，平面は上端が歪になっているが，段が付く内側では径 0.75 m前後の円形を呈している。SX103 を基盤として，深さ 0.67 m前後まで開削されている。埋土は 3 層に分層でき，上・中層は瓦や黄色土塊，炭，焼土粒を含んだ粘質土で，下層は円礫を含む締まった灰色粗砂層である。全体的に井戸状を呈しているが，湧水層には及んでいない。出土遺物は少量で，図化したものの他，肥前系磁器端反碗，肥前系陶器皿，同鉢，京・信楽系陶器瓶，備前系陶器擂鉢がある。所属時期については，出土遺物から概ね 19 世紀中葉頃の所産と推定される。

SK126 出土遺物（第 24 図参照）

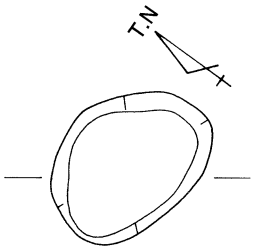
146 は，土師質土器足釜である。147 は施釉陶器小杯で，鳥を描く鉄絵と高台に抉りをもつ。

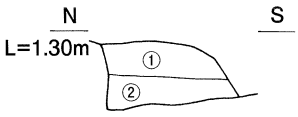
SK112（第 25 図参照）

調査地北部において確認した土坑である。検出高 1.12 m，SK113・118 に切られるが，平面は 1.7 m足らずの円形を呈している。深度は 0.94 mを測り，断面は上方で段が付く。埋土は 4 分割され，上層は炭，焼土，土壁，小円礫を含むシルト質土で，中層の極細砂層を挟み下層では，炭や土壁を含んだシルト質土が堆積しており多量の遺物が認められた。土坑としたが，最下層の小円礫を含む灰色砂質土において湧水が認められ，出土遺物に井側とみられる土師質土器片が多数認められたことから，井戸跡であった可能性が考えられる。出土遺物はコンテナ 5 箱分あり，図化したものの他にも肥前系磁器碗・皿・瓶，肥前系陶器刷毛目鉢，瀬戸・美濃系陶器碗・鉢・水甕，京・信楽系陶器端反碗・小杉碗・急須・蓋・瓶・香炉類，施釉陶器碗，軟質施釉陶器土瓶類，丸・平瓦などが認められる。所属時期については，出土遺物から概ね 19 世紀中葉頃の所産と推定される。

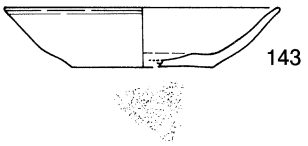
SK112 出土遺物（第 25 ～ 27 図参照）

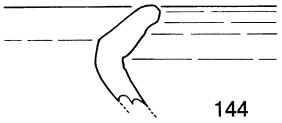
148・149 は鉄釉，白色釉を重ねた施釉陶器碗で，平杉形を呈し渦高台をもつ。胎土・釉調から，富田・理兵衛焼との関連が推察される。150 ～ 153 は京・信楽系陶器で，150 は端反碗，152・153 は小杉碗である。151 は長く外反する口縁をもち，透明色の釉を施す。貫入が著しい。154・155 は瀬戸・美濃系陶器で，碗蓋及び碗である。154 は，呉須色の染付文様をもつ。155 は広東碗で，呉須及び鉄錆を用いて外面の宝珠文を施文している。見込には，五弁花を描く。156 ～ 159 は，磁器製の紅猪口である。156・158 は関西系，あるいは瀬戸・美濃系，157・159 は肥前系のものである。160 は瀬戸・美濃系陶器で，ヒダ皿である。161 は肥前系磁器で，蛇ノ目凹形高台をもつ輪花の染付皿である。162・163 は，備前系陶器灯明皿である。164 は施釉陶器火入である。鎬文をもち，鉄釉が施されている。165 は鉄釉，白釉を重ねる陶器蓋で，



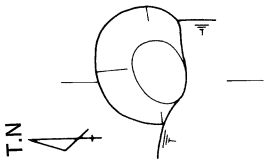


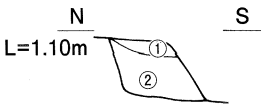
①2.5Y6/2灰黄色シルト質極細砂(やや締まる,炭,焼土粒を若干含む)
②2.5Y4/1黄灰色シルト(炭,焼土粒を若干含む)



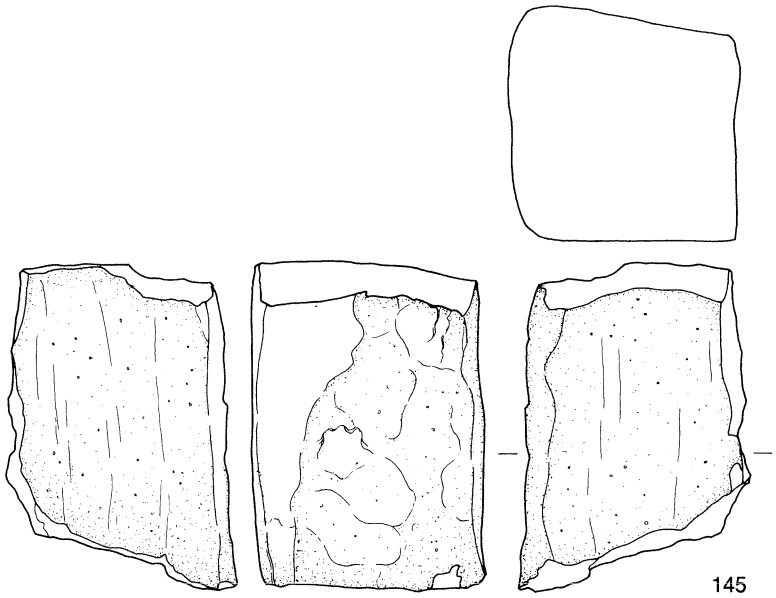


SK120

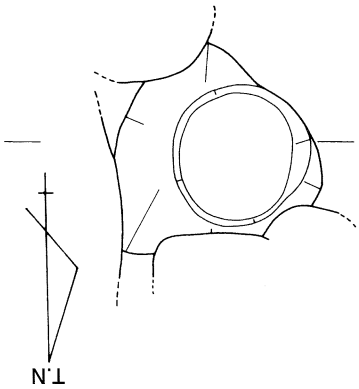


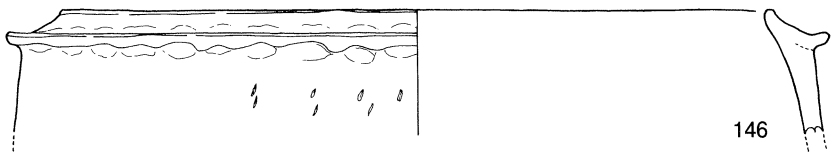


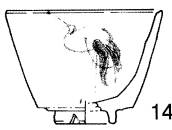
①2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土粒,瓦片を含む)
②2.5Y6/1黄灰色シルト質極細砂(炭を若干含む)

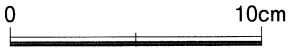


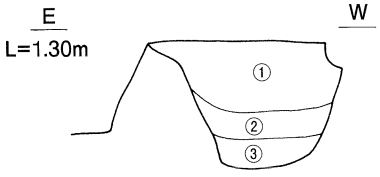
SK122







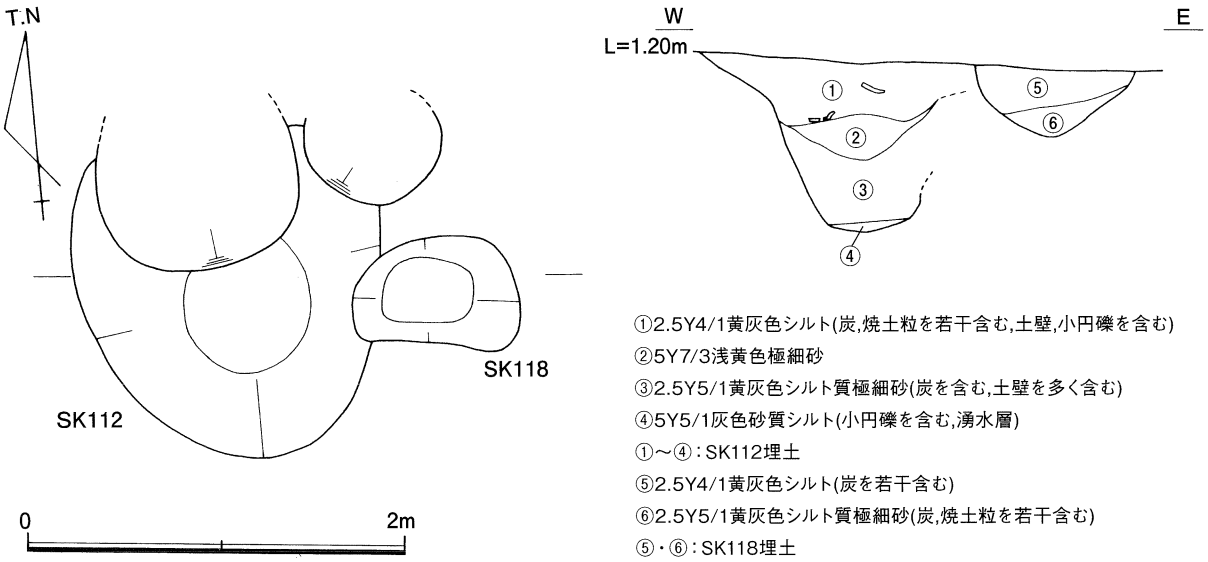




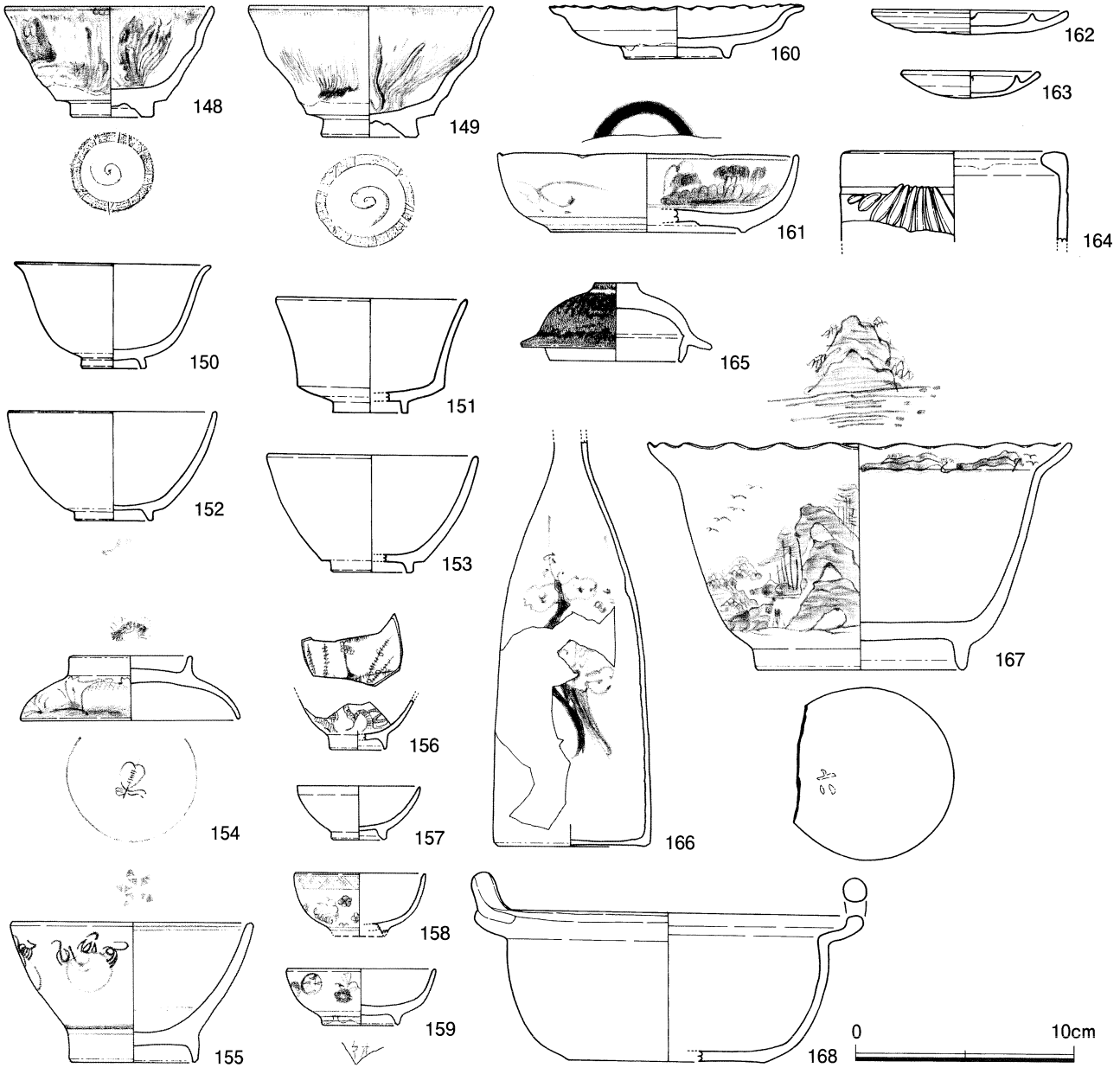
①5Y7/4浅黄色シルト質粘土(瓦片を含む)
②2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土(炭,焼土粒,浅黄色土塊を含む)
③5Y5/1灰色粗砂(締まる,円礫を含む)

SK126

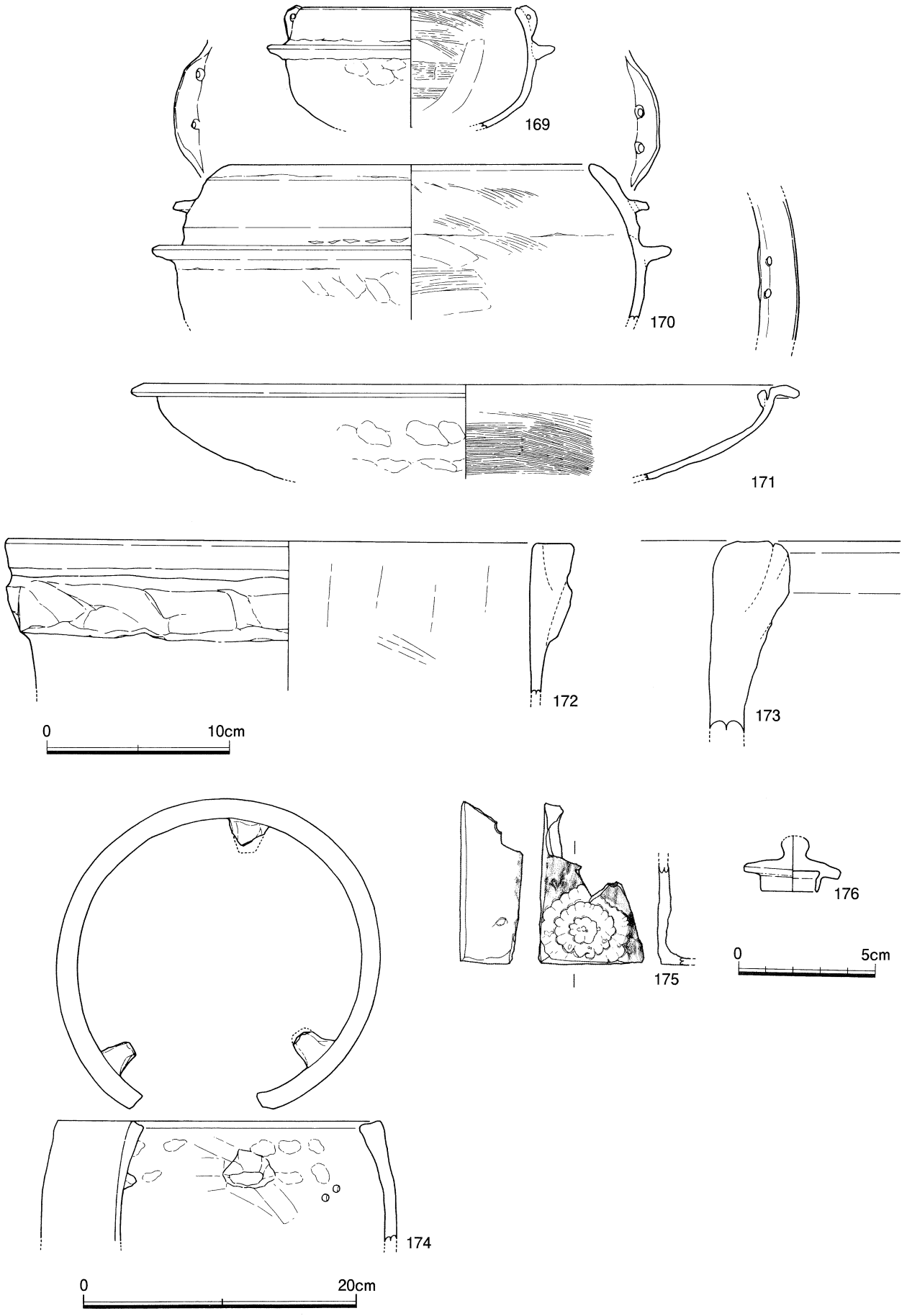
第 24 図　SK120・122・126 平・断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3，1/2）



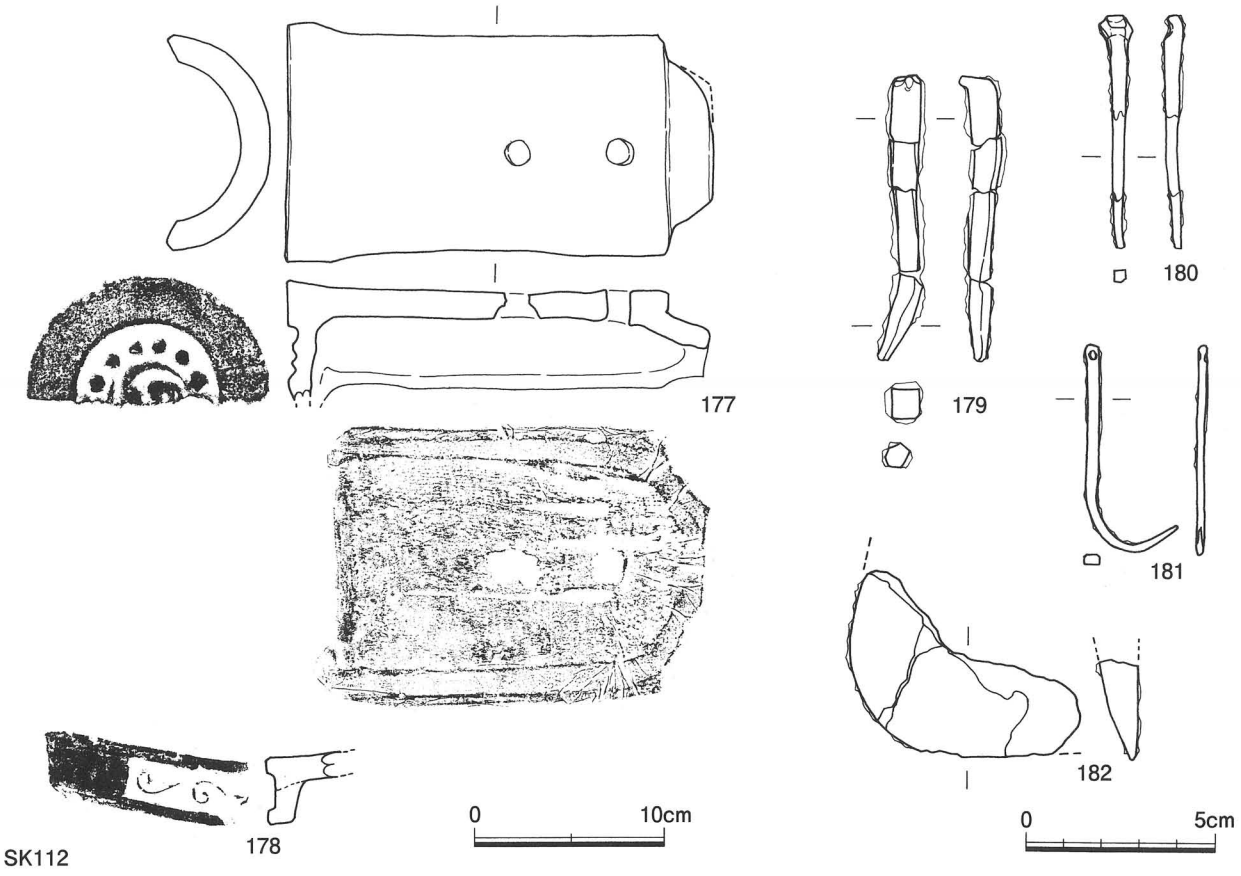
①2.5Y4/1黄灰色シルト(炭,焼土粒を若干含む,土壁,小円礫を含む)
②5Y7/3浅黄色極細砂
③2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭を含む,土壁を多く含む)
④5Y5/1灰色砂質シルト(小円礫を含む,湧水層)
①～④：SK112埋土
⑤2.5Y4/1黄灰色シルト(炭を若干含む)
⑥2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土粒を若干含む)
⑤・⑥：SK118埋土

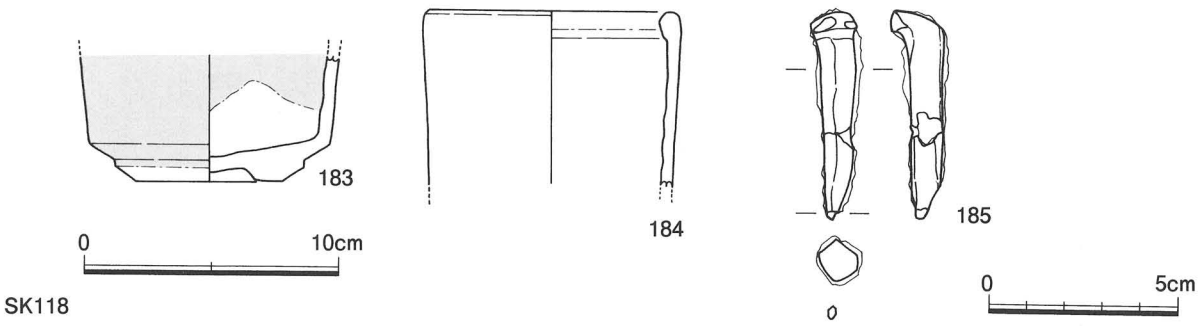


第25図　SK112・118平・断面図（1/40），SK112出土遺物実測図（1/3）



第 26 図　SK112 出土遺物実測図（1/3，1/4，1/2）





第 27 図　SK112・118 出土遺物実測図（1/3, 1/4, 1/2）

胎土は暗赤褐色に焼き締まる。受け部には熔着痕が認められる。

166 は京・信楽系陶器で，鉄絵を施した瓶である。167 は肥前系磁器で，山水文の染付文様をもつ鉢である。焼継ぎ痕，金彩の傷隠しがみられ，高台内に「六」の焼継印が記されている。168 は陶器鍋で，外面が煤化している。169・170 は土師質土器羽釜，171 は同焙烙である。172・173 は土師質土器の甕類で，172 は口縁部に貼付の突帯をもつ。173 は，井側と考えられる大形品の口縁部である。174 は土師質製の焜炉である。重複関係のある SK113 出土品と接合する。焚口は口縁上端から切り込み，口縁内側に 3 箇所の切欠きをもつ。外面は平滑だが，内面には指オサエ，ナデ調整が認められる。175 は肥前系磁器の水滴である。176 は軟質施釉陶器で，ミニチュア玩具である。　177 は 2 箇所の釘穴をもつ三巴文軒丸瓦で，凹面にはコビキ痕，刺子及び内叩き痕が残る。178 は唐草文軒平瓦である。179 ～ 182 は金属製品で，179･180 は鉄釘，181 は釣針状の金具である。182 は片刃のもので，刃器類と考えられる。

SK118（第 25 図参照）

調査地北部において確認した土坑である。検出高 1.01 m，平面は 0.56 ～ 0.88 mの楕円形を呈するもので，西端は SK112 を切り込み開削されている。深度は 0.37 mを測り，断面はU字形を呈する。埋土は 2 層に細分できるが，概ね上・下層ともは若干の炭，焼土粒を含むシルト質土で充填されている。出土遺物は少量で，図化したものの他，肥前系磁器碗，瀬戸・美濃系陶器腰錆碗，京・信楽系陶器色絵碗がある。所属時期については，平面の重複関係で SK112 に後出して検出されていることから，概ね 19 世紀中葉以降の所産と推定される。

SK118 出土遺物（第 27 図参照）

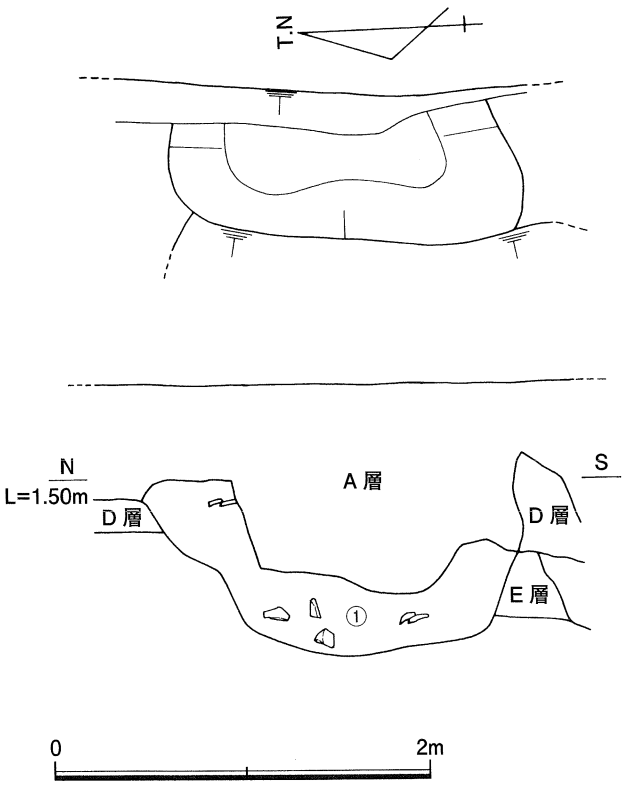
183・184 は火入で，183 は肥前系磁器青磁，184 は京・信楽系のものである。183 の見込みには，砂粒の熔着痕が認められる。185 は鉄釘である。

SK125（第 28 図参照）

調査地中央部，東端において確認した土坑である。検出高 1.01 m，平面は南北方向に 1.85 m，東西方向では 0.56 mを測るが，調査範囲外になる東方向へと広がる。SX101 と隣接する西端は，不明瞭ながらこれに切られているものと判断した。深度は 0.46 mを測り，断面は北側で段が付くことが調査地東壁で確認できた。埋土は単層で，瓦礫を多量に含むシルト質土で充填されている。出土遺物はコンテナ 1/4 箱分あり，図化したものの他，肥前系磁器碗，瀬戸・美濃系磁器碗，瀬戸・美濃系陶器碗，京・信楽系陶器端反碗，施釉陶器甕，軟質施釉陶器鍋類，備前系陶器灯明皿，土師質土器甕類，瓦質土器羽釜等がある。所属時期については，出土遺物から概ね 19 世紀中葉以降の所産と推定される。

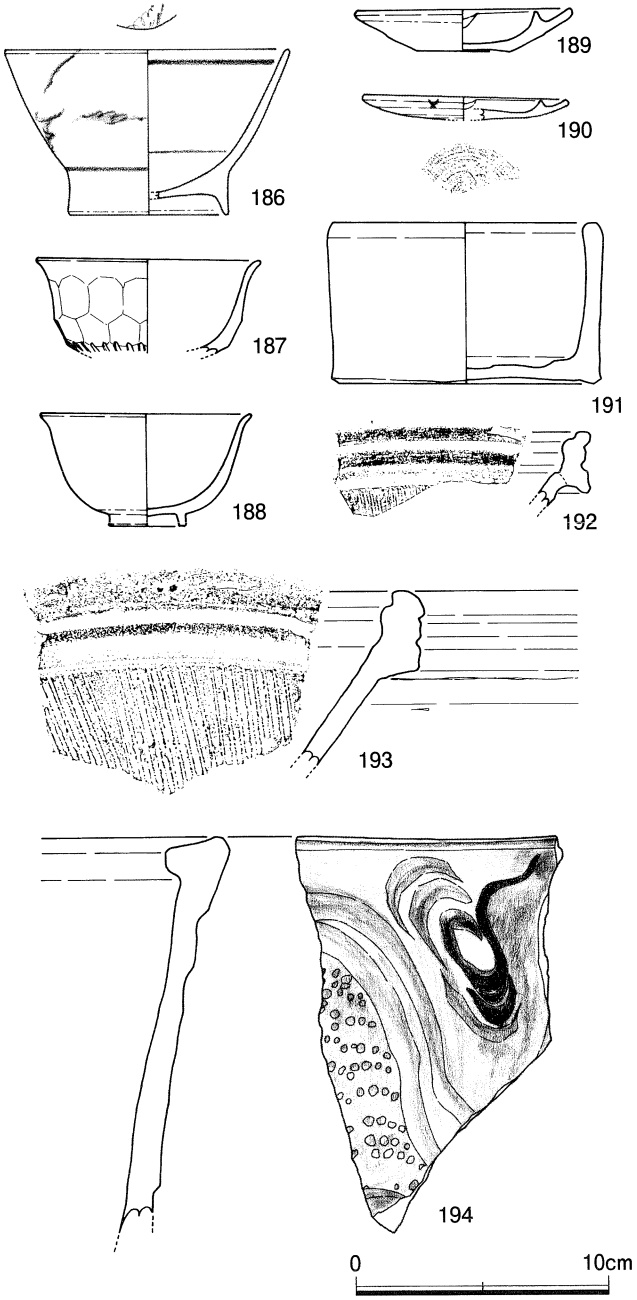
SK125 出土遺物（第 28・29 図参照）

186 は肥前系磁器で，広東碗である。187 ～ 189 は，京・信楽系陶器である。187 は，亀甲と鎬を型押しした碗。188 は端反碗，189 は灯明皿である。190 ～ 193 は，備前系陶器である。190 は灯明皿。191 は（匣）鉢。192・193 は擂鉢で，口縁部の形態が白神編年（白神 1992）のⅡ形式に該当し，堺・明石産と推定される。194 は瀬戸・美濃系陶器水甕である。195 ～ 197 は土型で，何れも土製人形類の外型である。195 は橙色を呈した精良な胎土

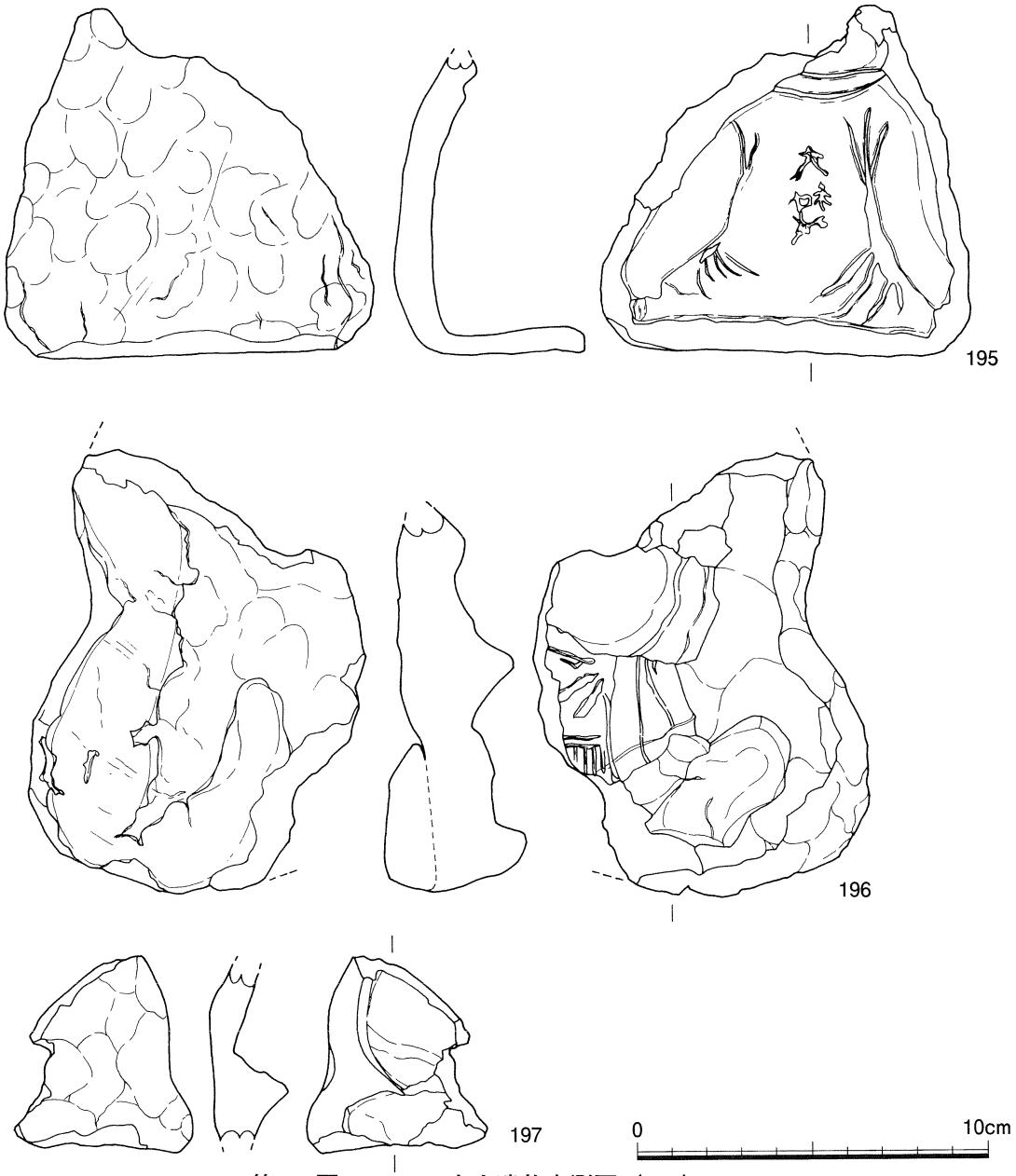


調査地東壁土層図

①2.5Y4/1黄灰色シルト(瓦,礫を多量に含む,鉄分沈着)：SK125埋土



第 28 図　SK125 平・断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3）



第 29 図　SK125 出土遺物実測図（1/2）

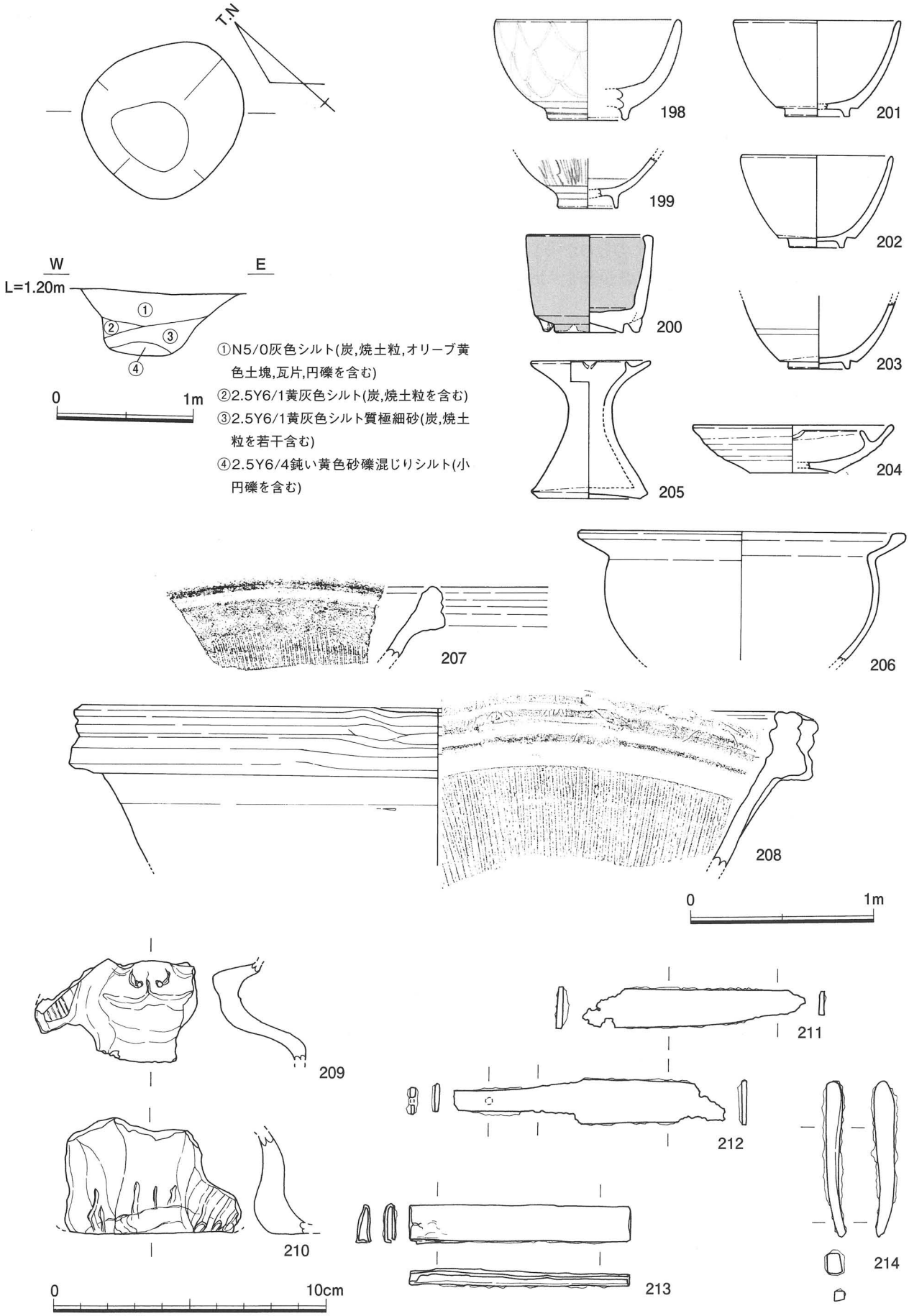
を用い，凹面は衣服の皺と「大和」の文字を刻み，キラコを塗布している。凸面には指オサエが顕著に残る。196 は，鈍い橙色を呈し砂粒・金雲母を含んだ胎土を用いる。凹面にキラコの塗布，凸面に指オサエ，ケズリ調整が認められる。197 は，やや粗い砂粒を含む灰白色の胎土を用いる。

SK113（第 30 図参照）

調査地北部において確認した土坑である。検出高 1.12 m，平面は 1.1 m前後の円形を呈し，北・南端で SK114 と SK112 を切り込んで開削されている。深度は 0.61 mを測り，断面は台形で中位に弱い段がみられる。埋土は 4 層に分層でき，上層にややグライ化した瓦や円礫，黄色土塊等を含んだシルトが厚く堆積し，中位に炭，焼土粒を含むシルト質土，最下層には砂礫混じりのシルト層が認められる。遺物は概ね中位までに存在し，コンテナ 1/4 箱分が出土した。出土遺物には図化したものの他，肥前系磁器蓋，肥前系陶器刷毛目鉢，瀬戸･美濃系陶器植木鉢，京・信楽系陶器端反碗，施釉陶器碗，軟質施釉陶器急須，土師質土器甕類等が認められる。所属時期については，平面の重複関係で SK112 に後出して検出されていることから，概ね 19 世紀中葉以降の所産と推定される。

SK113 出土遺物（第 30 図参照）

198 ～ 200 は肥前系磁器である。198 は，波佐見産と推定される二重網目文の碗。199 は小広東碗の底部。200 は青磁香炉である。201 ～ 204 は，京・信楽系陶器である。201 ～ 203 は小杉碗。204 は灯明皿である。205・206 は施釉陶器で，205 は灯明具，206 は鍋で，何れも暗赤褐色に施釉される。207・208 は備前系陶器擂鉢で，各々口縁部等の特徴から，207 が乗岡編年（乗岡 2002）の近世 2b･3 期に相当し，208 については白神編年（白神 1992）のⅡ形式に相当するもので堺・明石産と推定さ



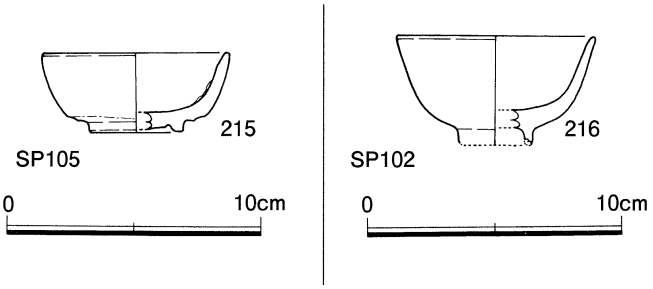
第 30 図　SK113 平・断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3，1/2）

れる。209・210は型成形された狛犬，あるいは獅子とみられる中空の土製品である。209は灰白色を呈した精良な胎土で，210の胎土は鈍い橙色を呈する。211～214は，金属製品である。211～213は小柄で，刃部，柄が分割して出土したが，本来は同一品とみられる。214は鉄釘である。

第1遺構面ピット出土遺物（第31図参照）

第1遺構面では，13箇所でピットが検出された。土坑とともに密集して分布し，埋土についても同様に炭や焼土粒，黄色の粘土塊を含むシルト質土のものが多数を占める。深度は概ね0.3m前後となるものが多く，出土遺物も僅かであった。

215はSP105，216はSP102の出土遺物で，瀬戸・美濃系磁器の小碗である。



第31図　SP105・102出土遺物実測図（1/3）

SX101（第32図参照）

調査地中央部において確認した性格不明遺構である。検出高1.14m，平面は長軸で約3m，短軸で約2.5mを測る長方形を呈する。深度は0.91mを測り，断面は台形を呈する。埋土は10層に細分できたが，概ね3つにまとめられる。上位には炭，焼土粒，黄色土塊が混じる締まったシルト層が存在し，中位では瓦礫混じりのシルト質土となり，下位ではややグライ化し瓦礫を多量に含む砂質土の堆積が認められる。また底付近では，若干の湧水がみられた。瓦片を除けば，遺構の規模に比べて出土遺物は少なく，コンテナ1/2箱分となった。図化したものの他では，青花細片，肥前系磁器碗，同皿，同瓶，肥前系陶器鉢，瀬戸・美濃系陶器鬢水入れ，京・信楽系陶器碗，施釉陶器鉢，備前系陶器擂鉢，同灯明皿，土師質土器椀，丸・平瓦の細片が認められる。所属時期については，これらの出土遺物から，概ね19世紀中葉頃の所産と推定される。

SX101出土遺物（第32図参照）

217は中国産白磁碗の口縁部，218は土師質土器杯の口縁部，219は弥生土器脚部，220は土師質土器足釜で，中世以前の所産であり混入遺物と考えられる。

221～223は，肥前系磁器の紅猪口である。224は京・信楽系陶器色絵碗の底部で，高台内に紅とみられる赤色の付着物が認められる。225は京・信楽系陶器の灯明皿である。226は三巴文軒丸瓦の細片である。227は粘土塊で，粗いケズリ調整が認められる。

SX103（第33図参照）

調査地南西部において確認した性格不明遺構である。検出高は最高位で1.25mを測るが，SA101，SK101・105・106，SX101などが基盤としており，第1遺構面の下層部に相当する。東面を撹乱等により欠くが，平面は長軸で5.5m，短軸で2mの規模をもった長方形と推定される。深度は0.56mを測り，断面は台形状と推定される。埋土の堆積状況については，概ね上位に炭，焼土粒を含んだシルト層があり，中位以下は底部に至るまで炭，焼土を含んだ瓦礫混じりの堆積が認められる。出土遺物はコンテナ1箱分で，図化したものの他では，肥前系磁器碗，肥前系陶器細片，備前系陶器瓶，土師質土器細片，丸・平瓦片，牛馬の歯が認められる。所属時期については，これらの遺物から概ね17世紀後半以降の所産と推定される。

SX103出土遺物（第33図参照）

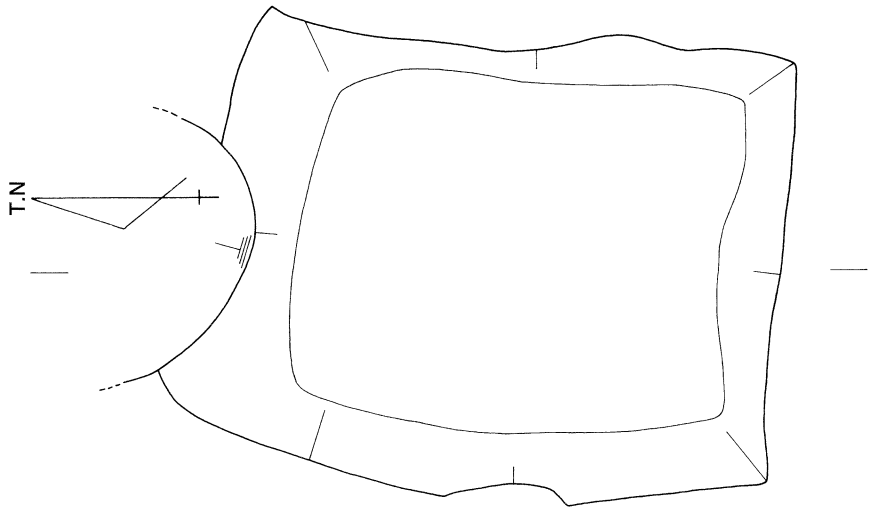
228は中国産白磁碗の口縁部である。229は肥前系陶器の口縁部である。230は備前系陶器甕の口縁部で，突帯をもつ。231・232は備前系陶器擂鉢で，乗岡編年（乗岡2002）の近世1b～2期の所産と考えられる。233は肥前系陶器で，象嵌文様を施す三島手の大皿である。見込み及び畳付に砂目の熔着が認められる。大橋編年（大橋2000）では，Ⅱ・Ⅲ期の所産と考えられる。234は丸瓦の玉縁部である。235は鉄釘である。

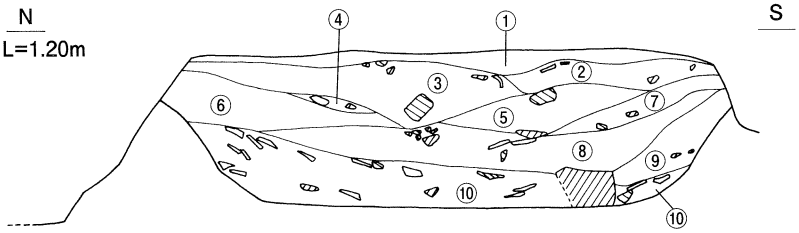
SX102（第34図参照）

調査地南端において確認した性格不明遺構である。検出高1.22m，平面は南面を欠き北・東側については複数の遺構と重複し判然としない。深度は0.28mを測り，埋土は炭，焼土，黄色土塊，瓦礫を含むシルト質土の単層である。出土遺物はコンテナ1/4箱分で，図化したものの他では，肥前系磁器皿，備前系陶器擂鉢，軟質施釉陶器鍋，丸・平瓦片，粘土塊が認められる。所属時期については，出土遺物から概ね19世紀中葉頃の所産と推定される。

SX102出土遺物（第34図参照）

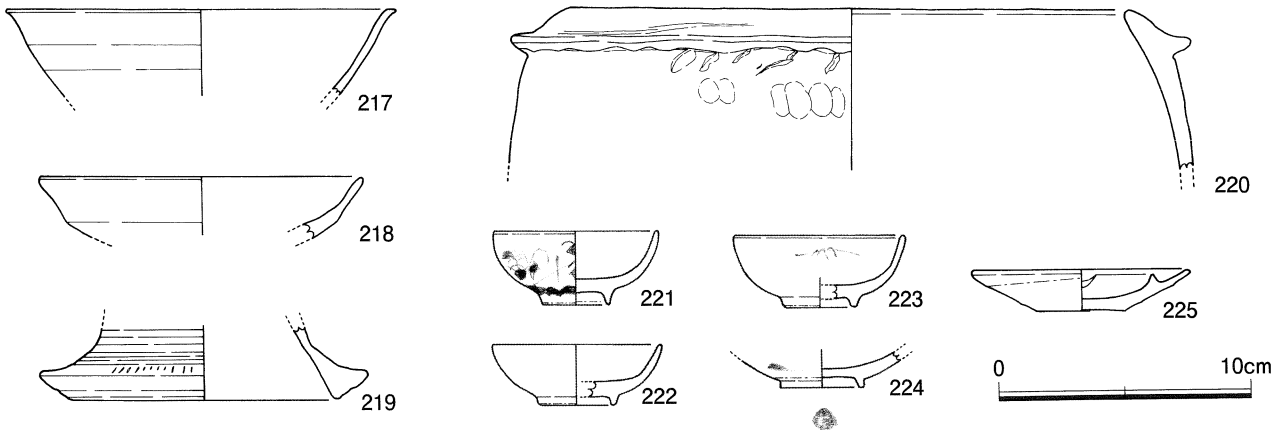
236は肥前系磁器で，染付文様の蓋である。237は肥前系磁器碗で，外面に上絵の痕跡が認められる。238は瀬戸・美濃系磁器の端反碗口縁部である。239は肥前系磁器で，氷裂菊花文を染付けた碗底部である。240は京・信楽系陶器の小杉碗である。241は備前系陶器の灯明皿である。242は三巴文軒丸瓦の瓦当部である。

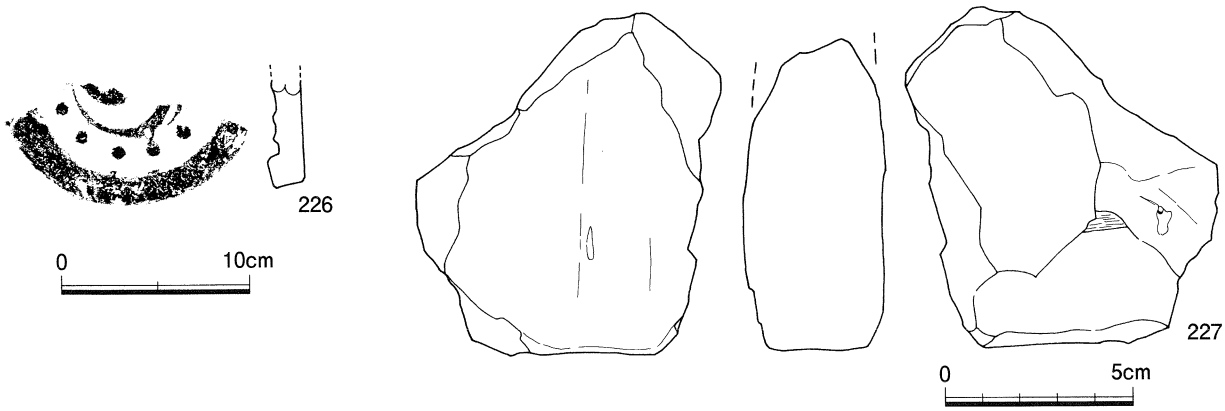




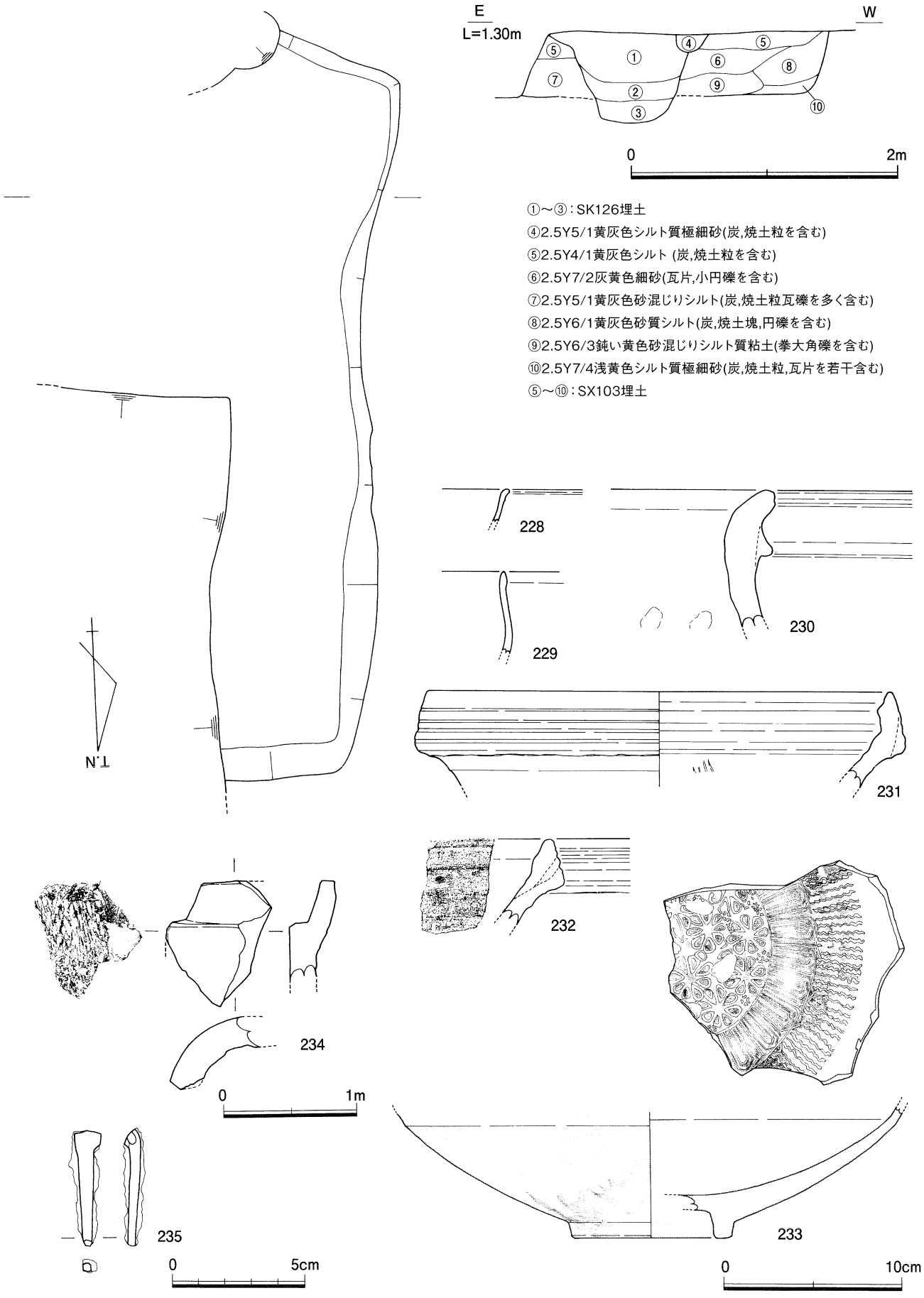
①2.5Y6/2灰黄色シルト(締まる,炭,焼土粒を含む,オリーブ黄色土塊混じる)
②2.5Y6/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土粒,瓦片,小円礫を含む)
③2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土粒,瓦,礫を含む)
④2.5Y5/1黄灰色砂混じりシルト質極細砂(炭,焼土粒,瓦,礫を含む)
⑤2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(やや砂質,瓦礫を含む,炭,焼土粒を若干含む)
⑥2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(やや砂質,炭,焼土粒,褐鉄鉱を含む)
⑦2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(小円礫,褐鉄鉱を含む,炭,焼土粒を若干含む)
⑧2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(やや砂質,瓦礫,褐鉄鉱を含む,炭,焼土粒を若干含む)
⑨2.5Y4/1黄灰色砂混じりシルト(小円礫を多く含む,炭,焼土粒を含む)
⑩N5/0灰色砂質シルト(瓦礫を多く含む)

0 10cm

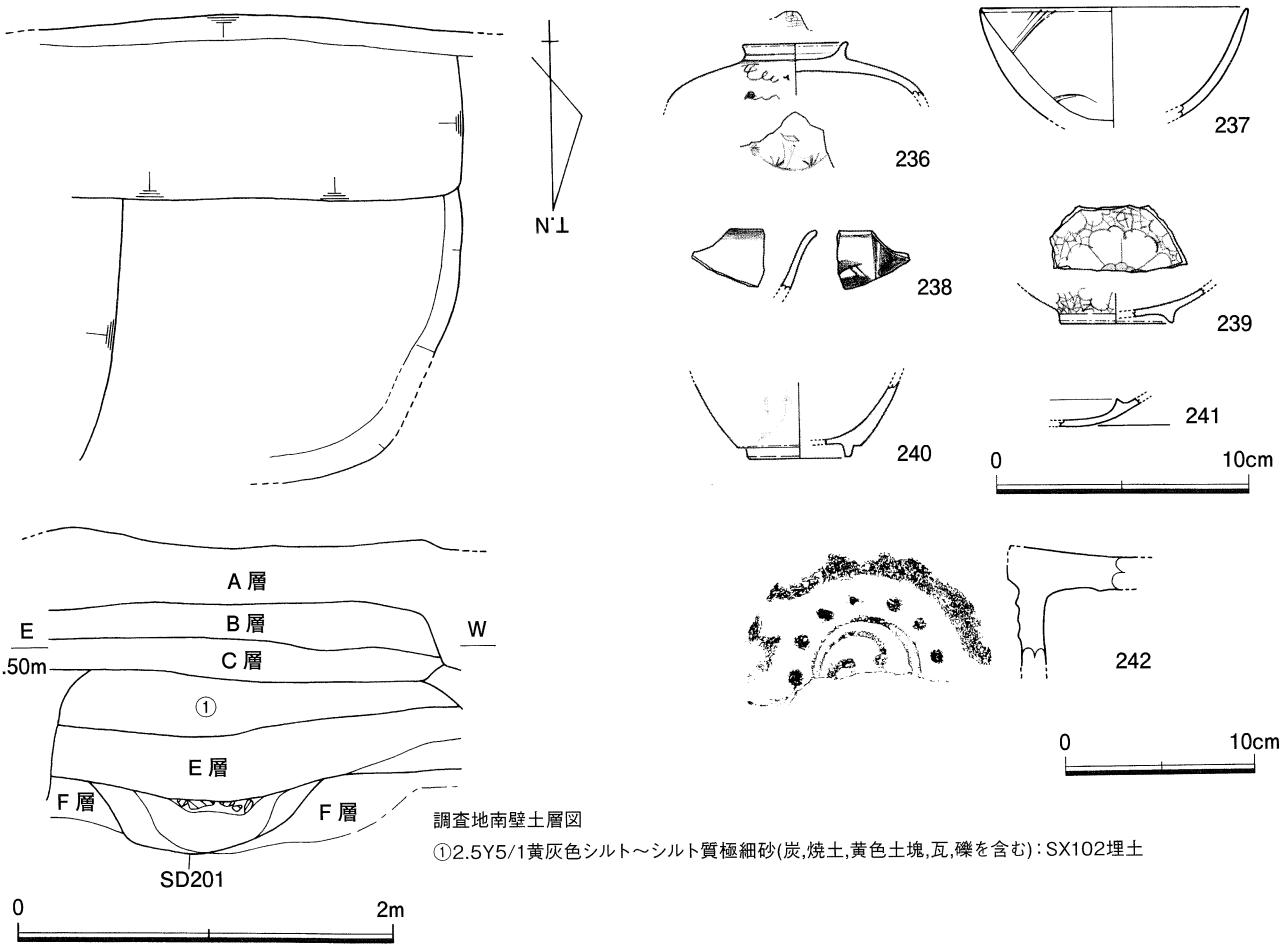




第32図　SX101平・断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3，1/4，1/2）



第 33 図　SX103 平・断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3，1/4，1/2）



調査地南壁土層図

①2.5Y5/1黄灰色シルト～シルト質極細砂(炭,焼土,黄色土塊,瓦,礫を含む):SX102埋土

第34図　SX102平・断面図（1/40），出土遺物実測図（1/3，1/4）

第4章　ま　と　め

第1節　中世以前について

中世以前における高松城跡の周辺の状況は，1995年以降，高松駅周辺の再開発に伴う発掘調査（乗松2004，佐藤2003，松本2003a・bなど）によってデータの蓄積が進んでいる。近年，これらの成果や本市の発掘調査成果に基づく考古学的研究と文献史学の研究成果（田中1996，上野2007a・b，渋谷2007a・b，佐藤2007）の総合化によって，地形復元や遺構変遷，中世港町としての「野原」やその景観が解明されつつあるとともに，古代以前の様相や近世との連続性（大嶋2007・佐藤2007b）なども明らかにされるなど，目を見張る成果を挙げている（上野・佐藤2007，松本2007a・b，大嶋2007，市村2007）。

今回の調査の第2遺構面において中世以前の遺構を確認することができたが，検出できた遺構に対して出土した遺物の量が非常に少ないため，時期を限定できる遺構は僅かである。そのため，本節では先の成果の比較を通じて，今回の調査成果についてまとめることとする。

【弥生時代後期後半】

確実な当該期の遺構はSK210とSP232のみであるが，その他の遺構（SB201，SD201，SK202，SK203，SK214）からも出土遺物に混入する形で弥生土器が出土している。近接するヨンデンビル建設に伴う調査（小川2004）でも，弥生時代終末期～古墳時代前期の遺構・遺物が確認されている。また，明確な遺構はないが，当該期の遺物が出土した東町奉行所の調査（小川2005），無量寿院跡の調査（中西2005）などもある。

今回の調査でSK210とSP232が確認された範囲は，砂堆の中でもより高い箇所で，砂堆の中でもあまり削平を受けていない範囲では，弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺構が確認できる可能性が想定される。既に指摘されているように，この周辺が砂堆の中でもより安定した土地であったと考えられ，今後の資料の蓄積が期待されるところである。また，西日本レベルで見た場合，砂堆に築かれた当該期の遺跡（港湾的集落）が他所でも確認されており，高松城跡周辺でも同様な性格の遺跡が確認される可能性も考えられる。

【古代】

古代以降と判断できた遺構はSK203とSP203のみである。周辺の調査では，ヨンデンビル建設に伴う調査（小川2004）や丸の内地区の調査（松本2003）で確認されているが，遺構・遺物とともに僅かである。丸の内地区の調査では，9～10世紀の遺物が出土した遺構は大きく削平されており，古代以前の遺構は，中世以降に削平されている場合も想定される。

【中世】

中世以降と判断できる遺構は，SB201，SD201・202，SK202・208・209・213・214，SP217・224・230・231・253・254である。その中でも時期を限定できる遺構は下記のとおり，大きく2つの時期に分けることができる。

①中世前半（13世紀後半～）：SK202，SP224・231

②中世末（16世紀後半～）：SD201，SK213・214，SP254

遺構は非常に断片的であり，個々の時期の様相を復元することはできないが，これまでの周辺で行われた調査によって確認されている遺構・遺物の時期（12～13世紀，15～16世紀）と概ね一致している点は指摘できる。また，今回の調査で確認された溝SD201（N-13°-E）は，東町奉行所（小川2005）や片原町遺跡（小川2002）などで確認されたN-10°-Eに近い方位をもつ15～16世紀代の溝と同様な地割を示す溝と考えられ，大嶋氏（大嶋2007）が指摘しているように16世紀段階には高松平野の条里地割（N-10°-E）がこの周辺まで延伸してきた状況を示していると考えられる。

【小結】

非常に断片的な資料なため，これまでの調査研究成果に新たな成果を加えるような点はないが，SD201などの成果は大嶋氏の見解を補強する資料と言えるであろう。今後，調査地周辺の道路拡幅にともなう発掘調査が予定されており，さらなる情報の収集と古代以前の様相などについての解明が待たれるところである。

第2節　近世以降について

調査地点と高松城の位置関係は，現在も残る太鼓櫓台（艮櫓）がある桜の馬場跡の南東隅から中堀・堀端を挟み，そのほぼ対面側の武家地に相当している。

生駒時代の末期にあたる絵図『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』によれば，桜の馬場は武家屋敷となっており，太鼓櫓は対面所として記載されているが，その対面側となる外曲輪の武家地には，三野四郎左衛門，その西隣には前野次太夫といった重臣の屋敷が認められる。屋敷を並べる両者であるが，生駒騒動においては対立関係にあり，三野四郎左衛門は藩主一族や在地出身の家臣からなる派閥に属し，前野次太夫は江戸藩邸や藤堂家に近い家臣の派閥に属していた。

生駒家改易後，松平初期については，文献資料『生駒家廃乱記』によれば三野四郎左衛門の屋敷は太田兵衛，前野次太夫の屋敷は石井仁右衛門の屋敷となったことが記されており，石井仁右衛門については『高松藩士由緒録』によれば，水戸徳川家の祖であり，松平頼重の父である徳川頼房より仕える重臣で，高松入部時には

二千石を拝領している。太田兵衛については不明だが，この時期に比定されている『高松城下図屏風』では石井仁右衛門屋敷に相当する以上の屋敷構えをもって表現されており，これに相応する重臣であると推定される。

このように生駒末期～松平初期において，当地は有力家臣の屋敷地となっていたと考えられるが，当調査の結果においては，こうした屋敷の有様を示すものに乏しく，当該期に相当する可能性があるものとしてSE102が挙げられるのみである。

こうした状況については，以後の整地による影響を大きく受けたことが要因の一つとして考えられる。第1遺構面に属する大半の遺構が基盤とする17世紀後半以降の整地（D層）には，瓦礫を多く含むことが観察されており，屋敷地を改変した痕跡とも考えうる。享保3年（1718）の高松大火以降となる絵図『高松城下図』（享保年間1718～1737），『讃州高松絵図』（1757）では，先の2つの屋敷を合わせたとみられる広大な敷地となり，「御用屋敷」あるいは「前ヤシキ」と記されている。「御用屋敷」・「前ヤシキ」が示すものは不詳ではあるが，従来の拝領屋敷から大きく変更されたことが想定される。

この後，第1遺構面で確認された遺構の多くが該当する19世紀代になると，当地は絵図において「江戸長屋」と記される。『高松市街古図』（文化年間1804～1818）では，堀端に面して長屋門と考えられる長大な建物が描かれており，明治15年に太鼓櫓から外曲輪に向って撮影されたと考えられる写真（ケンブリッジ大学所蔵）においても海鼠塀をもった長屋門を見ることができる。またこの写真で見える限りでは，長屋門の内側になる敷地には，数棟のやや小さな建物が認められる。これ以外で「江戸長屋」の実態を示す資料は乏しいが，かつての地権者の記憶では市街地化が進む中，この一角は昭和の初期に至るまで写真に見られるような武家地の景観を良く留め，参勤交代に用いられた道具類等が保管されていたという。

調査範囲が一部に過ぎず，この敷地内の状況を明らかにできるものではないが，確認された遺構・遺物については，上述した当地の位置関係や第1遺構面の時期からこの「江戸長屋」に係る生活痕と考えられる。この内，出土遺物に認められる小柄や土型は当地の居住者像やその生業を端的に示すものとして挙げられ，武家が土製人形といった焼物の玩具製作に携った可能性が考えられる。高松城内で窯業に関わる確認例については，西の丸地区で明治27～30年にかけて松平時代の御用焼物師である理平（理兵衛）が香川県監獄所で行ったものが知られる。当地点の調査では窯業と判断できるものに乏しいが，所属時期が幕末期に相当することから，武士階級の居住者が副業あるいは趣向の一環として土製品を製作していたことが想定される。

引用文献・主要参考文献

・市村高男 2007「中世讃岐の港町と瀬戸内海海運－近世都市高松を生み出した条件－」『海に開かれた都市　高松－港湾都市900年のあゆみ』香川県歴史博物館
・上野進 2007a「中世港町・野原の寺院～談義所・無量寿院の展開～」『「シンポジウム　港町の原像」準備会会報』四国村落遺跡研究会事務局
・上野進 2007b「港町をめぐる寺社と領主」『港町の原像－中世港町・野原と讃岐の港町－』四国村落遺跡研究会
・上野進・佐藤竜馬 2007「中世港町・野原について」『四国－その内と外－』地方史研究協議会
・大嶋和則 2007「高松城跡の発掘成果から」『港町の原像－中世港町・野原と讃岐の港町－』四国村落遺跡研究会
・小川賢・片桐節子編 2004『高松城跡（松平大膳家上屋敷跡）』新ヨンデンビル別館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　高松市教育委員会
・小野正敏 1982「15，16世紀の染付碗，皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究 No. 2』日本貿易陶磁研究会
・大橋康二 2000『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会
・佐藤竜馬 1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設四十周年記念考古学論叢』関西大学考古学研究室
・佐藤竜馬編 1995『国分寺楠井遺跡』香川県教育委員会
・佐藤竜馬編 2000a『空港跡地遺跡Ⅳ』香川県教育委員会
・佐藤竜馬 2000b「「西村型土器椀」の系譜」『香川県埋蔵文化財センター紀要』Ⅷ　香川県埋蔵文化財センター
・佐藤竜馬編 2002『高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』香川県教育委員会
・佐藤竜馬編 2003『高松城跡（丸の内地区）』Ⅱ香川県教育委員会
・佐藤竜馬 2007a「『さぬきの道者一円日記』から見た中世後半の野原」『「シンポジウム　港町の原像」準備会会報』四国村落遺跡研究会事務局
・佐藤竜馬 2007b「初期高松城下町の在地的要素」『港町の原像－中世港町・野原と讃岐の港町－』四国村落遺跡研究会
・渋谷啓一 2007a「高松の位相　讃岐・瀬戸内・西日本」『「シンポジウム港町の原像」準備会会報』四国村落遺跡研究会事務局
・渋谷啓一 2007b「古・高松湾と瀬戸内海世界」『港町の原像－中世港町・野原と讃岐の港町－』四国村落遺跡研究会
・白神典之 1992：「堺摺鉢考」『東洋陶磁　第19号』
・田中健二・藤井洋一 1996「冠纓神社所蔵永禄八年『さぬきの道者一円日記』（写本）について」『香川大学教育学部研究報告　第1部』第97号　香川大学
・中西克也編 2005『高松城跡（無量寿院跡）』高松市教育委員会
・乗岡実 2002『岡山城三之曲輪跡－表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査－』岡山市教育委員会
・乗松真也 2004「14～15世紀の土師質土器杯編年」『浜ノ町遺跡』香川県教育委員会
・松本和彦編 2003『高松城跡（丸の内地区）』香川県教育委員会
・松本和彦 2007a「中世野原の景観～前提としての地形復元～」『「シンポジウム　港町の原像」準備会会報』四国村落遺跡研究会事務局
・松本和彦 2007b「野原の景観と地域構造－発掘調査成果を中心に－」『港町の原像 - 中世港町・野原と讃岐の港町 -』四国村落遺跡研究会
・森村健一 2002「福建省漳州窯系陶磁器について」『大坂城跡発掘調査報告Ⅰ』（財）大阪府文化財センター
・山本信夫編 2000『大宰府条坊跡』ⅩⅤ－陶磁器分類編－太宰府市教育委員会
・横田賢次郎・森田勉 1978「白磁・青磁の分類」『九州歴史資料館研究論集4』

遺構観察表

各測定値は検出された最大値を示す

遺構番号	検出高(m)	長軸(m)	短軸(m)	深度(m)	方位	平面形状	断面形状	重複関係	埋土特徴	出土遺物	所属時期	備考
SB201	0.80	4.85 3間相当	1.5 1間相当	0.19～0.33	N-4° -E 前後	方形	-	SK203を切る	-	少量。弥生土器甕，土師質土器杯・竈，	中世以降	
SD201	0.68～0.9	11.80	1.3～1.4	0.3～0.5	N-13° -E 前後	直線	U字形	SD202，SK216・217，SP236・239・240・241を切る SK209・212，SP235～237に切られる	上層：褐灰色(10YR4/1)シルト質粘土 中層：灰黄色(2.5Y6/2)砂混シルト(円礫混じる) 下層：褐灰色(10YR6/1)砂質シルト	少量。弥生土器甕，土師質土器小皿・杯・椀，土師質土器鍋・足釜・鉢，須恵器椀，瓦器椀，備前焼破片	16世紀後半	
SD202	0.84	1.22	0.31	0.10	N-79° -W 前後	直線	U字形	SK210を切る SK212，SP233・238に切られる	褐灰色(10YR4/1)シルト	少量。土師質土器杯	中世以降	
SK201	0.73	0.60	(0.44)	0.22	-	隅丸方形	舟底形	-	暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土(小円礫を含む)	-	-	
SK202	0.77	0.73	(0.47)	0.45	-	(楕円形)	台形	SP201を切る	褐灰色(10YR4/1)粘質土(赤褐色ブロック含む)	少量。弥生土器甕，須恵器椀	中世前半	
SK203	0.80	(0.75)	(0.55)	0.27	-	(隅丸方形)	舟底形	SP218を切る SP205に切られる	10YR4/2灰黄褐色粘質土(10YR6/1褐灰色の砂質ブロック少量含む。赤褐色ブロック含む)	少量。弥生土器甕，須恵器杯	古代以降	
SK204	0.80	0.55	(0.55)	0.29	-	(隅丸方形)	(舟底形)	-	灰黄褐色(10YR5/2)砂質土(小礫を少量含む)	少量。土師質土器杯・竈，瓦質土器鉢，青磁碗	16世紀後半	SB201構成
SK205	0.85	1.03	(0.70)	0.47	-	(隅丸方形)	段付	SK206を切る	暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粘土(炭・赤褐色粒・黄褐色粘土ブロックを含む)	少量。土師質土器杯	-	
SK206	0.85	0.70	(0.52)	0.21	-	(楕円形)	舟底形	SK205に切られる	褐灰色(10YR6/1)砂礫混シルト	-	-	
SK207	0.91	0.70	(0.52)	0.38	-	変則楕円形	段付	SK208に切られる	褐灰色(10YR6/1)シルト	少量。黒色土器椀	古代以降？	
SK208	0.93	(0.84)	0.53	0.1～0.29	-	隅丸方形	段付	SK207，SP242・243を切る SP228・229に切られる	褐灰色(10YR6/1)シルト	少量。弥生土器高杯，土師質土器杯，須恵器杯・壺	中世以降	
SK209	0.85	(0.80)	(0.80)	0.31	-	円形	舟底形	SP234,235に切られる	褐灰色(10YR6/1)シルト	少量。土師質土器杯	中世以降	
SK210	0.84	(0.65)	0.50	0.42	-	隅丸方形	舟底形	SD202に切られる	褐灰色(10YR5/1)シルト(炭・褐色粒を含む)	少量。弥生土器甕，土錘	弥生後期後半	
SK211	0.95	0.62	0.60	0.43	-	隅丸方形	舟底形	-	灰白色(5Y7/2)極細砂(灰色シルト・褐鉄鉱混じる)	-	-	
SK212	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
SK213	0.67	1.40	1.25	0.39	-	円形	舟底形	SP248・249を切る SP227・251・252に切られる	上層：灰黄色(2.5Y7/2)礫混シルト 中層：灰黄色(2.5Y6/2)砂混シルト(炭・赤褐色粒を若干含む) 下層：褐灰色(10YR4/1)砂混シルト質粘土(炭を含む)	少量。土師質土器杯，染め付け椀，平瓦，鉄器，動物骨	16世紀後半	第2面下層
SK214	0.68	(0.85)	(0.45)	0.43	-	変則楕円形	舟底形	SP230に切られる	褐灰色(10YR6/1)砂礫混シルト(小円礫を多く含む)	少量。土師質土器杯・足釜，須恵器甕	16世紀後半	
SK215	1.00	(0.95)	(0.45)	0.55	-	隅丸方形	段付	-	褐灰色(10YR5/1)砂混シルト	-	-	
SK216	0.70	(0.75)	0.75	0.33	-	(方形)？	段付	SD201に切られる	褐灰色(10YR6/1)砂混シルト(円礫を含む)	-	-	
SK217	0.71	(0.85)	(0.49)	0.21	-	(円形)	舟底形	SD201に切られる	褐灰色(10YR4/1)シルト質粘土	-	-	
SP201	0.79	(0.47)	(0.25)	0.08	-	(円形)？	(U字形)	SK202に切られる	灰白色(5Y7/1)砂質土(褐灰色(10YR5/1)粘質土混じる)	-	-	
SP202	0.75	0.37	0.33	0.01	-	円形	U字形	-	褐灰色(10YR5/1)砂混シルト	-	-	
SP203	0.72	0.53	0.47	0.31	-	円形	U字形	-	褐灰色(10YR5/1)砂混シルト	少量。弥生土器甕，土師質土器竈	古代以降	
SP204	0.76	0.15	0.15	0.30	-	円形	U字形	-	灰色(5Y6/1)シルト質極細砂(粘性あり)	-	-	
SP205	0.80	0.35	(0.30)	0.19	-	(楕円形)	U字形	SK203を切る	褐灰色(10YR4/1)シルト質土	-	-	SB201構成
SP206	0.76	0.50	0.37	0.29	-	隅丸方形	舟底形	SP207を切る	褐灰色(10YR5/1)砂混シルト	少量。平瓦，弥生土器甕	中世以降	SB201構成
SP207	0.73	0.31	(0.27)	0.25	-	(円形)	U字形	SP206に切られる	灰白色(2.5Y7/1)シルト質極細砂(浅黄色(5Y7/3)粘土ブロックを含む)	-	-	
SP208	0.77	0.23	0.21	0.26	-	円形	段付	SP209を切る	灰色(5Y6/1)シルト質極細砂(粘性あり)	-	-	
SP209	0.76	0.35	0.30	0.21	-	(円形)	U字形	SP208に切られる	灰白色(5Y7/1)砂質土(褐灰色(10YR5/1)粘質土混じる)	-	-	
SP210	0.80	0.17	0.14	0.24	-	円形	U字形	-	褐灰色(10YR4/1)シルト	-	-	
SP211	0.80	0.31	0.30	0.27	-	円形	U字形	SP212を切る	褐灰色(10YR5/1)砂混じりシルト	-	-	
SP212	0.80	(0.20)	0.19	0.23	-	(円形)	U字形	SP211に切られる	褐灰色(10YR6/1)砂質シルト	-	-	
SP213	0.80	(0.40)	0.40	0.13	-	(隅丸方形)	U字形	攪乱に切られる	褐灰色(10YR6/1)砂混シルト(小礫含む)	-	-	
SP214	0.80	0.20	0.20	0.11	-	(円形)	U字形	-	褐灰色(10YR4/1)シルト質粘土(炭を若干含む)	-	-	第2面下層
SP215	0.81	0.45	0.25	0.39	-	楕円形	台形	SP254に切られる	褐灰色(10YR5/1)砂混シルト	-	-	
SP216	0.74	(0.24)	0.23	0.11	-	(円形)	U字形	攪乱に切られる	褐灰色(10YR5/1)シルト(炭を若干含む)	-	-	
SP217	0.69	0.66	0.50	0.24	-	楕円形	段付	-	褐灰色(10YR5/1)砂混シルト(小礫混じる)	少量。土師質土器杯	中世以降	
SP218	0.79	0.32	(0.30)	0.29	-	(円形)	U字形	SK203に切られる	褐灰色(10YR5/1)砂混シルト(小礫混じる)	-	-	
SP219	0.87	0.26	0.20	0.40	-	円形	U字形	-	褐灰色(10YR4/1)粘質土	-	-	
SP220	0.70	0.46	0.35	0.23	-	楕円形	U字形	-	褐灰色(10YR4/1)粘質土(小円礫を多量に含む)	-	-	SB201構成

遺構番号	検出高(m)	長軸(m)	短軸(m)	深度(m)	方位	平面形状	断面形状	重複関係	埋土特徴	出土遺物	所属時期	備考
SP221	0.64	0.38	0.21	0.27	-	(円形)	U字形	-	オリーブ黒色(5Y3/1)砂混粘質土(小円礫を少量含む)	-	-	SB201構成
SP222	0.76	0.36	0.35	0.33	-	円形	U字形	-	暗灰黄色(2.5Y4/2)砂混粘質土(赤褐色土少量含む)	少量。土師質土器杯, 弥生土器甕	中世以降	SB201構成
SP223	0.87	0.50	0.40	0.23	-	隅丸方形	段付	-	暗灰黄色(2.5Y4/2)砂混粘質土(黄灰色砂・赤褐色土多量に含む)	-	-	
SP224	0.84	0.30	0.25	0.39	-	楕円形	U字形	-	褐灰色(10YR4/1)粘質土(黄灰色砂ブロック混じる)	少量。須恵器椀	13世紀後半	
SP225	0.79	0.37	0.32	0.38	-	楕円形	U字形	-	オリーブ黒色(5Y3/1)砂混粘質土(黄灰色砂ブロック混じる)	-	-	
SP226	0.84	0.66	0.50	0.41	-	楕円形	段付	-	褐灰色(10YR5/1)砂混シルト(小円礫混じる)	-	-	
SP227	0.82	0.35	0.30	0.47	-	円形	U字形	SK213を切る	灰褐色(7.5YR6/2)シルト(炭を若干含む)	少量。土師質土器杯, 須恵器甕	中世以降？	
SP228	0.94	0.56	0.40	0.29	-	隅丸三角形	舟底形	SK208を切る	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト(小円礫混じる・炭赤褐色粒を含む)	-	-	
SP229	0.92	0.54	0.42	0.23	-	隅丸方形	舟底形	SK208を切る	黄灰色(2.5Y5/1)砂混りシルト(小礫混じる・炭・赤褐色粒を含む)	少量。土師質土器甕, 須恵器椀	中世以降？	
SP230	0.95	0.53	0.40	0.18	-	隅丸方形	舟底形	SK214, SP244を切る	褐灰色(10YR6/1)シルト(炭・小礫を若干含む)	少量。土師質土器杯	中世以降	
SP231	0.94	0.50	0.50	0.61	-	円形	U字形	-	褐灰色(10YR5/1)シルト質粘土(円礫混じる)	少量。土師質土器杯・椀・足釜, 須恵器椀	13世紀後半	
SP232	0.77	0.25	0.25	0.28	-	円形	U字形	-	褐灰色(10YR5/1)シルト質粘土(円礫混じる)	少量。弥生土器甕	弥生後期後半	
SP233	0.91	0.35	(0.35)	0.19	-	(円形)	U字形	SD202を切る SK212に切られる	褐灰色(10YR5/1)シルト	-	-	
SP234	0.84	0.58	0.41	0.34	-	楕円形	舟底形	SK209を切る	褐灰色(10YR5/1)シルト質粘土(褐鉄鉱を多く含む・炭を若干含む)	-	-	
SP235	0.85	0.30	0.30	0.13	-	円形	U字形	SK209を切る	褐灰色(10YR5/1)砂礫混シルト	-	-	
SP236	0.85	0.37	0.29	0.28	-	(楕円形)	U字形	SD201を切る SP237に切られる	褐灰色(10YR5/1)砂礫混シルト(小円礫混じる)	-	-	
SP237	0.89	0.31	0.27	0.36	-	円形	U字形	SD201, SP236を切る	黄灰色(2.5Y4/1)粘土(炭・褐色粒を含む)	-	-	
SP238	0.87	0.22	0.17	0.21	-	楕円形	U字形	SD202を切る	褐灰色(10YR6/1)砂混シルト	-	-	
SP239	0.68	0.38	0.35	0.36	-	円形	U字形	SD201に切られる	褐灰色(10YR6/1)砂混シルト(拳大の円礫含む) 柱痕(褐灰色(10YR4/1)シルト(浅黄色ブロックを含む)	-	-	
SP240	0.52	0.40	0.38	0.33	-	円形	U字形	SD201に切られる	褐灰色(10YR5/1)砂混シルト(小円礫を含む)	-	-	
SP241	0.64	0.45	0.45	0.18	-	(円形)	U字形	SD201に切られる	褐灰色(10YR5/1)砂混シルト(小円礫を含む)	-	-	
SP242	0.62	0.22	0.22	0.30	-	円形	U字形	SK208に切られる	褐灰色(10YR5/1)砂混シルト	-	-	第2面下層
SP243	0.65	0.35	0.28	0.34	-	円形	U字形	SK208に切られる	褐灰色(10YR6/1)シルト	-	-	第2面下層
SP244	0.70	0.35	0.32	0.34	-	円形	U字形	SP230に切られる	褐灰色(10YR5/1)砂混シルト(小円礫混じる)	-	-	第2面下層
SP245	0.66	0.20	0.20	0.13	-	円形	U字形	-	褐灰色(10YR5/1)砂混シルト(小円礫混じる)	-	-	第2面下層
SP246	0.61	0.47	0.37	0.17	-	楕円形	舟底形	-	褐灰色(10YR5/1)砂混シルト(小円礫混じる・炭を若干含む)	-	-	第2面下層
SP247	0.60	0.30	0.27	0.29	-	円形	U字形	-	褐灰色(10YR5/1)砂混シルト(小円礫混じる)	少量。弥生土器甕, 須恵器甕	中世以降	SB201構成
SP248	0.78	0.30	0.25	0.20	-	(楕円形)	(舟底形)	SK213・SP250に切られる	褐灰色(10YR5/1)砂混シルト質粘土(炭を含む)	-	-	
SP249	0.39	(0.41)	0.40	0.15	-	(楕円形)	(舟底形)	SK213に切られる	褐灰色(10YR4/1)砂混シルト質粘土(小円礫多量に含む)	-	-	第2面下層
SP250	0.86	0.57	0.47	0.19	-	(楕円形)	U字形	SP248を切る SK206に切られる	褐灰色(10YR5/1)砂混シルト	-	-	
SP251	0.89	0.22	0.20	0.37	-	円形	U字形	SK213を切る	褐灰色(10YR5/1)砂混シルト	-	-	
SP252	0.85	0.43	0.30	0.46	-	隅丸方形	舟底形	SK213を切る	褐灰色(10YR5/1)砂混シルト	-	-	
SP253	0.90	(0.55)	0.47	0.18	-	楕円形	舟底形	SD202, SP233を切る	灰色(10YR7/1)シルト細砂(小円礫を含む)	少量。土師質土器杯, 須恵器壺	中世以降	
SP254	1.00	0.40	0.40	0.57	-	円形	台形	SK215を切る	褐灰色(10YR5/1)砂混シルト	少量。土師質土器鍋・足釜・蛸壺, 須恵器	16世紀後半	
SA101	1.15～1.23	延長約10m, 5間相当	-	0.14～0.42	N-3° -E	-	-	SK124を切る SK105,SX101,102に切られる	-	-	18C～19C中葉	礎石構造？
SA101 P-1	1.15	0.63	0.56	0.31	-	円形	台形	-	上層:2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(円礫を含む,締まる) 中層:2.5Y5/1黄灰色砂混じりシルト(締まる) 下層:2.5Y6/1黄灰色極細砂	少量。肥前系磁器鉢,肥前系陶器皿,土師質土器細片		SA101構成
SA101 P-2	1.16	0.84	0.72	0.31	-	円形	台形	SK124を切る	上層:2.5Y4/1黄灰色シルト(炭,焼土を多く含む,抜取痕) 中層:2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(円礫を含む,締まる) 下層:2.5Y6/1黄灰色極細砂(小円礫を含む,締まる)	-		SA101構成
SA101 P-3	1.17	0.74	(0.40)	0.14	-	(隅丸方形)	U字形	SX101に切られる	上層:2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土,瓦片,円礫を含む,抜取痕) 中層:2.5Y4/1黄灰色シルト(炭,焼土,オリーブ粘土塊を含む,抜取痕?) 下層:2.5Y6/1黄灰色極細砂(締まる)	-		SA101構成
SA101 P-4	1.20	0.79	(0.54)	0.42	-	(隅丸方形)	台形	SX101に切られる	上層:2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土,明黄褐色土塊,瓦片を含む,抜取痕) 中層:2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(円礫を含む) 下層:2.5Y6/1黄灰色極細砂(板石,円礫を含む,締まる)	-		SA101構成
SA101 P-5	1.23	(0.62)	(0.53)	0.21	-	(円形)	U字形	SK105に切られる	上層:2.5Y6/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土粒を若干含む,瓦片を含む,抜取痕) 下層:2.5Y6/1黄灰色極細砂(小円礫を含む)	-		SA101構成

遺構番号	検出高(m)	長軸(m)	短軸(m)	深度(m)	方位	平面形状	断面形状	重複関係	埋土特徴	出土遺物	所属時期	備考
SA101 P-6	1.17	(0.43)	(0.39)	0.18	-	(円形)	U字形	SX102に切られる	上層:2.5Y5/1黄灰色シルト(炭,焼土粒を若干含む,オリーブ黄色土塊,瓦片,円礫を含む)	-		SA101構成
SD101	1.08	(1.17)	0.44	0.23	N-3° -W前後	直線	U字形	-	2.5Y4/1黄灰色砂混じりシルト(瓦,礫を多量に含む,炭を若干含む)	-		
SE101	0.99	(3.25)	(1.27)	0.79	-	(円形)	段付	SX102を切る	第18図参照	掘り方:コンテナ1/2箱。肥前系磁器碗,皿,鉢,蓋,紅猪口,肥前系陶器碗,皿,刷毛目鉢,瀬戸・美濃系陶器擂鉢,京・信楽系陶器甕,備前系陶器擂鉢,人形徳利,瓦質土器羽釜,土師質土器甕類,瓦細片	19C中葉～	土師質の井側が2段残る
SE102	0.98	2.18	(1.64)	0.98	-	(円形)	段付	SX101に切られる	上層:.5Y3/1オリーブ黒色砂混じりシルト質粘土 中層:2.5Y5/1黄灰色シルト(オリーブ黄色土塊を含む,第1面上層基盤と類似) 下層:2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土(人頭大の川原石を含む) 最下層:2.5Y4/1黄灰色砂混じりシルト(小円礫を含む,石組の裏込め)	掘り方:少量。備前系陶器擂鉢,土師器・須恵器細片 検出時,上層:コンテナ1/4箱。青花皿,肥前系磁器碗,皿,鉢,蓋,瓶,瀬戸・美濃系磁器端反碗,瀬戸・美濃系陶器碗,鉢,水甕,京・信楽系陶器端反碗,灯明皿,甕,施釉陶器瓶,壺,鍋類,軟質施釉陶器細片,備前系陶器擂鉢,人形徳利,瓦質土器羽釜,土師質土器甕,捏鉢,土師器甕,軒平瓦,桟瓦片	17C後半～19C中葉	石組井戸？
SK101	1.24	0.61	0.56	0.22	-	円形	(台形)	-	2.5Y4/1黄灰色シルト(埋甕裏土)	埋甕内出土:コンテナ1/3箱。肥前系磁器碗,皿,鉢,瓶,瀬戸・美濃系磁器碗,瀬戸・美濃系陶器水甕,鉢類,施釉陶器甕,行平鍋,鉢類,軟質施釉陶器蓋,鍋類,瓦質土器羽釜細片,土師質土器大甕片,丸・平瓦細片,板ガラス片	19C後半	埋甕
SK102	1.24	1.20	(1.10)	0.18	-	(隅丸方形)	舟底形	SK103を切る	上層:5Y5/1灰色砂混じりシルト～シルト質粘土(炭,焼土粒を含む,円礫を多量に含む) 下層:2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土粒を若干含む,オリーブ黄色土を含む)	少量。瓦	19C中葉～	
SK103	1.24	(1.22)	0.93	0.18	N-3° -E前後	-	舟底形	SK102に切られる SX102を切る	2.5Y5/1黄灰色シルト(やや砂質,炭を若干含む,オリーブ黄色土を含む)	-	19C中葉～	
SK104	1.22	2.06	1.20	0.52	N-3° -W前後	長方形	舟底形	SE101を切る SK120に切られる	上層:2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土粒,オリーブ黄色土塊を含む,瓦,円礫を多く含む) 中層:2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土粒,オリーブ黄色土塊を含む) 下層:2.5Y5/2暗灰黄色シルト～シルト質極細砂(炭,焼土粒を含む,瓦,円礫を多く含む)	少量。肥前系磁器瓶,備前系陶器,土師質土器細片,丸瓦片	19C中葉	
SK105	1.23	1.04	0.80	0.46	-	不整形	段付	SA101 P-5を切る	上層:2.5Y6/2灰黄色シルト質極細砂(炭,焼土粒を若干含む,円礫,瓦片を含む) 下層:2.5Y5/1黄灰色シルト(炭,褐鉄鉱を含む.円礫を含む)	少量。肥前系陶器,土師質土器,瓦細片	19C中葉	
SK106	1.24	0.77	0.76	0.18	-	円形	段付	-	上層:2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土,瓦片,オリーブ黄色土塊を含む) 下層:2.5Y4/1黄灰色シルト(炭,焼土粒を若干含む)	少量。土師質土器細片	19C中葉	
SK107	1.28	(0.82)	(0.51)	0.30	-	-	(台形)	SP104に切られる	上層:2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土粒,オリーブ黄色土塊を含む,小円礫を含む) 中層:2.5Y5/2灰黄色シルト(炭,焼土粒,オリーブ黄色土塊を含む) 下層:2.5Y5/1黄灰色砂混じりシルト(炭を若干含む,瓦,礫を含む)	-		
SK108	1.21	(1.96)	(0.56)	0.20	N-3° -W前後	(長方形)	(台形)	SP108より先行	2.5Y5/3黄褐色シルト(炭,焼土粒,小円礫を若干含む)	少量。肥前系磁器瓶,京・信楽系陶器端反碗,軟質施釉陶器,土師質土器,瓦細片	19C中葉	
SK109	1.21	0.74	-	0.51	-	(楕円形)	台形	SK110より後出	5Y4/1灰色砂混じりシルト(花崗土を含む)	-	19C後半～	近・現代の撹乱
SK110	1.21	1.22	(0.92)	0.24	-	(隅丸方形)	(台形)	SK108を切る	上層:2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土を若干含む) 下層:2.5Y5/1黄灰色シルトシルト質細砂	コンテナ1/4箱。肥前系磁器碗,皿,備前系陶器蓋,土師質土器鉢類,土管,平瓦細片,レンガ	19C後半	
SK111	1.14	(1.12)	(0.42)	0.36	-	(円形)	段付	SK112,113に切られる	2.5Y4/1黄灰色シルト(炭,焼土粒,褐鉄鉱を含む)	少量。京・信楽系陶器端反碗,軟質施釉陶器,瓦細片	19C中葉	
SK112	1.12	(1.68)	(1.64)	0.94	-	(円形)	段付	SK111を切る SK113に切られる	上層:2.5Y4/1黄灰色シルト(炭,焼土粒を若干含む,土壁,小円礫を含む) 中層:5Y7/3浅黄色極細砂 下層:2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭を含む,土壁を多く含む) 最下層:5Y5/1灰色砂質シルト(小円礫を含む,湧水層)	コンテナ5箱。肥前系磁器碗,皿,瓶,肥前系陶器刷毛目鉢,瀬戸・美濃系陶器碗,鉢,水甕,京・信楽系陶器端反碗,小杉碗,急須,蓋,瓶,香炉類,施釉陶器碗,軟質施釉陶器上瓶類,土師質土器焙烙,焜炉類,大甕(井側),丸・平瓦	19C中葉	井戸状遺構
SK113	1.12	1.16	1.08	0.61	-	円形	台形	SK112,114を切る	上層:N5/0灰色シルト(炭,焼土粒,オリーブ黄色土塊,瓦片,円礫を含む) 中層:2.5Y6/1黄灰色シルト(炭,焼土粒を含む) 下層:2.5Y6/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土粒を若干含む) 最下層:2.5Y6/4鈍い黄色砂礫混じりシルト(小円礫を含む)	コンテナ1/4箱。肥前系磁器碗,蓋,瓶,青磁細片,肥前系陶器碗,刷毛目鉢,瀬戸・美濃系陶器碗,植木鉢,京・信楽系陶器端反碗,色絵細片,施釉陶器碗,香炉類,軟質施釉陶器急須,蓋,備前系陶器擂鉢,土師質土器甕類,丸瓦片	19C中葉～	
SK114	1.10	(1.28)	1.11	0.44	-	(円形)	台形	SK115を切る SK113に切られる	上層:2.5Y5/1黄灰色シルト(炭,焼土粒を若干含む,瓦礫を多く含む) 中層:2.5Y6/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土粒を若干含む) 下層:2.5Y6/1黄灰色極細砂(炭を若干含む) 最下層:2.5Y6/3鈍い黄色砂混じりシルト	少量。肥前系磁器碗,鉢,軒平瓦細片	～19C中葉	
SK115	1.12	1.54	(1.24)	0.32	-	(方形)	(舟底形)	SK114に切られる	上層:2.5Y5/1黄灰色シルト(炭,焼土,オリーブ黄色土塊,瓦礫を含む) 下層:2.5Y6/1黄灰色シルト質極細砂(炭を含む)	少量。肥前系磁器碗,瓶,肥前系陶器刷毛目鉢	18C～19C中葉	
SK116	1.14	1.20	0.94	0.41	-	楕円形	台形	SK123を切る	上層:2.5Y5/1黄灰色シルト(炭,焼土,オリーブ黄色土塊,瓦,礫を含む) 下層:2.5Y6/1黄灰色シルト(やや砂質,炭を若干含む,礫を含む)	少量。肥前系磁器碗,肥前系陶器皿,京・信楽系陶器色絵碗	18C～19C中葉	

遺構番号	検出高(m)	長軸(m)	短軸(m)	深度(m)	方位	平面形状	断面形状	重複関係	埋土特徴	出土遺物	所属時期	備考
SK117	1.15	(1.15)	(0.61)	0.18	−	(円形)	(台形)	SP112を切る SK123に切られる	上層:2.5Y5/1黄灰色シルト(炭,焼土,瓦,礫を含む) 下層:2.5Y6/1黄灰色シルト質極細砂(炭を若干含む,オリーブ黄色土を含む)			
SK118	1.01	0.88	0.56	0.37	−	楕円形	U字形	SK112を切る	上層:2.5Y4/1黄灰色シルト(炭を若干含む) 下層:2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土粒を若干含む)	少量。肥前系磁器碗,瀬戸・美濃系陶器腰錆碗,京・信楽系陶器色絵碗	19C中葉	
SK119	1.01	0.72	0.66	0.26	−	円形	段付	SK112を切る	上層:2.5Y5/1黄灰色シルト(炭,焼土粒,瓦,礫を含む) 中層:2.5Y5/1黄灰色シルト(しまる) 下層:2.5Y6/2灰黄色砂混じりシルト質極細砂	少量。土師質土器皿, 火鉢類細片	19C中葉〜	
SK120	1.22	0.93	(0.71)	0.37	−	楕円形	(箱形)	SK104を切る SX102に切られる	上層:2.5Y6/2灰黄色シルト質極細砂(やや締まる,炭,焼土粒を若干含む)	−	−	
SK121	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	欠番
SK122	1.07	0.62	(0.47)	0.52	−	(円形)	(台形)	−	上層:2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土粒,瓦片を含む) 下層:2.5Y6/1黄灰色シルト質極細砂(炭を若干含む)	少量。土師質土器足釜,丸・平瓦細片	19C中葉か	
SK123	1.09	(0.68)	(0.18)	0.32	−	−	−	SK117を切る	2.5Y5/1黄灰色シルト質極細砂(炭,焼土粒,瓦片を含む)	−		
SK124	1.15	(0.82)	(0.52)	0.46	−	楕円形	−	SA101 P-2,SP106に切られる	2.5Y4/1黄灰色シルト(炭,焼土粒を若干含む)	−		
SK125	1.01	1.85	(0.56)	0.46	−	−	段付	SX101に切られる	2.5Y4/1黄灰色シルト(瓦,礫を多量に含む,鉄分沈着)	コンテナ1/4箱。肥前系磁器碗,青磁染付蓋,瓶,肥前系陶器細片,瀬戸・美濃系磁器碗,瀬戸・美濃系陶器碗,ヒダ皿,水甕,植木鉢,京・信楽系陶器端反碗,灯火具,施釉陶器甕,瓶類,軟質施釉陶器鍋類,備前系陶器灯明皿,瓦質土器羽釜,土師質土器甕類,黒色土器椀	19C中葉	
SK126	1.23	0.77	0.75	0.67	−	(円形)	段付	SK106に切られる	上層:5Y7/4浅黄色シルト質粘土(瓦片を含む) 中層:2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土(炭,焼土粒,浅黄色土塊を含む) 下層:5Y5/1灰色粗砂(締まる,円礫を含む)	少量。肥前系磁器端反碗,肥前系陶器皿,鉢,京・信楽系陶器瓶,備前系陶器擂鉢	19C中葉	
SP101	1.09	(0.49)	(0.30)	0.15	−	(円形)	−	SE101掘り方より後出	−	少量。肥前系磁器鉢,丸瓦細片		
SP102	1.28	(0.43)	(0.41)	0.30	−	(円形)	(台形)	SP109に切られる	2.5Y6/1黄灰色シルト質極細砂(炭を若干含む,オリーブ黄色土塊を含む)	少量。肥前系磁器碗,鉢,瀬戸・美濃系磁器碗,土師質土器甕類細片		
SP103	1.28	(0.40)	(0.39)	0.34	−	(円形)	(台形)	SP109に切られる	2.5Y5/1黄灰色シルト(炭,焼土粒を若干含む,小円礫を含む)	少量。土師質土器細片		
SP104	1.27	0.28	0.27	0.33	−	円形	U字形	SK107を切る	2.5Y4/1黄灰色シルト	少量。肥前系磁器細片,備前系陶器細片,土師質土器細片		
SP105	1.16	0.51	0.38	0.52	−	円形	U字形	−	上層:2.5Y5/1黄灰色シルト(炭,焼土粒,土壁を含む) 下層:2.5Y6/1黄灰色シルト質極細砂	少量。弥生土器甕,土師器甕・竈細片		
SP106	1.14	0.54	0.44	0.25	−	円形	U字形	SK124,SP107を切る	上層:2.5Y5/1黄灰色シルト(炭,焼土粒,円礫を含む) 下層:2.5Y6/1黄灰色シルト質極細砂	−		
SP107	1.16	0.41	(0.40)	0.21	−	(円形)	(U字形)	SP106に切られる	2.5Y6/2灰黄色細砂(炭,焼土粒を若干含む)	−		
SP108	1.27	0.17	0.15	0.27	−	円形	U字形	SK108より後出	5Y5/1灰色シルト	−		
SP109	1.26	0.28	(0.26)	0.29	−	(円形)	(U字形)	SP102,103を切る	2.5Y4/1黄灰色砂混じりシルト質極細砂(炭,焼土粒を含む,小円礫,土壁を含む)	少量。瀬戸・美濃系磁器碗,土師質土器細片		
SP110	1.15	0.36	0.36	0.10	−	円形	舟底形	SP111を切る	2.5Y5/1黄灰色シルト(炭,焼土粒を若干含む)	−		
SP111	1.16	0.50	(0.49)	0.22	−	(円形)	(U字形)	SP113を切る SK110に切られる	2.5Y5/1黄灰色砂混じりシルト(炭,焼土粒を若干含む,オリーブ黄色土塊を含む)	−		
SP112	1.16	0.36	(0.29)	0.33	−	(円形)	−	Sk117に切られる	2.5Y5/1黄灰色シルト粘土(炭,土壁,漆喰を含む)	−		
SP113	1.15	0.25	(0.15)	0.15	−	(円形)	−	SP111に切られる	2.5Y4/1黄灰色砂混じりシルト(土壁を含む)	−		
SX101	1.14	(3.08)	2.46	0.91	−	(長方形)	台形	SA101,SE102,SK125を切る SK112に切られる	第32図参照	コンテナ1/2箱。青花細片,肥前系磁器碗,皿,瓶,肥前系陶器鉢,瀬戸・美濃系陶器誐水入れ,京・信楽系陶器碗,施釉陶器鉢,備前系陶器擂鉢,灯明皿,土師質土器椀,,丸・平瓦細片	19C中葉	
SX102	1.22	(1.80)	(1.52)	0.28	−	−	(舟底形)	SA101,SK120を切る SE101に切られる	2.5Y5/1黄灰色シルト〜シルト質極細砂(炭,焼土,黄色土塊,瓦,礫を含む)	コンテナ1/4箱。肥前系磁器碗,皿,備前系陶器擂鉢,軟質施釉陶器鍋類,丸・平瓦片,粘土塊	19C中葉	
SX103	1.25	5.54	(2.08)	0.56	N-3° -E前後	(長方形)	(台形)	SA101,SK126,SX101,102他より先行	第33図参照	コンテナ1箱。肥前系磁器碗,肥前系陶器細片,備前系陶器瓶,甕類,土師質土器細片,丸・平瓦片,粘土塊,牛馬の歯	17C後半〜	第1面下層遺構

出土遺物観察表

( ) 内の数値は残存値を示す

報文番号	出土遺構	種別	器種名	産地	法量(cm)			胎土	色調1 (胎土)	色調2 (釉薬,内外色調)	色調3 (呉須,上絵)	調整	備考
					口径	器高	底径						
1	SP222	弥生土器	甕		13.8	(1.4)		やや密 1㎜以下の長石・石英・角閃石・雲母を含む	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)		内面:ナデ 外面:ナデ	下川津B類系統
2	SK204	土師質土器	杯		10.8	(1.7)		密 1㎜以下の石英・長石を含む茶色の砂粘をわずかに含む	灰白色(10YR8/2)	灰白色(10YR8/2)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ	
3	SK204	瓦質土器	鉢			(4.4)		密 1㎜以下の砂粒を含む	灰色(N4/)	灰色(N6/)		内面:ナデ 外面:ナデ	
4	SK204	青磁	碗	龍泉窯		(1.7)		密 1㎜以下の石英・長石を含む	ｵﾘｰﾌﾞ灰色(10Y5/2)	灰白(N7/)		内面:ナデ 外面:ナデ	
5	SP206	瓦	平瓦	—	長さ(16.4),幅(11.3),厚さ1.8			やや粗 2㎜以下の石英, 長石, 黒色粒を含む	灰白色(5Y7/1)	灰白色(5Y7/1)		凹面:ナテ, 一部摩滅 凸面:ナテ, 一部摩滅	
6	SD201	弥生土器	甕		16	(2.1)		粗 1㎜以下の長石・石英・雲母・角閃石を含む	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ	下川津B類系統
7	SD201	弥生土器	甕		15	(3.5)		やや粗 1～2㎜以下の石英・長石, 角閃石・雲母を含む	にぶい橙色 (5YR6/4)	にぶい橙色 (5YR6/4)		内面:ナデ, 指頭圧痕 外面:ナデ, 縦ハケ	下川津B類系統
8	SD201	弥生土器	底部			(2.8)	3.4	やや粗 1～3㎜以下の石英・長石・角閃石を含む	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	にぶい橙色 (5YR6/4)		内面:縦ハケ, 横ハケ 外面:摩滅(押さえ, ケズリ)	
9	SD201	土師質土器	小皿		6.2	(1.1)		密	浅黄橙色(10YR8/3)	浅黄橙色 (10YR8/3)		内面:ナデ 外面:ヨコナデ	
10	SD201	土師質土器	杯		7.9	(1.5)		やや密 1㎜以下の石英・長石を含む	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)		内面:ナデ 外面:ナデ	
11	SD206	土師質土器	杯		8	(2.6)		密 1㎜以下の石英・長石を含む	にぶい橙色(7.5YR 7/3)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)		内面:ナデ 外面:ナデ	
12	SD201	土師質土器	杯		8	1.5	5	密 1㎜以下の石英・長石を含む	灰白色(10YR8/1)	灰白色(10YR8/2)		内面:ナデ 外面:ナデ	
13	SD201	土師質土器	杯		10	1.4	7	やや密 1㎜以下の石英・長石・角閃石を含む	灰白色(10YR8/2)	灰白色(10YR8/2)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ, 篦切り?	
14	SD201	土師質土器	杯		10	(1.8)		密 1㎜以下の石英・長石を含む	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ	
15	SD201	土師質土器	小皿		10	(1.4)		やや密 1㎜以下の石英・長石を含む	灰白色(10YR8/2)	灰白色(2.5Y8/2)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ	
16	SD201	土師質土器	杯		10	(2.0)		やや密 1㎜以下の石英・長石を含む	灰白色(10YR8/2)	灰白色(10YR8/2)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ	
17	SD201	土師質土器	杯		9	1.9	4.6	密 1㎜以下の石英・長石を含む	灰白色(2.5Y8/2)	灰白色(2.5Y8/2)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ, 篦切り, 板状圧痕	
18	SD201	土師質土器	杯		10	2.3	5.5	やや粗 1～2㎜以下の石英・長石・茶色の1㎜の砂粒を含む	灰白色(10YR8/2)	灰白色(10YR8/2)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ, 篦切り	
19	SD201	土師質土器	杯		10.7	2.1		やや粗 2㎜以下の石英・長石を含む	浅黄橙色(10YR8/3)	浅黄橙色 (10YR8/3)		内面:ナデ 外面:ナデ	
20	SD201	土師質土器	杯		11.8	(2.6)		密 1㎜以下の石英・長石を含む	灰白色(10YR8/2)	灰白色(10YR8/2)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ	
21	SD201	土師質土器	杯		15.2	(3.0)		密 1㎜以下の石英・長石を含む	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ	
22	SD201	土師質土器	杯			(1.2)	5	やや密 1㎜以下の石英・長石・赤褐色の砂粒を含む	灰白色(10YR8/2)	灰白色(10YR8/2)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ, 篦切り	
23	SD201	土師質土器	杯			(1.1)	5.4	密 1㎜以下の長石をわずかに含む	10YR8/1灰白	10YR8/1灰白		内面:ナデ 外面:ヨコナデ	
24	SD201	土師質土	杯×椀			(1.7)	6.6	やや密 1㎜以下の石英・長石を含む	10YR8/3浅黄橙	灰白色(10YR8/2)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ	
25	SD201	須恵器	椀			(1.0)		密	灰白色(N8/)	灰白色(N8/)		内面:ハケ目 外面:ナデ	
26	SD201	瓦器	椀	和泉産		(0.6)	6.8	密 1㎜以下の石英・長石を含む	灰色(N4/)	灰色(N4/)		内面:ナデ 外面:篦ミガキ(暗文風), ナデ	
27	SD201	土師質土器	足釜		20	(4.7)		やや密 1㎜以下の石英・長石を含む	にぶい橙色 (5YR6/4)	にぶい橙色 (5YR6/4)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ, ケズリ	
28	SD201	土師質土器	鍋			(1.2)		やや粗 3㎜以下の長石・石英を含む	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	にぶい褐色 (7.5YR6/3)		内面:ハケ 外面:ナデ, ハケ	
29	SD201	土師質土器	鍋			2.5		やや粗 2㎜以下の石英・長石・赤褐色の砂粒を含む	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ	
30	SD201	土師質土器	鍋			6.6		やや粗 1㎜以下の石英・長石を含む	橙色(2.5YR6/6)	黄橙色 (7.5YR7/8)		内面:ナデ 外面:磨耗, ナデ, 指頭圧痕	
31	SD201	土師質土器	鍋			(4.4)		やや粗 3㎜以下の石英・長石・茶褐の砂粒を含む	灰黄褐色(10YR5/2)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)		内面:ナデ 外面:ハケ目, ナデ	
32	SD201	土師質土器	擂鉢			(4.4)		やや粗 1㎜以下の石英・長石を含む	淡橙色(5YR8/3)	にぶい橙色 (5YR7/4)		内面:ハケ目, 指頭圧痕 外面:ナデ, 指頭圧痕	

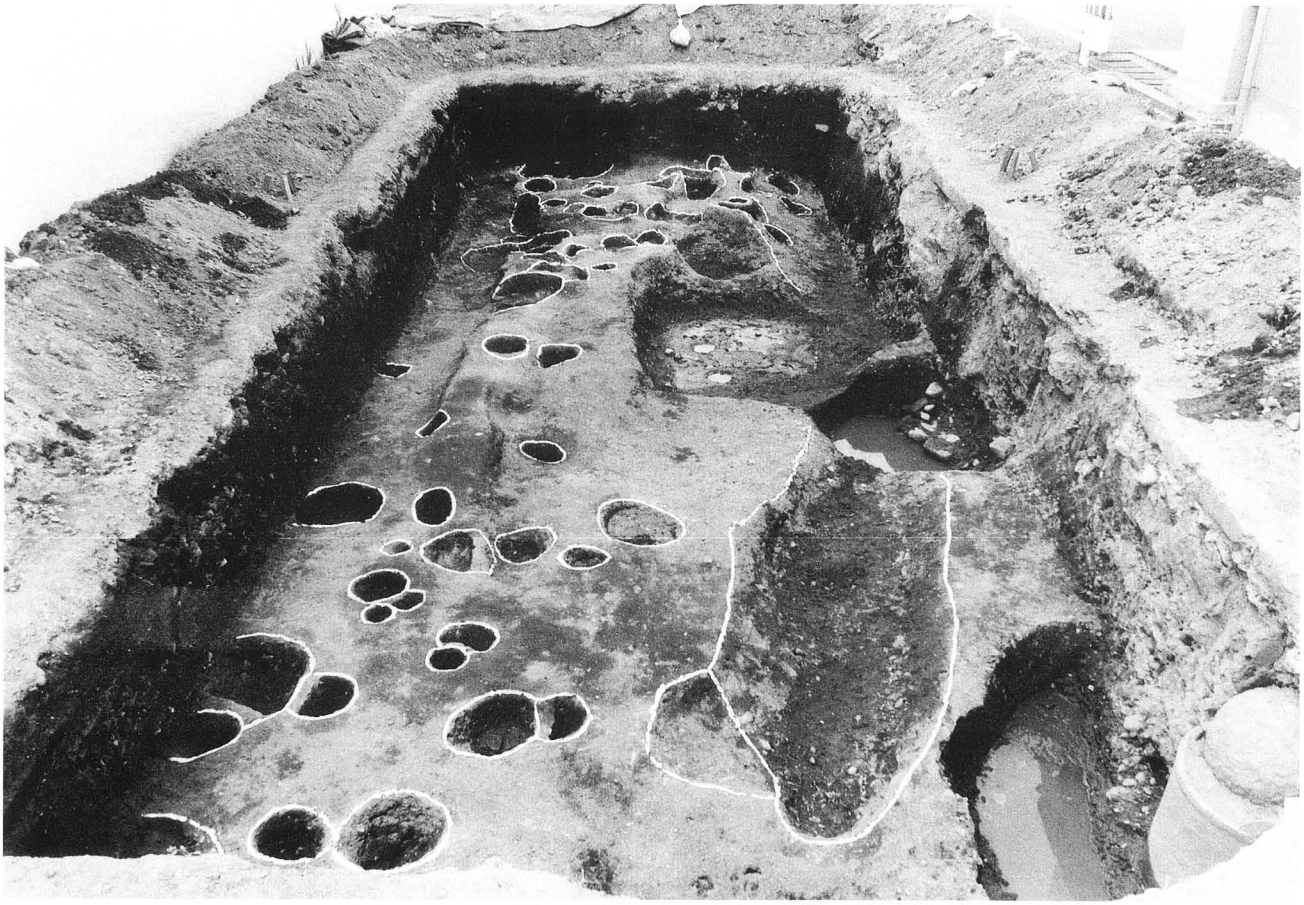
報文番号	出土遺構	種別	器種名	産地	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬,内外色調)	色調3(呉須,上絵)	調整	備考
33	SD201	弥生土器	壺			(2.8)		やや粗 1mm以下の石英・長石を多量に含む	橙色(2.5YR6/8)	灰黄褐色(10YR6/2)		内面:摩滅 外面:摩滅	
34	SD201	土師質土器	土釜			(2.6)		やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	にぶい黄橙色(10YR7/2)	にぶい黄橙色(10YR7/2)		内面:ナデ, 指頭圧痕 外面:ナデ, 指頭圧痕	
35	SD201	土師質土器	鍋			5.9		やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	褐灰色(10YR4/1)	黄灰色(2.5Y6/1)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ, 指頭圧痕	
36	SD201	土師質土器	足釜		(長さ)7.2			密 1mm以下の長石を含む 3～5mmの長石も含む	灰白(10YR8/1)			内面: 外面:指押さえ	
37	SD201	瓦	平瓦	—	長さ(8.0),幅(15.0),厚さ1.7			やや粗 2mm以下の長石, 黒色粒を含む	灰色(N5/)	灰色(N5/0)		凹面:横方向のナデ, ケズリ 凸面:縦方向のナデ, ケズリ	
38	SD202	土師質土器	小皿			(0.5)	7	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	明褐灰色(7.5YR7/2)	にぶい橙色(7.5YR7/3)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ	
39	SK210	弥生土器	壺		16.4	(3.7)		やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	にぶい橙色(7.5YR5/4)	にぶい橙色(7.5YR5/4)		内面:板ナデ 外面:ハケメ	
40	SK210	土製品	土錘		全長:5.8,直径:1.3			密 1mm以下の石英・長石を含む	灰白色(2.5Y8/2)	灰白色(2.5Y8/2)		内面:ナデ 外面:ナデ	
41	SK202	須恵器	椀		14	(3.2)		密 1mm以下の石英・長石を含む	灰白色(2.5Y8/1)	灰白色(2.5Y8/1)		内面:ナデ 外面:ナデ	
43	SK208	弥生土器	高杯			4.5	19.8	やや粗 2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	明黄褐色(10YR6/6)	にぶい黄褐色(10YR5/4)		内面:剥落(ケズリ) 外面:ナデ	
	SK208	土師質土器	皿			(1.2)	4.6	やや密 1mm以下の石英・長石を含む 赤茶色の砂粒を含む	にぶい橙5YR7/4	にぶい橙5YR7/4		内面:ナデ 外面:ナデ	
44	SK208	土師質土器	皿			(1.2)	4.6	やや密 1mm以下の石英・長石・赤褐色の砂粒を含む	にぶい橙色(5YR7/4)	にぶい橙色(5YR7/4)		内面:ナデ 外面:ナデ	
45	SK208	須恵器	壺			(4.7)	20	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	灰白色(2.5Y8/1)	灰白色(2.5Y8/1)		内面:ナデ 外面:ナデ, 格子目叩き	
46	SK209	土師質土器	小皿			(1.0)	6	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	にぶい橙色(5YR6/4)	にぶい赤褐色(5YR5/4)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ	灯明皿
47	SP254	須恵器	杯		14	(3.2)		密 1mm以下の長石を少量に含む	灰色(N6/)	灰色(N6/)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ	
48	SP254	土師質土器	足釜			(4.2)		やや粗 1～2mm以下の石英・長石を含む	灰色(N6/)	灰色(N8/)		内面:ナデ, 粗いナデ 外面:ヨコナデ	
49	SP254	土師質土器	鍋			(2.0)		やや粗 2mm以下の石英・長石を含む	橙色(5YR6/6)	にぶい橙色(7.5YR7/4)		内面:ナデ 外面:ナデ	
50	SP254	土師質土器	足釜の脚部		長さ:(7.2),厚さ:3.2			やや粗 3mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	灰褐色(7.5YR6/2)			内面:磨耗 外面:磨耗	
51	SP254	土師質土器	蛸壺			(5.0)	4.8	やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	にぶい黄橙色(10YR7/4)	浅黄橙色(7.5YR8/4)		内面:ナデ 外面:ナデ	
52	SP254	陶器	擂鉢	備前系	28	(3.9)		密 1～3mm以下の石英・長石を含む	灰色(N4/)	暗赤褐色(5YR3/3)		内面:擂目, ヨコナデ 外面:凹線, ヨコナデ	
53	SP203	土製品	竈			4.2		やや粗 2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	明赤褐色(5YR5/6)	にぶい赤褐色(5YR4/4)		内面:ナデ 外面:ナデ	
54	SP224	須恵器	椀			(1.4)	7.8	密 1mm以下の砂粒を含む	灰白色(N7/)	灰白色(N7/)		内面:ナデ 外面:ナデ	
55	SP229	土師質土器	甕			(1.9)		やや密 1mm以下の石英・長石を含む	橙色(5YR6/6)	にぶい赤褐色(5YR5/4)		内面:ハケメ 外面:粗いハケメ	
56	SP231	土師質土器	皿			(1.5)		密 砂粒含む	灰白色(10YR8/2)	灰白色(10YR8/2)		内面:ナデ 外面:ナデ	
57	SP231	土師質土器	椀			(1.2)	5	やや密 1mm以下の石英・茶褐色の砂粒を含む	浅黄橙色(7.5Y8/4)	灰白色(N8/)		内面:摩滅 外面:摩滅(ナデ)	
58	SP231	須恵器	椀			(1.3)	4.2	やや密	灰白色(5Y7/1)	灰色(N5/)		内面:ナデ 外面:ナデ	
59	SP231	臼磁	皿			(0.9)	7	密	灰白色(10Y7/1)	灰白色(N8/)			
60	SP231	土師質土器	足釜			(7.9)		やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	にぶい橙色(5YR6/4)	にぶい橙色(5YR6/4)		外面:指ナデ	
61	SP253	土師質土器	皿		11	(1.9)		密 1mm以下の石英・長石・赤褐色砂粒含む	浅黄橙色(7.5YR8/4)	浅黄橙色(7.5YR8/4)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ	
62	SP253	須恵器	長頸壺			5.5		密	灰オリーブ色(7.5Y6/2)	灰白色(7.5Y8/1)		内面:回転ナデ 外面:凹線2条	自然釉
63	第2面下層遺構精査時(北西部)	土師質土器	鍋			(2.4)		やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	灰黄褐色(10YR4/2)	浅黄橙色(7.5YR8/3)		内面:ナデ	
64	第2面下層遺構精査時(北西部)	須恵器	碗			(2.4)		密 1mm以下の石英・長石を含む	灰色(N5/)	灰色(N6/)		内面:ナデ 外面:ナデ	
65	第2面下層遺構精査時(北西部)	土師質土器	鍋			(2.1)		やや粗 1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母含む	明褐灰色(7.5YR7/2)	にぶい黄橙色(10YR7/2)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ	
66	第2面下層遺構精査時(北西部)	陶器	擂鉢	備前系		(4.7)		やや密 1mm以下の石英・長石を含む	にぶい赤褐色(7.5YR5/3)	にぶい赤褐色(7.5YR4/3)		内面:ナデ 外面:ナデ	

報文番号	出土遺構	種別	器種名	産地	法量(cm)			胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬,内外色調)	色調3(呉須,上絵)	調整	備考
					口径	器高	底径						
67	SK213	土師質土器	皿		8	(1.2)		やや密 1mm以下の石英・長石・赤褐色砂粒を含む	灰白色(10YR8/2)	灰白色(10YR8/2)		内面:摩滅 外面:摩滅	
68	SK213	土師質土器	小皿		8.8	1.2	6.6	密 1mm以下の石英・長石・赤褐色砂粒を含む	橙色(5YR6/6)	橙色(5YR6/6)		内面:ナデ 外面:ヨコナデ, 糸切り	
69	SK213	土師質土器	杯		9.3	1.3		やや密 1mm以下の石英・長石を含む	橙色(5YR7/6)	橙色(5YR7/6)		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ	
70	SK213	土師質土器	杯			(1.9)		密	浅黄橙色(10YR8/3)	淡黄色(2.5Y8/3)		内面:ナデ 外面:ナデ	
71	SK213	染付	青花碗		13	(2.8)		密	灰白色(N8/)	明緑灰色 (10GY8/1)		内面: 外面:	
72	SK213	瓦	平瓦	—	長さ(9.5),幅(7.1),厚さ1.6			粗 5mm以下の石英, 長石を含む	暗青灰色5PB4/1	暗青灰色5PB4/1		凹面:ナデ 凸面:ナデ	
73	SK213	金属	板状鉄器	—	長さ3.4,幅3..4,厚さ0.5								重さ48.4g
74	SK214	土師質土器	皿		10.6	(2.7)		密 1mm以下の石英・長石・赤褐色砂粒を含む	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)		内面:ナデ 外面:ナデ	
75	SK214	土師質×弥生土器	皿			(3.0)		密 1mm以下の石英・長石を含む	にぶい橙色 (5YR7/4)	にぶい橙色 (5YR7/4)		内面:磨滅 外面:磨滅	
76	SK214	土師質土器	足釜			(2.5)		やや粗 1mm以下の石英・長石を含む	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	橙色(5YR6/6)		内面:ナデ 外面:ナデ	
77	第二遺構面検出時	土師質土器	杯		12.6	(2.8)		やや密 1mm以下の石英・長石を含む	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	褐灰色(10YR6/1)		内面:ナデ 外面:ナデ	
78	第二遺構面検出時	土師質土器	杯		12.8	(2.7)		やや密 1mm以下の石英・長石・赤褐色砂粒を含む	にぶい橙色 (5YR7/4)	橙色(5YR7/6)		内面:ナデ 外面:ナデ	
79	第二遺構面検出時	土師質土器	椀			(0.8)		密 1mm以下の石英・長石を含む	灰白色(2.5Y8/1)	灰白色(2.5Y7/1)		内面:摩滅 外面:ヨコナデ	
80	第二遺構面検出時	土師質土器	不明			(5.5)		密 1mm以下の砂粒	灰白色(10YR8/2)	にぶい橙色 (5YR6/4)		内面:ナデ 外面:ハケ状調整, ナデ	
81	第二遺構面検出時	磁器	碗	肥前系		(1.7)	4	密 砂粒を含む	灰白色(N7/)	灰白色(5GY8/1)		内面: 外面:	
82	第二遺構面検出時	青磁	仏花瓶		8.8	4.4		密	灰白色(10Y7/1)	明オリーブ灰色 (5GY7/1)		内面: 外面:	
83	第二遺構面検出時	陶器	鉢		23	(3.4)		密 1mm以下の石英・長石を含む	褐灰色(5YR5/1)	暗褐色(5YR3/2)		内面:ナデ 外面:ナデ	
84	第二遺構面検出時	瓦	平瓦	—	長さ(9.4),幅(9..8),厚さ1.5			細 1mm以下の長石を含む	にぶい橙色7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4		凹面:ナデ, 櫛描文 凸面:ナデ	
85	SE102掘り方	土師質土器	杯×椀			(1.5)	6.2	1mm以下の石英・長石含む	にぶい橙5YR7/4	内外面:にぶい橙 5YR7/4		内外面:摩滅	
86	SE102掘り方	土師質土器	皿		10.8	1.7	6.6		灰白7.5YR8/2	内外面:灰白 7.5YR8/2		内面:ナデ 外面:ヨコナデ 底部:篦キリ	
87	SE102	土師質土器	足釜		21.0	(3.80)		1mm以下の石英・長石含む	にぶい橙5YR7/3	内面:にぶい橙 5YR7/3 外面:にぶい橙 5YR6/4		外面:ナデ,指押さえ	
88	SE102	土師質土器	足釜脚部		長さ:10.0,厚さ:2.9			2mm以下の石英・長石・角閃石含む	灰白2.5Y7/1	灰白2.5Y7/1		内外面:ナデ	
89	SE102検出時	磁器	皿	肥前系	13.7	4.5	7.4	微	灰白N8/0	透明色	明青色		見込み:コンニャク印判による五弁花 高台内:銘款
90	SE102検出時	磁器	碗底部	肥前系	—	6.6	(3.0)	微	灰白N8/0	透明色	淡青色		広東碗
91	SE102検出時	陶器	碗	京・信楽系	8.0	(4.0)	—	細	灰白5Y8/1	灰白5Y7/2			
92	SE102検出時	陶器	灯明皿	京・信楽系	10.0	2.0	4.0	細	灰白N8/0	灰白7.5Y7/1			
93	SE102検出時	陶器	擂鉢口縁部	備前系	—	(5.4)	—	やや粗, 1～2mm大の長石・石英・黒色粒を含む	赤橙10R6/6			口縁部:回転ナデ,体部外面:篦削り	堺・明石,白神Ⅱ型式
94	SE102検出時	瓦	菊丸瓦	—	高さ(5.5),幅(7.3),厚さ1.7			細, 砂粒をほとんど含まない	灰N6/0	凹面:灰白N7/0 凸面:灰白2.5Y8/2		瓦当裏面:ナデ	
95	SE101	磁器	碗底部	肥前系		(3.3)		微	灰白色	透明色	呉須:淡青色		
96	SE101	磁器	皿底部	肥前系		(1.1)		微	灰白色	透明色	呉須:暗青色		蛇ノ目凹型高台
97	SE101	磁器	皿	肥前系				微	灰白色	透明色	呉須:暗青色		
98	SE101	磁器	皿	肥前系				微	灰白7.5Y8/1	明緑灰色 7.5GY8/1	口銹:赤黒 2.5YR2/1		内面に陽刻文。
99	SE101	陶器	皿底部	肥前系		(1.9)	4.9	細	淡黄2.5Y8/3	浅黄2.5Y7/3	呉須:暗青灰 5BG4/1		
100	SE101	陶器	鉢底部	肥前系		3.7	7.0	細	灰黄褐10YR6/2	内外面:暗オリーブ 5Y4/4＋白土(刷毛目)			
101	SE101	陶器	碗底部	京・信楽系		(2.3)	6.6	細	灰白2.5Y7/1	灰白7.5Y7/1			
102	SE101	陶器	灯明皿	京・信楽系	7.2	1.5	3.8	細	灰白10YR7/1	赤褐5YR4/6		外面:回転ケズリ 底部:回転糸切り	内外面塗土
103	SE101	陶器	灯明皿	備前系	8.0	(1.7)		細	にぶい赤橙10R6/4	赤褐10R5/4		内面:回転ナデ 外面:回転ナデ,回転ケズリ	
104	SE101	陶器	擂鉢底部	備前系		(4.8)		1mm大の石英・長石・黒色粒を含む	にぶい橙2.5YR6/3	暗赤褐2.5YR3/3			外面被熱の痕跡。
105	SE101	土師質土器	井側口縁部	在地		(7.2)		2mm以下の石英・長石・金雲母を含む	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3			
106	SE101	土師質	井側口縁部	在地		(12.2)		2mm以下の石英・長石を含む	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4		内外面:ナデ	
107	SE101	土師質土器	井側体部	在地		(12.3)		石英・長石を含む	にぶい橙5YR6/4	にぶい橙5YR6/4		内外面:ナデ	外面に墨書「口ノ壱(蓋)相」
108	SE101	土師質土器	井側体部	在地		(7.0)		1mm以下の石英・長石を多く含む	にぶい赤褐5YR5/4	内面:にぶい橙 7.5YR6/4 外面:にぶい橙 7.5YR6/4			外面に刻書「壱」或は「蓋」

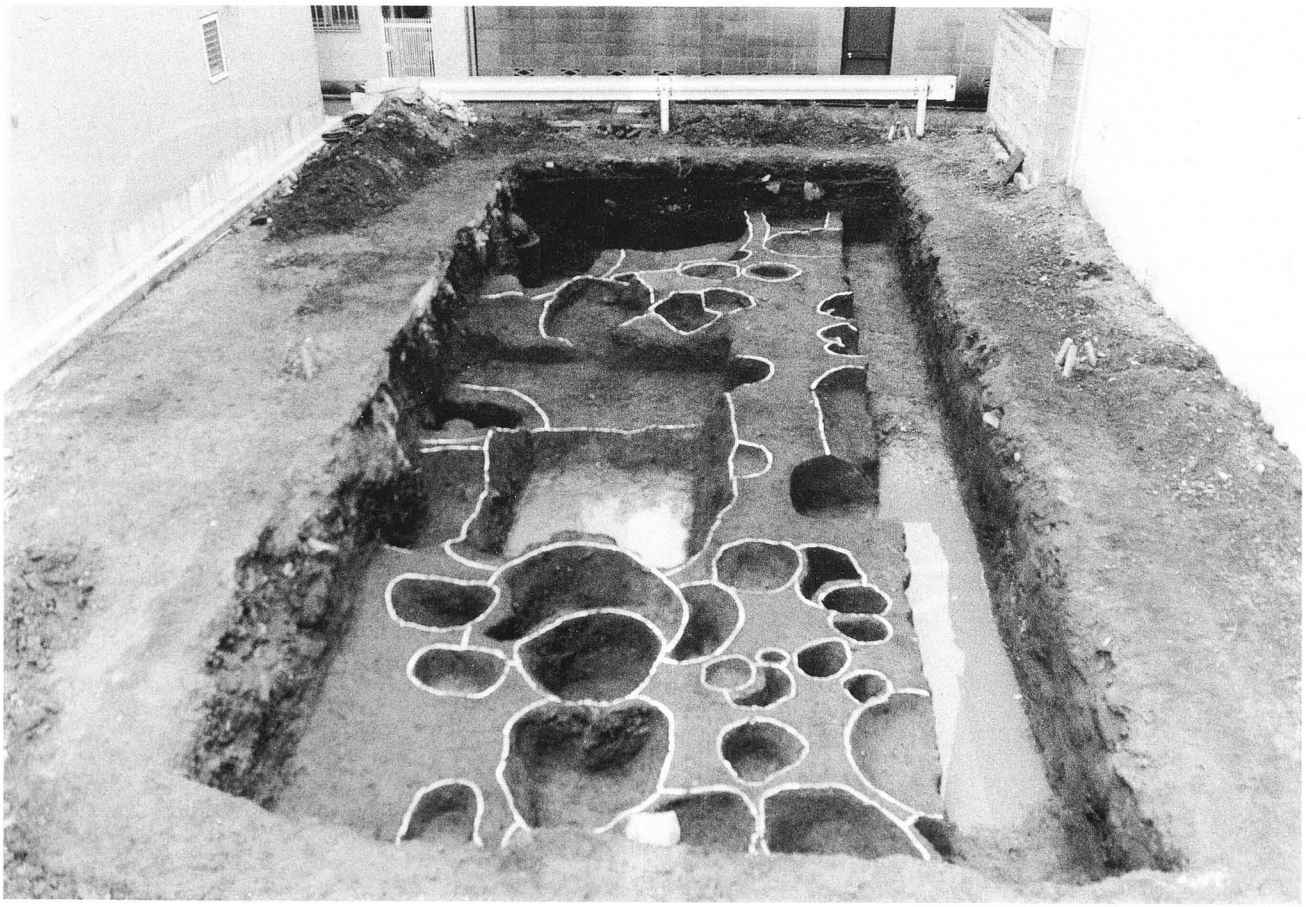
報文番号	出土遺構	種別	器種名	産地	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬,内外色調)	色調3(呉須,上絵)	調整	備考
109	SE101	土師質土器	擂鉢	—	27.2	(5.0)		1mm以下の石英・長石含む	にぶい橙2.5YR6/4	内外面:にぶい橙2.5YR6/4		内面:ケズリ,ナデ,ヨコナデ 外面:ヨコナデ,ケズリ	
110	SE101	弥生土器	甕	—	13.6	(2.8)		1mm以下の石英・長石含む	にぶい褐7.5YR6/3	内面:にぶい褐7.5YR6/3 外面:にぶい黄橙7.5YR6/3		内面:ケズリ 外面:摩滅	
111	SE101	瓦	軒平瓦	—	長さ(10.0),幅(20.0),厚さ3.8			細 微砂粒を含む	灰白N8/0	黒N2/0		凹面・凸面・瓦当裏面:ナデ	中心飾:三葉
112	SE101	金属	方鏡	—	長さ8.4,幅5.8,厚さ0.4								重さ48.4g
113	SK101埋甕内	磁器	皿	肥前系	10.8	2.3	6.2	微	灰白N8/0	透明色	明・淡青色		輪花皿,焼継ぎ+金彩の傷隠し,高台内に焼継印
114	SK101埋甕内	陶器	小杯	京・信楽系	5.9	4.4	2.5	細	灰白5Y8/1	灰白10Y7/1			渦高台,高台に抉りをもつ
115	SK101埋甕内	陶器	急須	不明	—	(7.3)	5.3	細	鈍い黄橙10YR7/3	鈍い黄2.5Y6/3	白土	底部:回転篦削り	イッチン描き
116	SK101埋甕内	陶器	鍋	不明	13.6	7.5	6.0	細	浅黄2.5Y7/3	鉄泥+透明釉		底部:回転篦削り	外面上半:トビカンナ,見込みに円錘状のピン痕3箇所
117	SK101埋甕内	陶器	擂鉢口縁部	備前系	—	(5.4)	—	やや粗,1～2mm大の長石・石英を含む	鈍い赤橙10R6/4			口縁部:回転ナデ,体部外面:回転篦削り	堺・明石,白神Ⅱ型式
118	SK101埋甕内	陶器	鉢	不明	25.0	11.7	16.0	細,1mm大の長石・石英を含む	赤10YR5/8	暗赤褐5YR3/3			施釉陶器,大谷焼か
119	SK101埋甕内	土師質土器	甕口縁部	在地	—	(9.1)	—	粗,1mm以下の長石・石英・金雲母を含む	灰褐7.5YR6/2			内外:ヨコナデ	
120	SK102	瓦	軒丸瓦	—	高さ(13.2),幅13.6,厚さ2.3			細,微砂粒・赤褐色粒を含む	灰白7.5Y7/1	灰N5/0			
121	SK105	金属	釘	—	長さ5.1,厚さ0.7								重さ4.7g
122	SK106	土師質土器	皿	在地	8.2	1.2	5.6	細,1mm以下の長石・石英・赤色粒を含む	鈍い橙5YR7/4			底部:回転糸切り	
123	SK108	陶器	碗口縁部	京・信楽系	9.0	(2.9)	—	細	灰白2.5Y8/2	透明色	黄褐2.5Y5/6		銹絵(染付)
124	SK108	陶器	鉢口縁部	瀬戸・美濃系	—	(5.4)	—	やや粗,微砂粒を含む	灰白2.5Y8/2	緑色			
125	SK108	瓦	菊丸瓦	—	高さ(5.3),幅(10.0),厚さ(1.5)			細,砂粒をほとんど含まない	灰N6/0	灰N5/0			
126	SK108	瓦	軒平瓦	—	高さ(3.5),幅(12.0),厚さ1.0			細,微砂粒を含む	褐灰10YR6/1	鈍い黄橙10YR7/3			中心飾:巴,高松城編年様相5
127	SK104	磁器	鉢底部	肥前系	—	(2.2)	5.2	微	灰白N8/0	透明色	明青色		畳付に砂粒熔着
128	SK104	瓦	平瓦	—	長さ(18.6),幅22.4,厚さ1.5			細,微砂粒を含む	灰白7.5Y8/1	凹面:黒N2/0 凸面:黒7.5Y2/1		凹面:ナデ 凸面:未調整	
129	SK104	瓦 土器	丸瓦	—	長さ25.4,幅12.9,厚さ2.3			細,微砂粒を含む	灰白5Y5/1	凹面:黒N2/0 凸面:黒N2/0		凹面:吊紐・布目・コビキ痕 凸面:ナデ	
130	SK104	瓦	軒丸瓦	—	高さ(6.6),幅(11.6),厚さ(1.5)			細,微砂粒を含む	灰白N7/0	灰N5/0		凹面:コビキ	
131	SK104	金属	釘	—	長さ(5.2),厚さ0.7								重さ7.8g
132	SK104	金属	釘	—	長さ(3.7),厚さ0.9								重さ4.3g
133	SK104	金属	釘	—	長さ(4.0),厚さ0.8								重さ4.9g
134	SK104	金属	釘	—	長さ(2.8),厚さ0.3								重さ2.2g
135	SK114	磁器	紅猪口	肥前系	—	(3.5)	2.8	微	灰白N8/0	透明色	暗・淡青色		
136	SK114	陶器	火入	不明	—	(5.3)	7.8	細	褐灰10YR6/1	黄灰2.5Y6/1	赤7.5R4/8		富田・理兵衛焼か
137	SK115	磁器	紅猪口	肥前系	6.8	3.0	3.2	微	灰N8/0	灰白5GY8/1			
138	SK116	陶器	碗口縁部	肥前系	—	(3.7)	—	細	浅黄橙10YR8/4	鈍い黄橙10YR7/4			京焼風陶器
139	SK116	陶器	擂鉢口縁部	備前系	—	(10.1)	—	細,1mm以下の長石・石英・黒色粒を含む	赤褐10R4/4			口縁～体部外面:回転ナデ	口縁上端と顎下端に熔着痕,口縁部外面に重ね焼痕,乗岡近世2b・3期
140	SK116	土師器土器	かまど	—		(4.8)		2mm以下の石英・長石・角閃石含む	にぶい赤褐5YR4/3	内面:にぶい赤褐5YR4/3 外面:暗赤褐5YR3/3		内面:板ナデ 外面:ナデ	
141	SK119	磁器	白磁碗	中国	15.8	(3.3)		密	灰白N8/0	透明釉			
142	SK119	磁器	青磁碗	中国		(3.4)		精良	灰白N7/0	灰オリーブ7.5Y6/2		片彫りによる分割線	
143	SK120	土師質土器	皿	在地	10.9	2.4	5.6	1nn以下の長石・石英を含む	灰白10YR8/2			底部:板状圧痕,見込み:仕上げナデ	
144	SK120	土師質土器	甕	—		(4.0)		1mm大の石英・長石含む	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4		内外面:ナデ	
145	SK122	石	砥石	—	長さ8.7,幅6.1,厚さ6.2								重さ633.3g
146	SK126	土師質土器	足釜	—	28.0	(5.0)		3mm以下の石英・長石含む	橙5YR6/6	内外面:橙5YR6/6		内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ,ナデ,指押さえ,刺突状痕	
147	SK126	陶器	小杯	不明(京・信楽系)	6.2	4.6	2.6	細	灰白5Y8/1	透明色 灰白5Y8/2	鉄絵:黒2.5Y2/1		高台に抉り
148	SK112	陶器	碗	不明	9.4	6.1	2.9	細	灰黄2.5Y6/2	白釉+鉄釉		高台:回転篦削り	渦高台,富田・理兵衛焼か
149	SK112	陶器	碗	不明	11.1	6.0	3.3	細	灰黄2.5Y6/2	白釉+鉄釉		高台:回転篦削り	渦高台,富田・理兵衛焼か
150	SK112	陶器	碗	京・信楽系	9.0	4.8	3.0	細	灰白5Y7/1	灰白5Y7/2			端反碗
151	SK112	陶器	碗	京・信楽系	8.6	5.3	3.4	細	灰白2.5Y8/1	灰白5Y8/1			貫入著しい
152	SK112	陶器	碗	京・信楽系	9.4	5.1	3.5	細	灰白N8/0	灰白10Y8/1			小杉碗,高台内墨書
153	SK112	陶器	碗	京・信楽系	9.6	5.4	3.6	細	灰白5Y8/1	灰白5Y8/1			小杉碗
154	SK112	陶器	碗蓋	瀬戸・美濃系	10.0	3.0	5.4	やや粗	灰白5Y8/1	透明色	暗青色(呉須)		
155	SK112	陶器	碗	瀬戸・美濃系	11.0	6.4	5.5	やや粗	灰白10YR8/2	透明色	褐色(銹絵),暗青色(呉須)		広東碗,外面宝珠文,見込み五弁花の染付け,内面貫入著しい
156	SK112	磁器	紅猪口	関西系	—	(2.3)	2.6	微	灰白N8/0	透明色	明・淡青色		
157	SK112	磁器	紅猪口	肥前系	5.7	2.5	2.4	微	灰白N8/0	灰白10Y8/1			白磁
158	SK112	磁器	紅猪口	瀬戸・美濃系	6.0	(2.8)	—	微	灰白N8/0	透明色	明・淡青色		
159	SK112	磁器	紅猪口	肥前系	6.8	2.6	3.4	微	灰白N8/0	透明色	暗・淡青色		印判手
160	SK112	陶器	皿	瀬戸・美濃系	11.9	2.4	4.5	やや粗	灰白7.5Y8/1	灰オリーブ7.5Y6/2			ヒダ皿
161	SK112	磁器	皿	肥前系	13.4	3.6	9.0	微	灰白N8/0	透明色	暗青色		蛇ノ目凹型高台,貫入著しい
162	SK112	陶器	灯明皿	備前系	9.0	1.1	—	細	赤褐10R5/4	鈍い赤褐			
163	SK112	陶器	灯明皿	備前系	6.2	1.3	—	細	赤褐10R5/4	鈍い赤褐			
164	SK112	陶器	火入	不明	7.9	(4.2)	—	灰褐7.5YR5/2	黒褐5YR3/1				鉄釉,縞文
165	SK112	陶器	蓋	不明	6.1	3.6	—	細,1mm以下の長石・石英を含む	暗赤褐10R3/2	外面:白釉+鉄釉			受け部に熔着痕

報文番号	出土遺構	種別	器種名	産地	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬,内外色調)	色調3(呉須,上絵)	調整	備考
166	SK112	陶器	瓶	京・信楽系	—	(18.7)	7.2	細	灰白5Y7/1	透明色	黒7.5Y3/1		図上復元
167	SK112	磁器	鉢	肥前系	38.6	10.4	9.6	微	灰白N8/0	透明色	暗・淡青色		折縁輪花,大橋Ⅴ期,焼継ぎ+金彩の傷隠し,高台内に「六」の焼継ぎ印
168	SK112	陶器	鍋	不明	17.8	6.9	9.0	細,1mm以下の長石・石英を含む	—	灰白2.5Y8/2			外面煤化
169	SK112	土師質土器	羽釜	在地	11.8	(6.6)	—	細,1mm以下の長石・石英を含む	灰黄2.5Y6/2			体部外面:指押さえ,内面:板ナデ(ハケ目)	
170	SK112	土師質土器	羽釜	在地	19.6	(8.5)	—	細,1mm以下の長石・石英を含む	灰黄2.5Y6/2			口縁部:回転ナデ,体部外面:上端に爪形の圧痕,指押さえ,内面:板ナデ(ハケ目)	体部外面:煤化
171	SK112	土師質土器	焙烙	在地	36.4	(5.2)	—	細,1mm以下の長石・石英・角閃石を含む	灰黄2.5Y6/2			口縁部:回転ナデ,体部外面:指押さえ,ナデ,内面:ハケ目	御厩系,外面煤化
172	SK112	土師質土器	甕口縁部	在地	27.4	(8.2)	—	細,1mm以下の長石・石英・角閃石・金雲母を含む	鈍い褐7.5YR6/3			口縁部:ヨコナデ,内面板ナデ	
173	SK112	土師質土器	井側口縁部	在地	—	(10.7)	—	粗,3mm以下の長石・石英・赤褐色粒を含む	鈍い黄橙10YR7/3			内外面:磨滅,剥離,	
174	SK112+113	土師質土器	焜炉	在地	23.7	(8.9)	—	細	鈍い黄橙10YR7/3			口縁部:回転ナデ,体部内面:指押さえ,板ナデ	外型成形か,体部に焼成前の穿孔2箇所
175	SK112	磁器	水滴	肥前系	—	(5.9)	—	微	灰白N8/0	透明色	暗・淡青色		陽刻文
176	SK112	陶器	玩具	不明	2.1	2.0	—	細	鈍い黄橙10YR7/4	外面:灰白5Y8/2			軟質施釉陶器
177	SK112	瓦	軒丸瓦	—	長さ22.6,幅11.5,厚さ1.3			細,微砂粒を含む	灰7.5Y5/1	凹凸面:黒N2/0		凹面:コビキ,内叩き,刺子痕 凸面:ナデ	釘穴2箇所,瓦当面にキラコ付着
178	SK112	瓦	軒平瓦	—	高さ(3.5),幅(10.6),厚さ1.4			細,砂粒をほとんど含まない	灰5Y7/1	凹凸面:灰N3/0			
179	SK112	金属	釘	—	長さ7.6,厚さ0.8								重さ10.7g
180	SK112	金属	釘	—	長さ6.2,厚さ0.5								重さ3.4g
181	SK112	金属	金具	—	長さ5.5,厚さ0.3								重さ3.3g
182	SK112	金属	工具	—	長さ(5.0),幅(6.2),厚さ1.1								重さ37.7g
183	SK118	磁器	火入底部	肥前系	—	(5.0)	5.7	微	灰白N8/0	明オリーブ灰2.5GY7/1			青磁,見込みに砂粒熔着
184	SK118	陶器	火入口縁部	京・信楽系	9.0	(7.0)	—	細	淡黄2.5Y8/3	灰黄2.5Y7/1			
185	SK118	金属	釘	—	長さ5.5,厚さ1.1								重さ9.3g
186	SK125	磁器	碗	肥前系	11.2	6.5	6.2	微	灰白N8/0	透明色	暗・淡青色		広東碗
187	SK125	陶器	碗	京・信楽系	9.0	(3.7)	—	細	灰白5Y8/1	灰白5Y8/2			型打成形,亀甲文+鏨
188	SK125	陶器	碗	京・信楽系	8.4	4.5	3.0	細	灰白7.5Y8/1	灰白10Y8/1			端反碗,貫入著しい
189	SK125	陶器	灯明皿	京・信楽系	8.4	1.8	3.7	細	灰白N8/0	灰白5Y7/2			
190	SK125	陶器	灯明皿	備前系	8.0	(0.9)	—	細	赤10R4/6	赤褐10R5/6			外面に煤付着
191	SK125	陶器	鉢	備前系	9.6	6.4	10.0	細	赤10R5/6				
192	SK125	陶器土器	擂鉢口縁部	備前系	—	(3.1)	—	細,1mm大の長石を含む	赤褐10R5/3				堺・明石,白神Ⅱ型式
193	SK125	陶器	擂鉢口縁部	備前系	—	(7.0)	—	やや粗,1～2mm大の長石・石英を含む	橙2.5YR6/6			口縁部:回転ナデ 体部外面:回転篦削り	堺・明石,白神Ⅱ型式
194	SK125	陶器	水甕	瀬戸・美濃系	—	(15.6)	—	粗,5mm以下の長石・石英を含む	灰白5Y7/1	透明色+外面鉄釉			
195	SK125	土師質土器	土型	—	高さ(10.0),幅(10.5),奥行き5.4			細,砂粒を含む	橙5YR7/6			凸面:ナデ,指押さえ	外型,凹面にキラコ付着,逆文字で「大和」の刻書
196	SK125	土師質土器	土型	—	長さ(12.6),幅(9.2),厚さ4.1			粗,3mm以下の長石・石英・金雲母を含む	鈍い橙7.5YR7/4				外型,凹面にキラコ付着
197	SK125	土師質土器	土型	—	高さ(5.6),幅(5.2),厚さ2.2			やや粗,2mm以下の長石・石英を含む	灰白7.5YR8/1			凸面:ナデ,指押さえ	
198	SK113	磁器	碗	肥前系	10.0	5.5	5.2	微	灰白N7/0	透明色	暗・淡青色		波佐見,中野Ⅴ-4期
199	SK113	磁器	碗底部	肥前系	—	(2.4)	3.2	微	灰白N8/0	透明色	暗・淡青色		小広東碗
200	SK113	磁器	香炉	肥前系	6.4	5.4	3.8	微	灰白N8/0	明緑灰色			青磁
201	SK113	陶器	碗	京・信楽系	9.1	5.4	3.4	細	灰白2.5Y7/1	明オリーブ灰5GY7/1			小杉碗
202	SK113	陶器	碗	京・信楽系	8.2	5.1	3.0	細	灰白5Y8/2	灰白5Y8/2			小杉碗
203	SK113	陶器	碗	京・信楽系	—	(3.8)	3.3	細	灰白5Y8/1	灰白10Y8/1			小杉碗
204	SK113	陶器	灯明皿	京・信楽系	10.8	2.7	4.6	細	褐灰10YR6/1	灰白5Y7/1			
205	SK113	陶器	灯明具	不明	6.6	7.7	5.6	細	灰白2.5Y8/1	暗赤褐10R3/2			施釉陶器
206	SK113	陶器	鍋	不明	17.8	(7.1)	—	細	褐灰10YR5/1	内外:暗赤褐5YR3/4			施釉陶器
207	SK113	陶器	擂鉢口縁部	備前系	—	(3.9)	—	細,1mm以下の長石・石英・黒色粒を含む	鈍い赤褐2.5YR5/4			内外:回転ナデ	顎下端に熔着痕,乗岡近世2b・3期
208	SK113	陶器	擂鉢口縁部	備前系	39.4	(8.6)	—	やや粗,1～2mm大の長石・石英を含む	鈍い橙2.5YR6/3			口縁部:回転ナデ 体部外面:回転篦削り	堺・明石,白神Ⅱ型式
209	SK113	土師質土器	土製品	不明	—	(3.8)	—	精良	灰白10YR8/2			内面:板ナデ,指押さ	型成形,外面にキラコ付着
210	SK113	土師質土器	土製品	不明	—	(4.3)	—	細	鈍い橙7.5YR7/3			内面:ナデ,指押さえ	型成形
211	SK113	金属	小柄	—	長さ(8.2),幅1.6,厚さ0.2								重さ11.0g
212	SK113	金属	小柄	—	長さ(10.0),幅1.8,厚さ0.2								重さ13.0g
213	SK113	金属	小柄	—	長さ8.2,幅1.4,厚さ0.6								重さ14.8g
214	SK113	金属	釘	—	長さ(7.6),厚さ0.8								重さ7.7g
215	SP105	陶器	碗	瀬戸・美濃系	7.3	3.2	3.7	やや粗	浅黄橙10YR8/3	灰白N8/0			
216	SP102	磁器	碗	瀬戸・美濃系	7.8	(4.3)		微	灰白N8/0	透明色			
217	SX101	磁器	白磁碗	中国	16.0	(3.0)		微	灰白N7/0	灰白5Y7/1			
218	SX101	土師質土器	杯	—	13.0	(2.5)		1mm以下の石英・長石含む	浅黄橙10YR8/3	浅黄橙10YR8/3		内外面:ヨコナデ	
219	SX101	弥生土器	脚×器台	—		(2.9)	10.8	1mm以下の石英・長石・角閃石含む	灰褐7.5YR6/2	内面:灰白7.5YR6/2 外面:にぶい褐7.5YR6/3		内外面:ナデ	
220	SX101	土師質土器	足釜	—	22.2	(6.4)		1mm以下の石英・長石含む	橙5YR6/6	内外面:橙5YR6/6		内面:ナデ 外面:ナデ,指押さえ	
221	SX101	磁器	紅猪口	肥前系	6.5	2.9	2.6	微	灰白N8/0	透明色	暗青色		

報文番号	出土遺構	種別	器種名	産地	法量(cm)			胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬,内外色調)	色調3(呉須,上絵)	調整	備考
					口径	器高	底径						
222	SX101	磁器	紅猪口	肥前系	6.7	2.4	2.8	微	灰白N8/0	透明色			高台内に砂粒付着
223	SX101	磁器	紅猪口	肥前系	6.4	2.9	2.8	微	灰白N8/0	透明色	淡青色		
224	SX101	陶器	碗底部	京・信楽系	—	1.4	3.4	細	灰白10YR8/2	灰黄2.5Y7/2	緑色		色絵碗
225	SX101	陶器	灯明皿	京・信楽系	8.5	1.7	3.5	細	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/2			貫入著しい
226	SX101	瓦	軒丸瓦	—	高さ(5.6),幅(12.3),厚さ1.9			細,砂粒をほとんど含まない	灰N6/0	凹凸面:暗灰N3/0		瓦当裏面:ナデ	
227	SX101	—	土塊	—	長さ(9.0),幅(8.2),厚さ3.8			粗,10mm以下の長石・石英・金雲母を含む	橙5YR6/6				
228	SX103	磁器	白磁碗	中国		(1.8)		密	灰白2.5Y8/1	灰白5Y7/2			
229	SX103	陶器	碗口縁部	肥前系		(4.6)		細	灰5Y6/1	透明色			
230	SX103	陶器	甕口縁部	備前系	—	(7.7)	—	細,1mm以下の長石・石英を含む	赤褐10R4/4	外面:暗赤10R3/4 内面:暗赤7.5R3/6		内外面:回転ナデ	
231	SX103	陶器	擂鉢	備前系	26.2	(5.4)		1mm以下の石英・長石含む	灰白N7/0	灰赤7.5R5/2		内面:ヨコナデ,擂目 外面:ヨコナデ	
232	SX103	陶器	擂鉢口縁部	備前系	—	(4.9)	—	細	鈍い赤褐7.5YR4/3			内外面:回転ナデ	内外面被熱,顎下端に熔着痕,乗岡近世2期
233	SX103	陶器	皿底部	肥前系	—	(7.6)	8.6	細	鈍い赤褐2.5YR5/4	内外面:灰5Y6/1+白土			見込み・畳付に砂目の熔着痕 三島手　大橋Ⅱ・Ⅲ期
234	SX103	瓦	丸瓦	—	長さ(9.4),幅(7.0),厚さ2.7			細,1mm以下の長石・石英を含む	橙7.5YR7/6	凹面:橙7.5YR6/6 凸面:橙7.5YR7/6		凹面:刺子痕,ナデ 凸面:磨滅	
235	SX103	金属	釘	—	長さ(4.4),厚さ0.4								重さ4.6g
236	SX102	磁器	碗蓋	肥前系	—	(2.2)	4.0	微	灰白N8/0	透明色	明・淡青色		
237	SX102	磁器	碗口縁部	肥前系	10.6	(4.4)	—	微	灰白10YR8/1	白磁釉			上絵の痕跡
238	SX102	磁器	碗口縁部	瀬戸・美濃系	—	(2.3)	—	微	灰白N8/0	透明色	暗・淡青色		
239	SX102	磁器	碗底部	肥前系	—	(1.2)	4.5	微	灰白N8/0	透明色	明・淡青色		氷裂菊花文,大橋Ⅴ期
240	SX102	陶器	碗底部	京・信楽系	—	(3.0)	4.0	細	灰白5Y8/1	灰白5Y8/2	青灰色,褐色	高台:回転篦削り	小杉碗,呉須・錆絵の染付け
241	SX102	陶器	灯明皿	備前系	—	(1.3)	—	細	鈍い赤褐10R6/4	鈍い赤褐			内外面:塗土
242	SX102	瓦	軒丸瓦	—	高さ(6.4),幅(6.6),厚さ1.4			細,砂粒をほとんど含まない	灰白N8/0	灰N6/0			



１ 第２遺構面全景（南から）



２ 第１遺構面全景（北から）

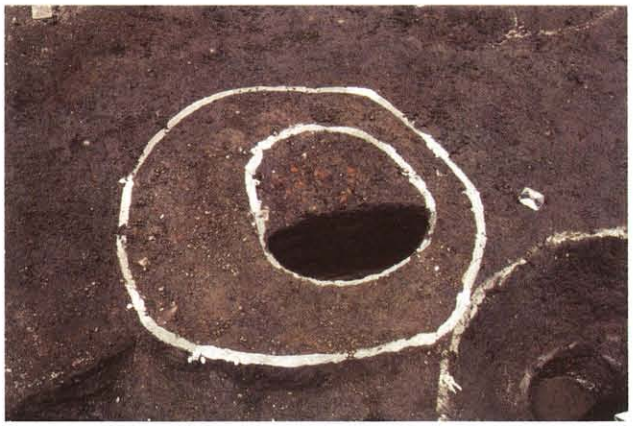
図版２

1 調査地西壁土層（南東から）

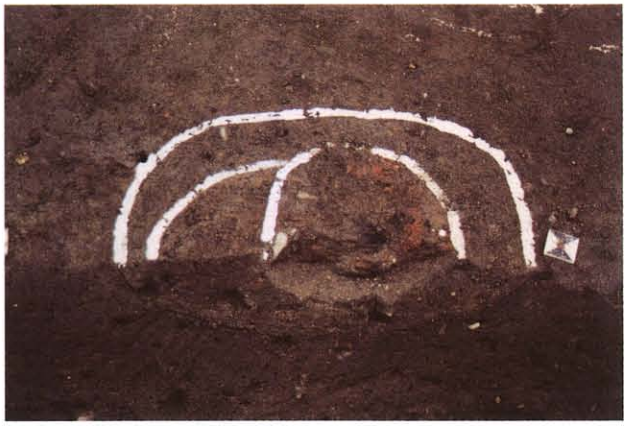
2 調査地南壁土層（北から）

3 調査地北壁土層（南から）

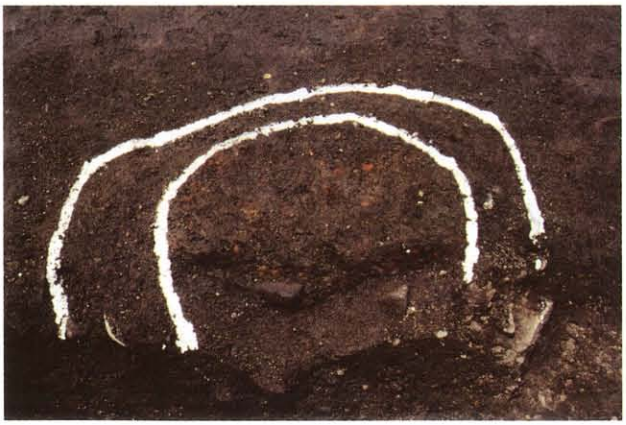
4 SX101 断面



5 SA101 P-2（東から）



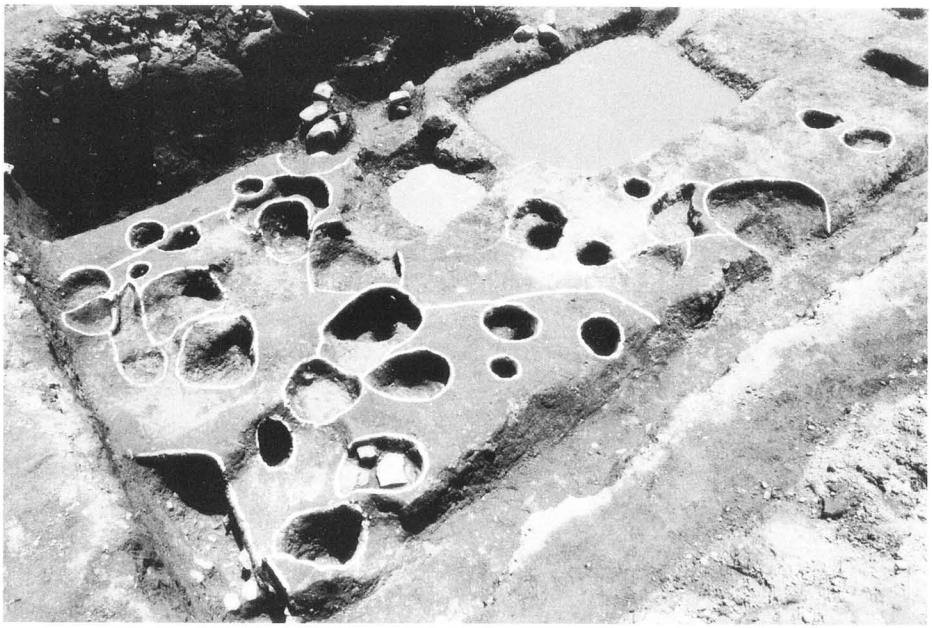
6 SA101 P-3（東から）



7 SA101 P-4（東から）

8 SA101 P-5（東から）

１ 第２遺構面（北から）



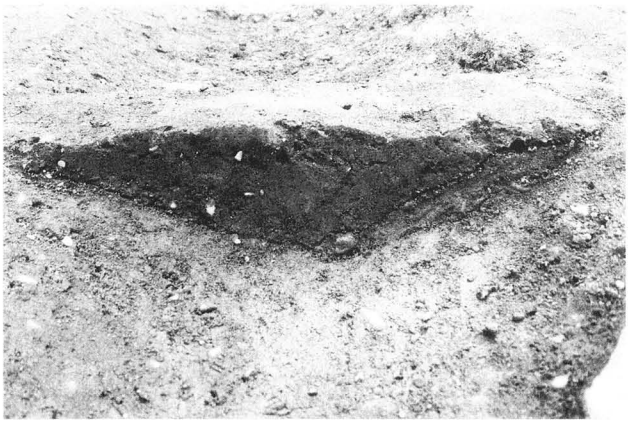
２ 第２遺構面北西部
上層遺構（北西から）

３ 第２遺構面北西部
下層遺構（南西から）

図版４

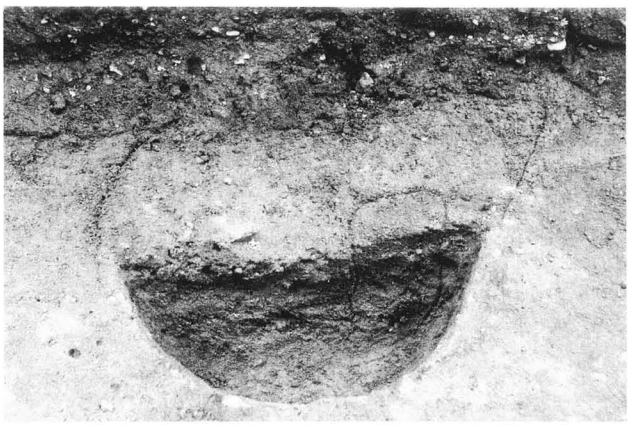
1 SD201（南から）

2 SD201（北から）

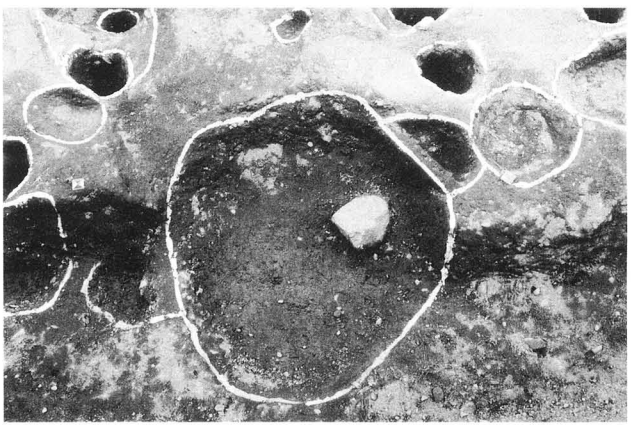


3 SD201 断面

4 SB201（南から）



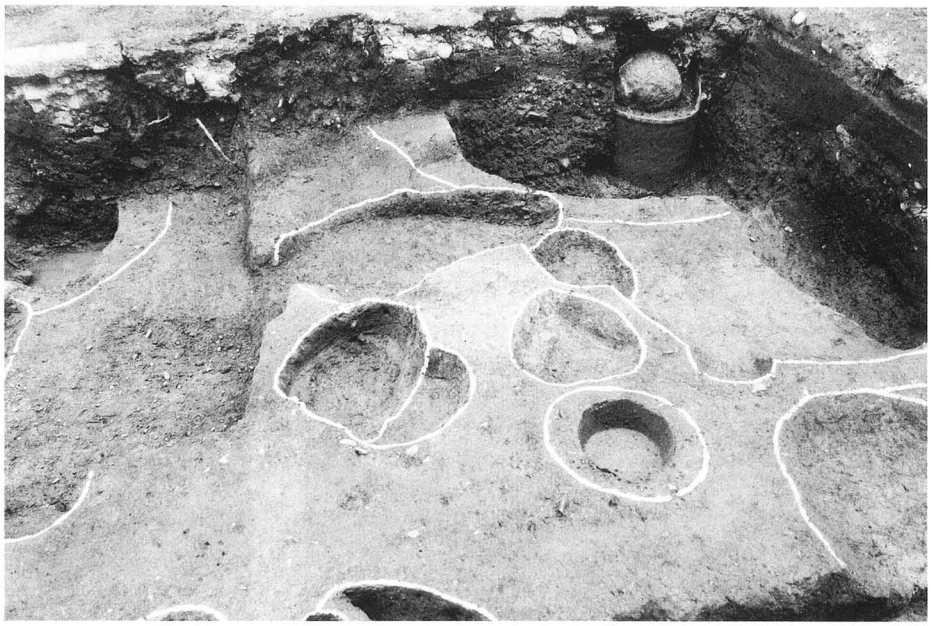
5 SK204 断面



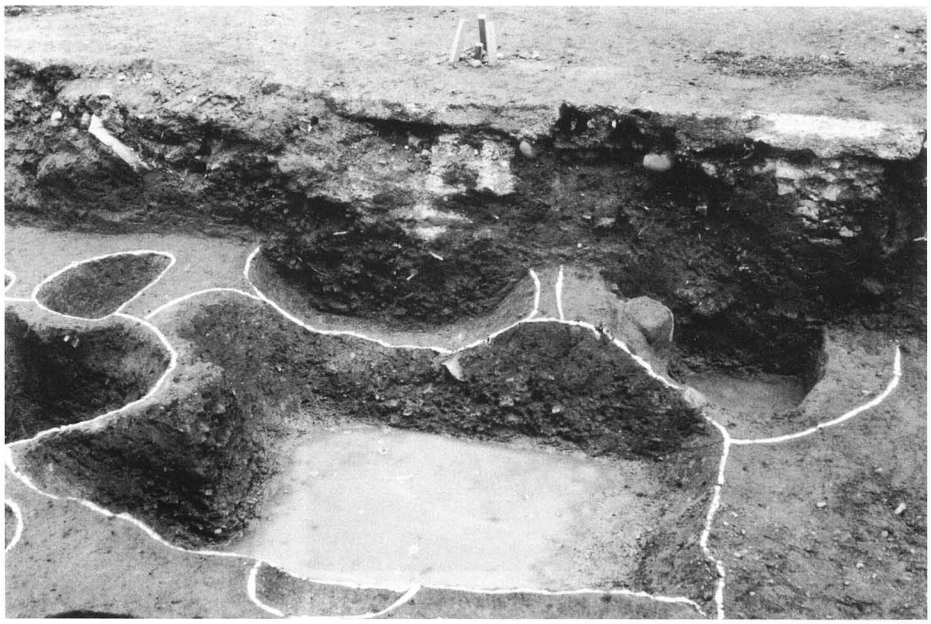
6 SK213（西から）

7 SK213 遺物出土状況

１ 第１遺構面北部
（南西から）

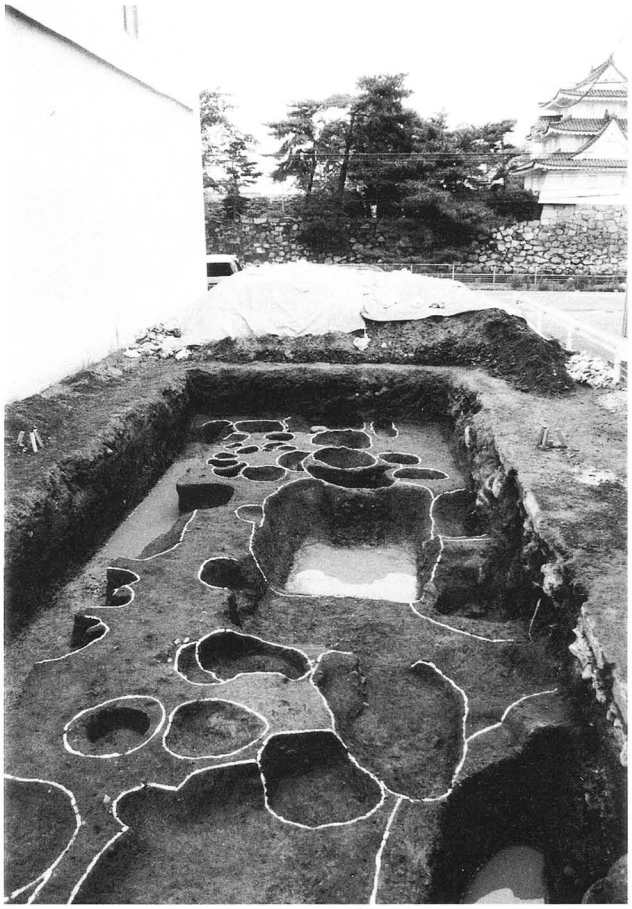


２ 第１遺構面南部
（西から）



３ SX101・SE102
・SK125（西から）

図版６

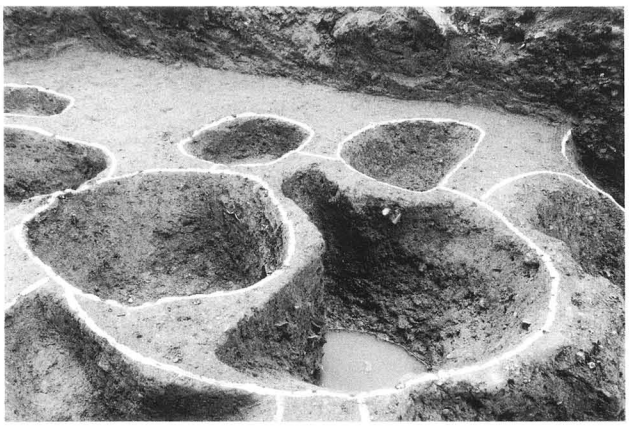


1 第１遺構面（南から）

2 SA101（北から）

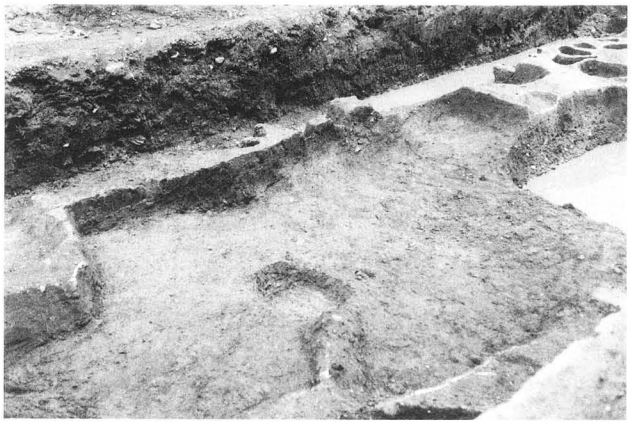
3 SE101（西から）

4 SE102（東から）



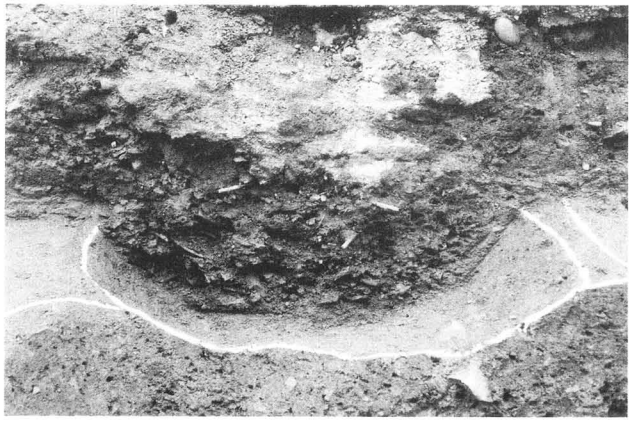
5 SK112・113（西から）

6 SK114・115（南西から）

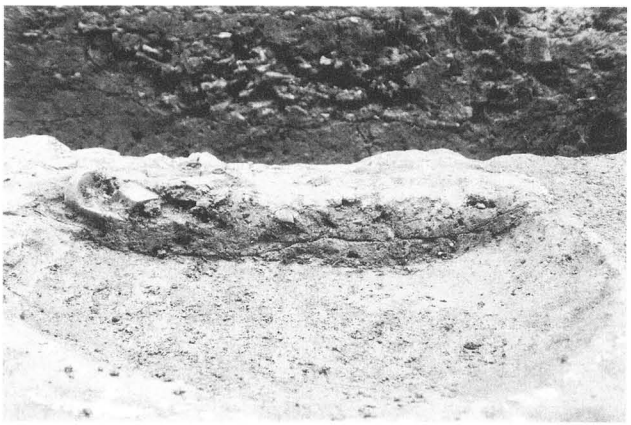


1 SX103（南東から）

2 SX103 断面



3 SK125（西から）

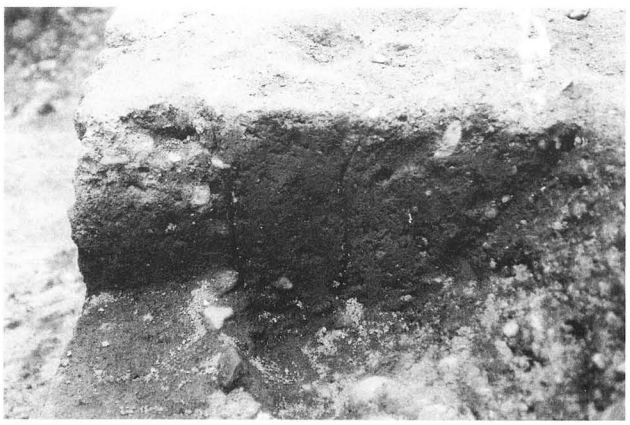


4 SK102 断面

5 SK104 断面

6 SK105 断面

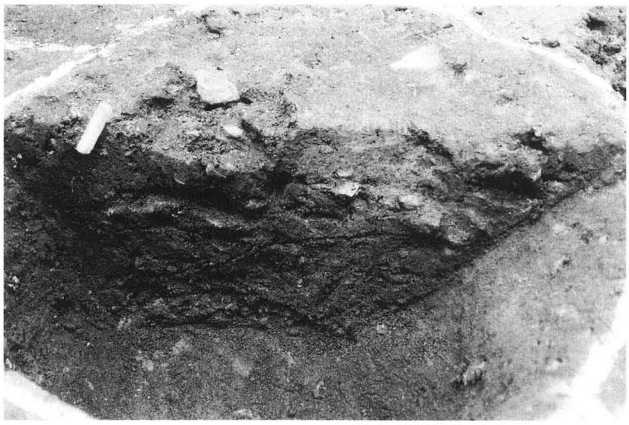
7 SK106 断面



8 SK108 断面

図版８

1　SK112 断面



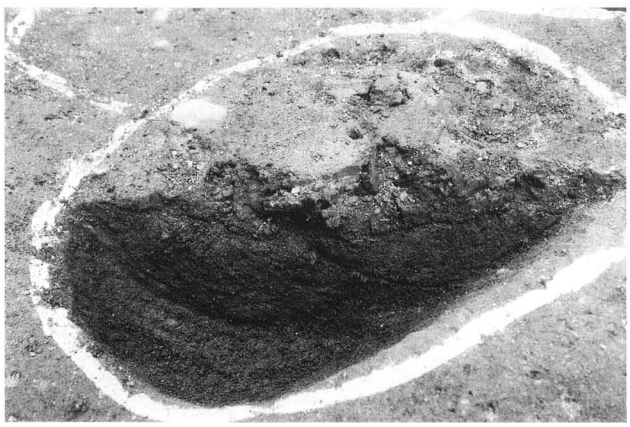
2　SK113 断面

3　SK114 断面

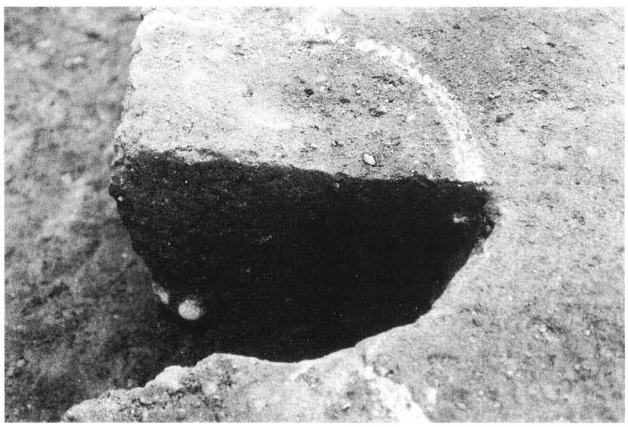
4　SK115 断面

5　SK116 断面

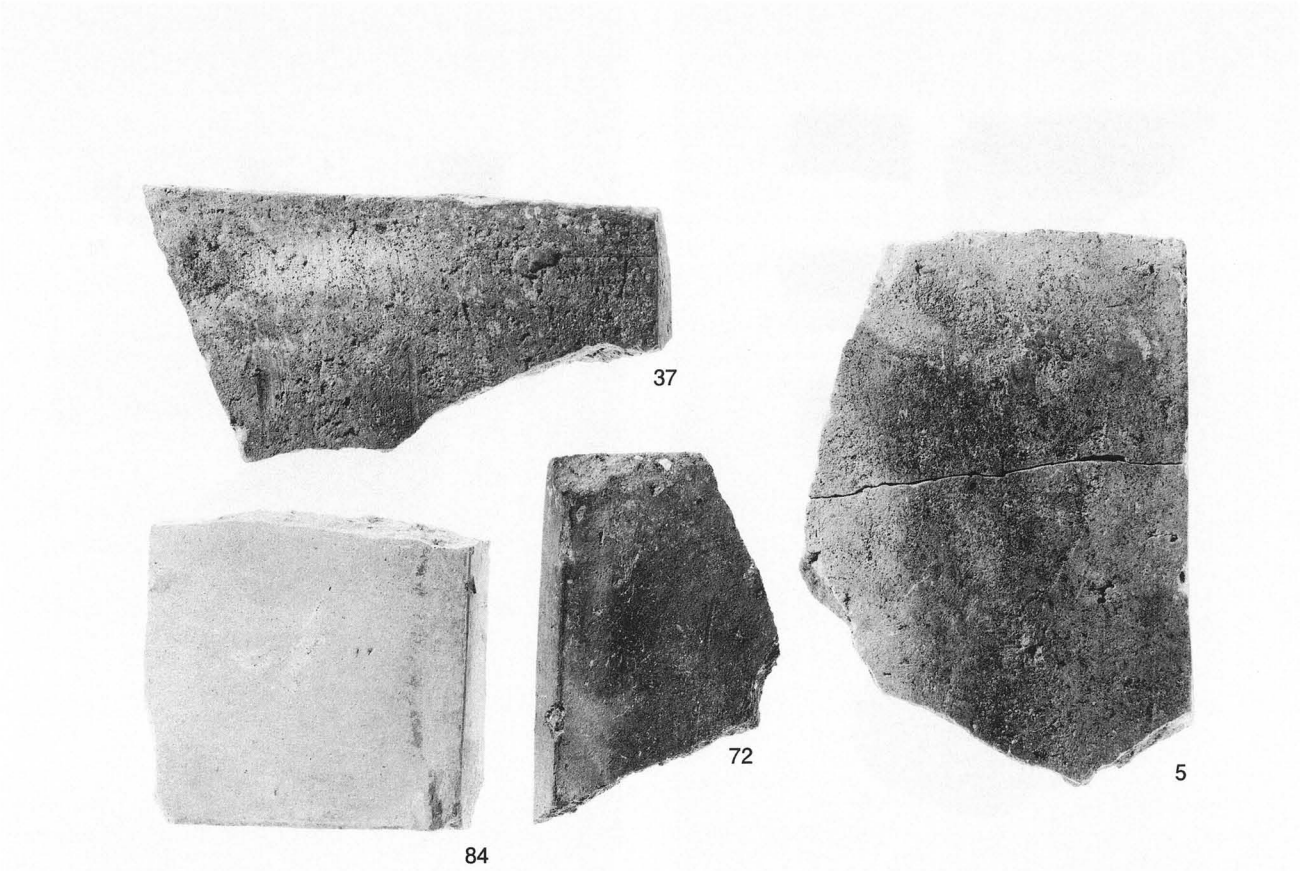
6　SK118 断面



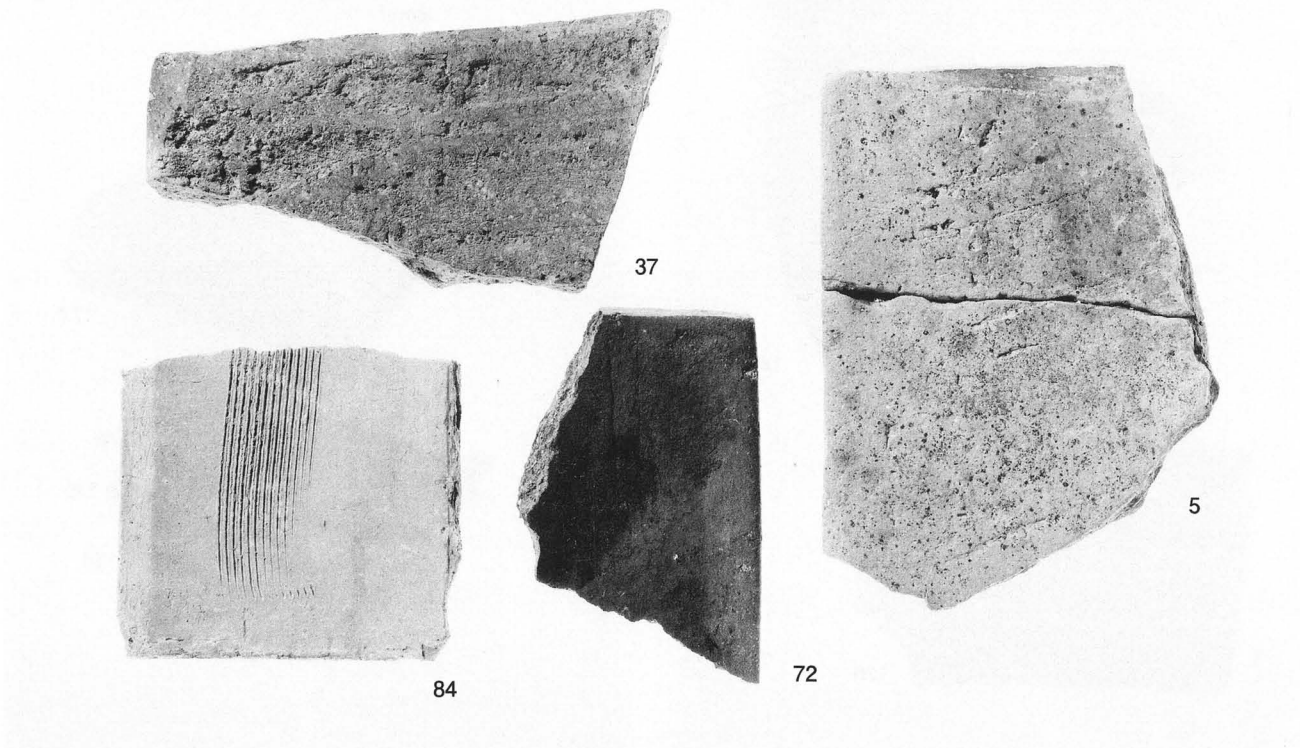
7　SK119 断面



8　SK122 断面

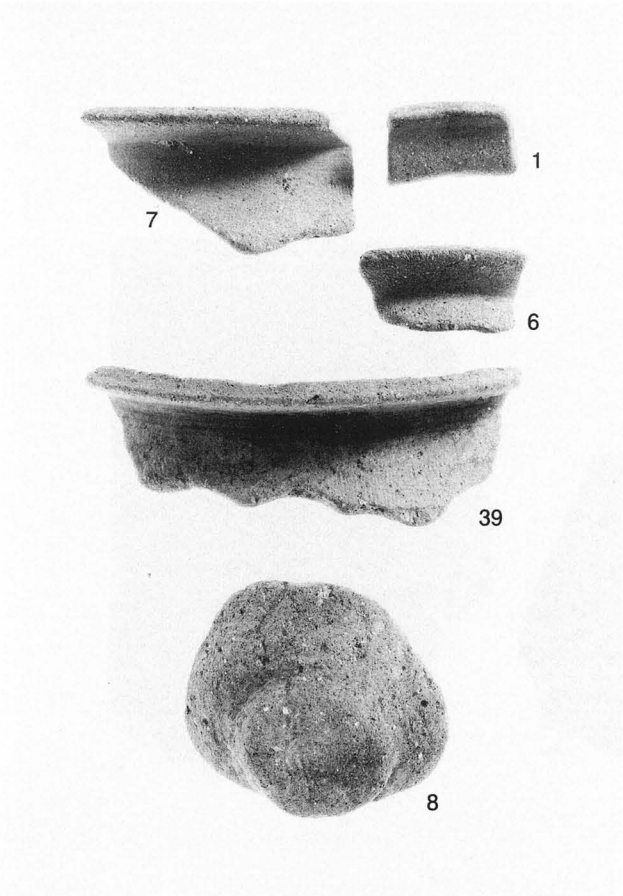


１ 第２遺構面出土平瓦（凸面）

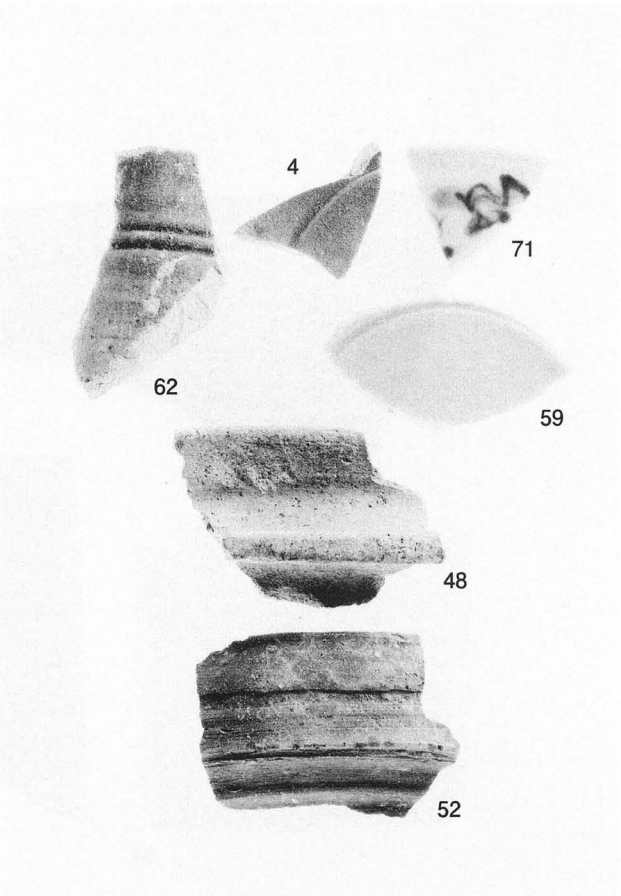


２ 第２遺構面出土平瓦（凹面）

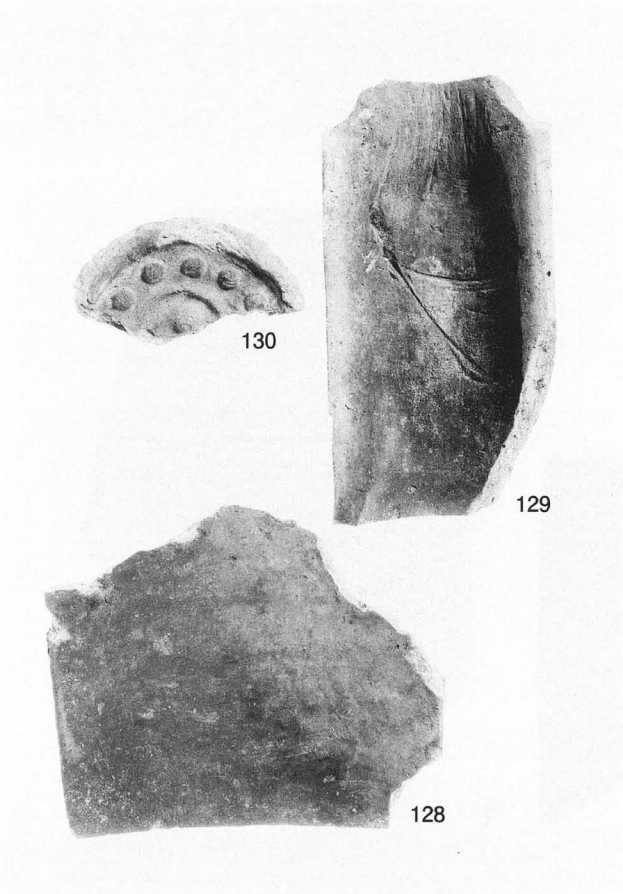
図版 10



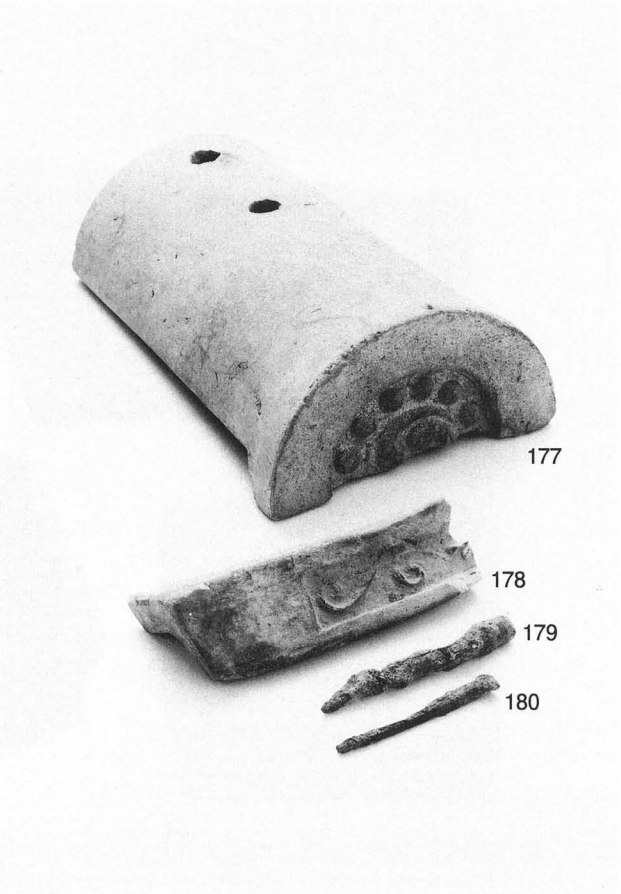
1 第２遺構面出土弥生土器



2 第２遺構面出土土器・陶磁器



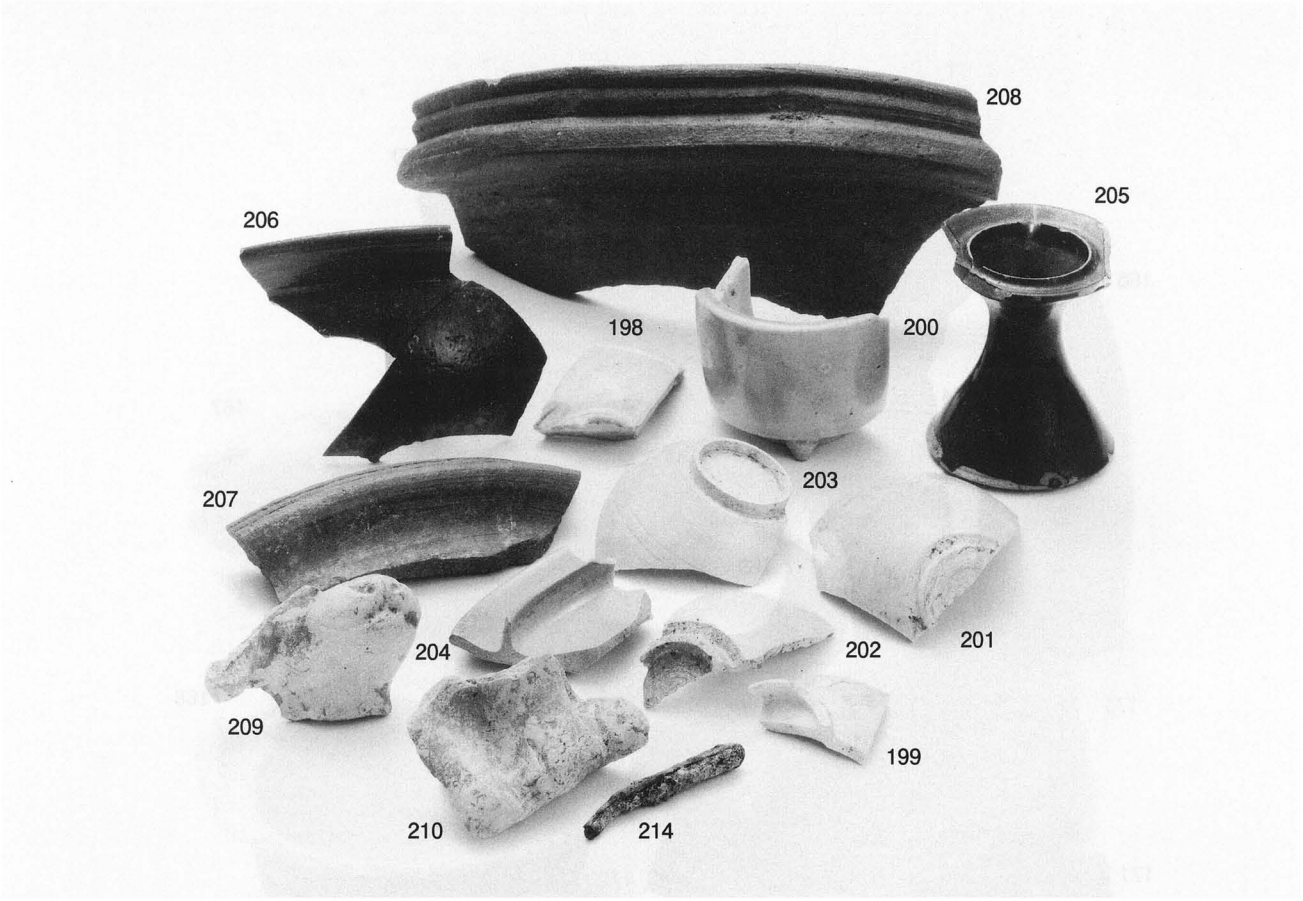
3 SK104 出土瓦



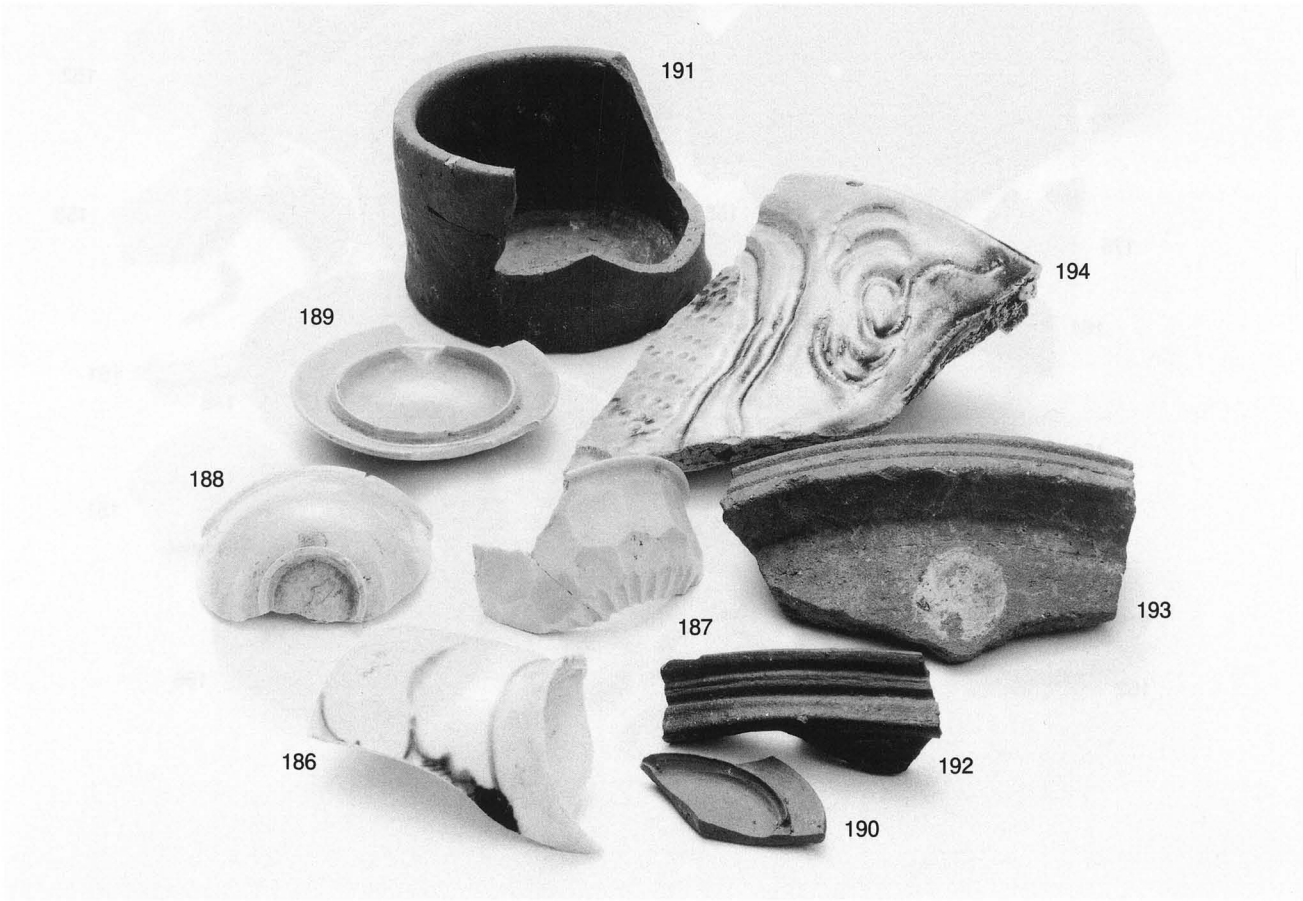
4 SK112 出土瓦・鉄釘

SK112 出土土器・陶磁器

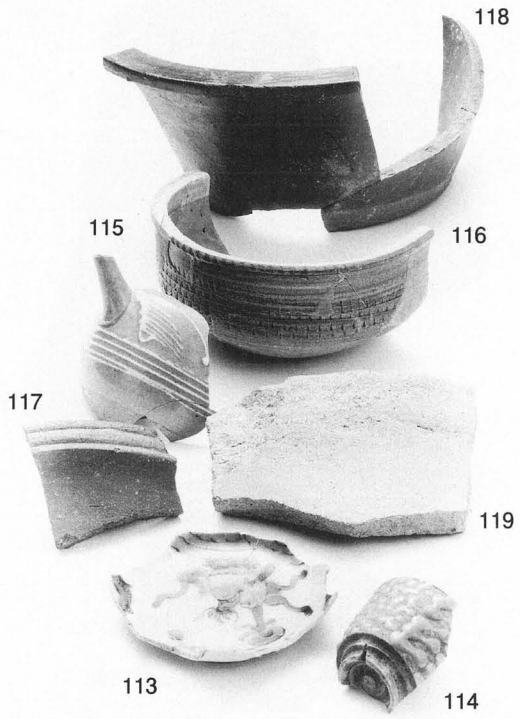
図版 12



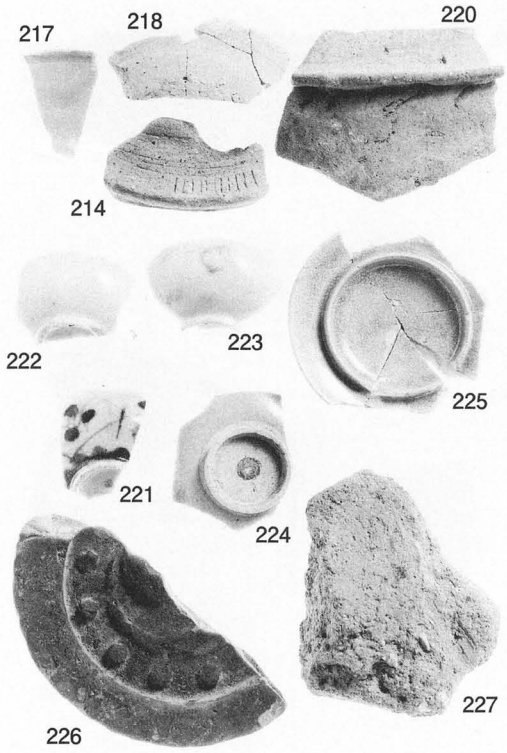
1 SK113 出土土器・陶磁器・鉄釘



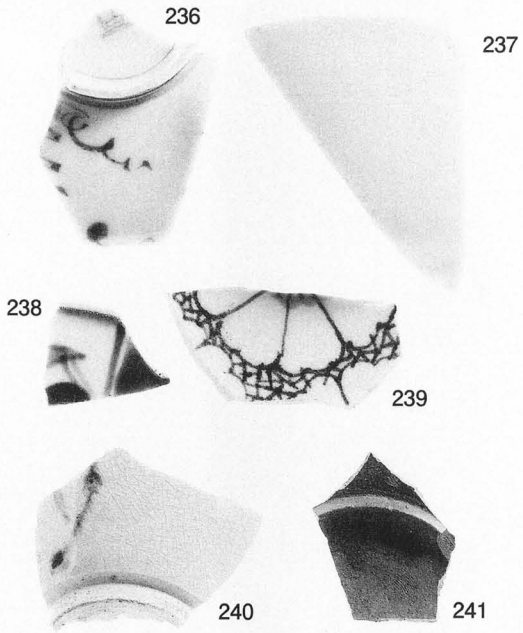
2 SK125 出土陶磁器



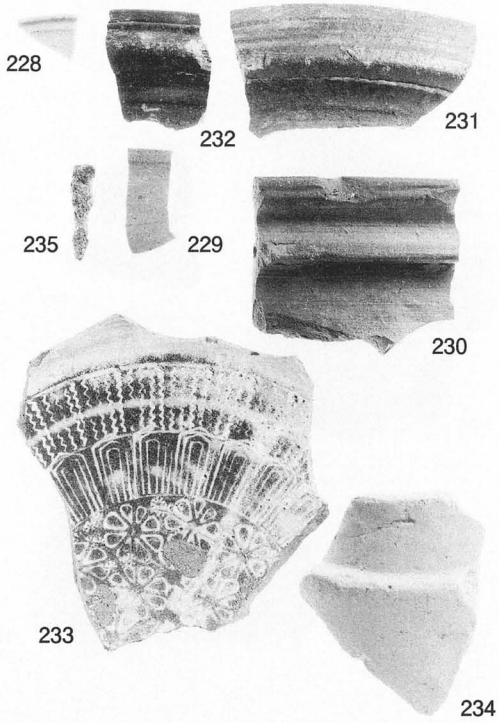
1 SK101 出土土器・陶磁器



2 SX101 出土遺物

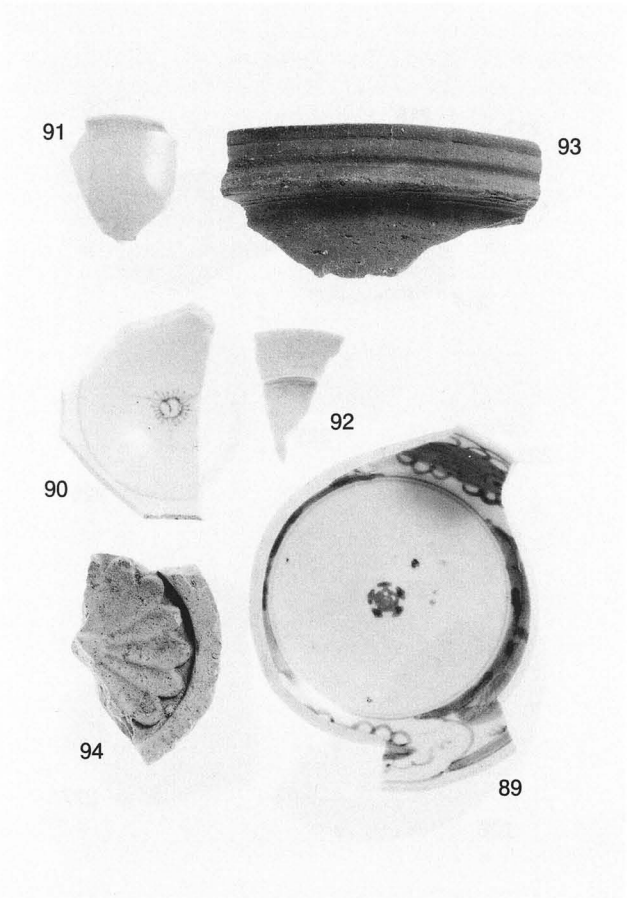


3 SX102 出土陶磁器

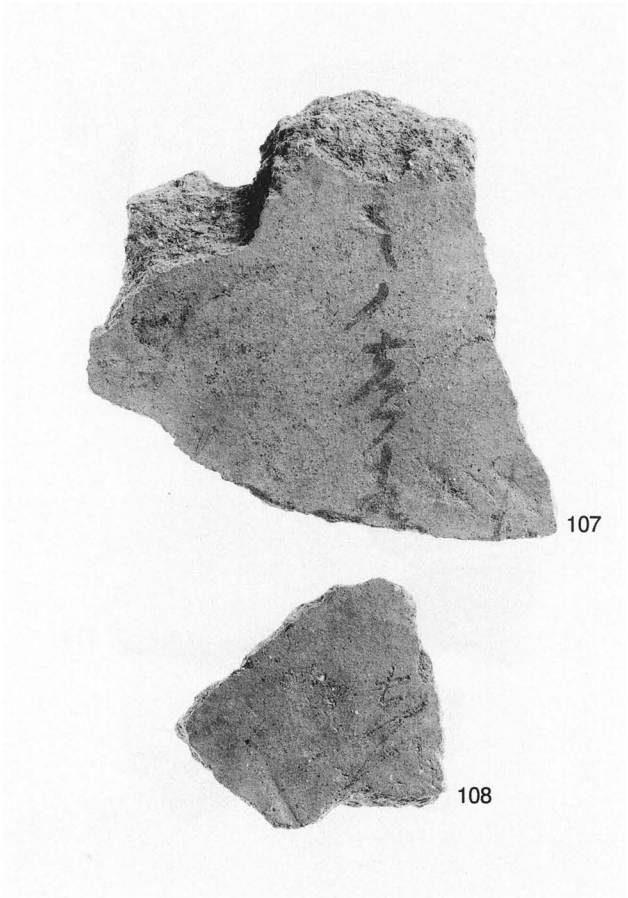


4 SX103 出土遺物

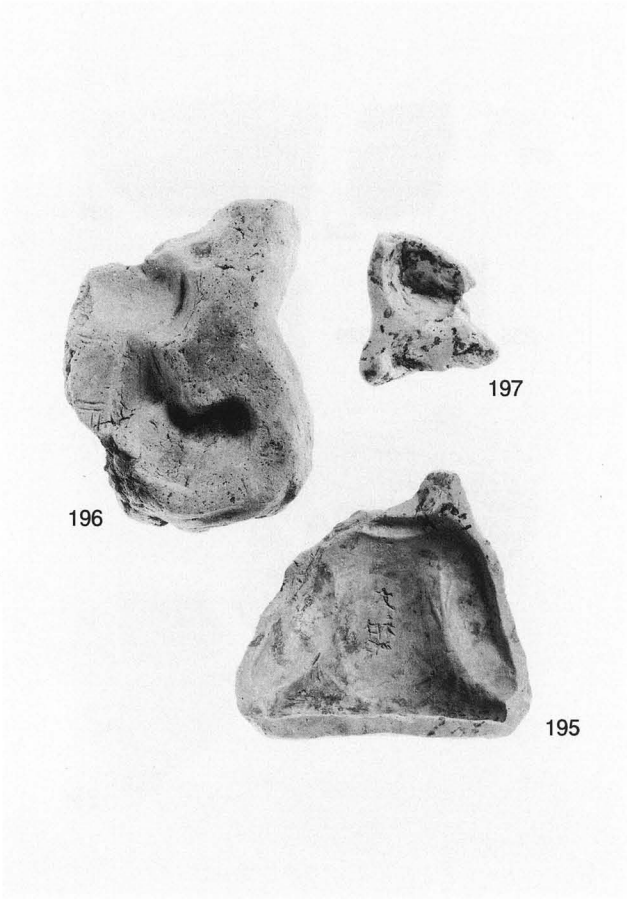
図版 14



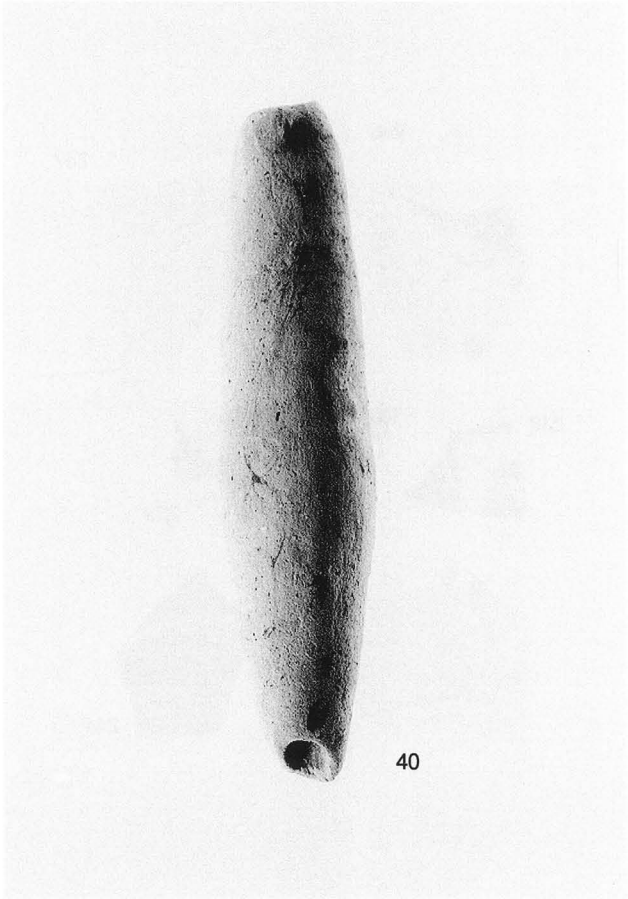
1　SE102 検出時出土遺物



2　SE101 出土墨書・刻書土器

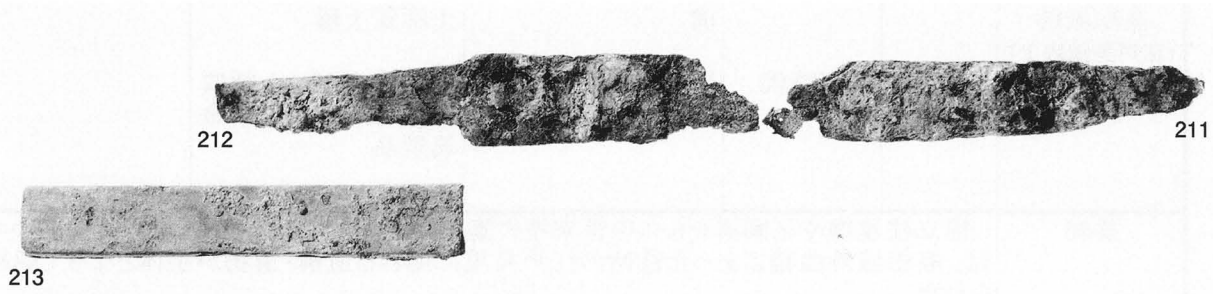


3　SK125 出土土型



4　SK210 出土土錘

1　SE101 出土鏡



2　SK113 出土小柄

3　SK112 出土金属製品 1

4　SK112 出土金属製品 2

報 告 書 抄 録

ふりがな	たかまつじょうあと(えどながやあとⅠ)
書　　名	高松城跡(江戸長屋跡Ⅰ)
副 書 名	高松海岸線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第1冊
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第115集
編集者名	小川 賢, 渡邊 誠
編集機関	高松市教育委員会
所 在 地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL 087(839)2660
発行年月日	平成20年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査 面積	調 査 原 因
たかまつじょうあと 高松城跡 えどながやあと (江戸長屋跡Ⅰ)	たかまつし 高松市 まるのうち 丸の内	37201		34° 20′ 53″	134° 3′ 6″	H19.6.18 ～ H19.7.31	約84㎡	高松海岸線街路事業

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高松城跡 (江戸長屋跡Ⅰ)	城 館	戦国時代 江戸時代	掘立柱建物, 区画溝 柵列, 井戸, 土坑等	中国産青・白磁 土師質土器 国産陶磁器, 土師質土器類, 近世瓦, 金属製品	

要約	掘立柱建物や区画溝をもつ中世末期の集落跡を確認したほか, 近世以降においては, 高松城外曲輪にあった往時の江戸長屋に関わる遺構・遺物が主体となって認められた。

高松城跡(江戸長屋跡Ⅰ)

編　集　高松市教育委員会
　　高松市番町一丁目8番15号

発　行　高松市教育委員会

発行日　平成20年3月31日

印　刷　有限会社 中央ファイリング